

庄・蔵本遺跡 2

—藤井節郎記念医科学センター新館、附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期、
大塚講堂改修、外来診療棟新設、学生支援センター改修—

2016

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

庄・蔵本遺跡2

—藤井節郎記念医科学センター新営、附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期、
大塚講堂改修、外来診療棟新営、学生支援センター改修—

2016

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

卷頭図版



弥生時代前期中葉の水田畦畔（第24次調査）

序 文

本書は、2011～2012年度に実施した庄・蔵本遺跡第24～26・28・29次の発掘調査報告書です。庄・蔵本遺跡の報告書は、本調査室が単独で発行したものとしては2冊目。徳島県教育委員会との共同で発行したものを含めれば6冊目となります。これまで本遺跡では、計29次の発掘調査が実施され、縄文時代晚期から近世にかけての貴重な文化財が数多く発見されています。その中でも、弥生時代前期のそれは極めて豊富で、初期の農耕集落跡として、学界で注目を集めており、現在、本調査室ではその調査研究と、それを活用した大学教育・地域貢献に努めているところです。

さて、本書で報告する内容の中でも、特に注目されるのは、弥生時代前期の水田跡です。今日、日本列島の水稻農耕は、朝鮮半島からの渡来人によって北部九州にまでもたらされ、結果として弥生時代が始まったとみる考え方方が有力です。本遺跡の水田は、渡来人そのものではなく、北部九州で渡来人と在来人の混血によって生まれた弥生人の子孫がもたらしたものと考えられます。眉山の北側に広がっていた自然地形を巧みに利用した、この水田からは、当時の人々の知恵と土木技術をうかがうことができます。本遺跡ではずいぶん前から水田跡が確認されておりましたが、報告書というかたちで、世に送り出すのは、これが初めてとなります。今後、本書と報告資料が、弥生時代の考古学研究、さらには徳島という地域社会での文化財の保存・活用の一助となることをスタッフ一同祈願します。

最後とはなりましたが、発掘調査、整理作業、そして本書の刊行にあたって、ご協力・ご助言を賜った学内外の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成28年3月31日

徳島大学埋蔵文化財調査室長
端野晋平

例　　言

1. 本書は、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室が2011～2012年度に実施した、本学藏本キャンパスにおける藤井節郎記念医科学センター新館（第24次調査）、附属図書館藏本分館増築II期（第25次調査）、大塚講堂改修（第26次調査）、外来診療棟新館（第28次調査）、学生支援センター改修（第29次調査）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
 2. 整理作業は、中村豊（現・本学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）・山口雄治（現・岡山大学）・石丸恵利子（現・広島大学）、端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・岸本多美子・久米淑子・中原尚子・板東美幸・古川裕美・前田千夏・安山かおり・山本愛子が担当した。
 3. 遺構写真の撮影は中村・遠部慎（現・久万高原町教育委員会）・山口が、遺物写真の撮影は三阪・脇山・端野・板東が担当した。
 4. 本書の執筆は三阪・脇山・端野がおこなった。担当部分は目次に記載したとおりである。
 5. 本書の編集は、端野の指導のもとに、三阪が行った。
 6. 本書で使用した座標の値は、世界測地系に基づく国土座標系の値である。方位は座標北、レベルは海拔標高である。
 7. 土層および土製品の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。
 8. 弥生時代前期の時期区分については、中村（2000・2004）の土器編年従い、I-1様式を突帯文・遠賀川併行期、I-2様式を前期中葉、I-3・4様式を前期末・中期初頭とした。中期以降は、菅原康夫・瀧山雄一（2000）の土器編年を参考とし、（阿波）II～IV様式を中期、（阿波）V様式を後期、（阿波）VI様式を終末期とした。

中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之（編）, 突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 松山, pp. 471-497.

中村豊, 2004. 弥生時代前期末・中期初頭を考える：東四国の視点から. 古代文化 56, 204-212.

菅原康夫・瀧山雄一, 2000. 阿波地域. 菅原康夫・梅木謙一（編）, 弥生土器の様式と編年. 四国編. 木耳社, 東京, pp. 1-130.
 9. 石器石材については中村、陶磁器の产地については安山から教示をえて、各執筆者が同定した。
 10. 本書に掲載した徳島大学構内遺跡の調査記録および出土遺物は、すべて徳島大学埋蔵文化財調査室で保管している。今後、研究・教育の場で積極的に活用されることを期待する。
 11. 発掘調査・整理作業にあたっては以下の方々にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
- 井上智博、植地岳彦、氏家敏之、大北和美、勝浦康守、久保脇美朗、栗林誠治、小林和貴、近藤玲、佐々木由香、鈴木三男、高島芳弘、能代修一、別所秀高（敬称略・五十音順）。

目 次

第1章 地理的・歴史的環境と既往の調査	(三阪) 1
第1節 庄・藏本遺跡について	1
第2節 地理的環境	1
第3節 歴史的環境	1
第4節 既往の調査	5
第5節 本書報告地点と遺構名について	8
第2章 第24次調査（藤井節郎記念医科学センター新営地点）	(端野) 13
第1節 調査の概要	13
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査体制と期間	
3. 調査地点の位置と区割り	
4. 調査の概要	
第2節 調査成果	16
1. 基本層序	
2. 第3遺構面の遺構	
3. 第1・2遺構面の遺構と遺物	
4. 包含層・擾乱出土遺物	
第3章 第25次調査（附属図書館藏本分館増築II期地点）	(三阪) 39
第1節 調査の概要	39
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査体制と期間	
3. 調査地点の位置と区割り	
4. 発掘調査の概要	
第2節 調査成果	40
1. 基本層序	
2. 遺構と遺物	
第4章 第26次調査（大塚講堂改修地点）	(脇山) 47
第1節 調査の概要	47
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査体制と期間	
3. 調査地点の位置と区割り	
4. 調査の概要	

第2章 第28次調査（外来診療棟新営地点）	50
第1節 調査の概要	50
1. 基本層序	
2. 第3遺構面の遺構と遺物	
3. 第2遺構面の遺構と遺物	
4. まとめ	
第5章 第29次調査（学生支援センター改修地点）	(三版) 65
第1節 調査の概要	65
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査体制と期間	
3. 調査地点の位置と区割り	
4. 調査の概要	
第2節 調査成果	67
1. 基本層序	
2. 第3遺構面の遺構と遺物	
3. 第2遺構面の遺構と遺物	
4. 包含層・擾乱出土遺物	
第6章 第29次調査（学生支援センター改修地点）	(脇山) 97
第1節 調査の概要	97
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査体制と期間	
3. 調査地点の位置と区割り	
4. 調査の概要	
第2節 調査成果	99
1. 基本層序	
2. 第3遺構面の遺構と遺物	
3. 第2遺構面の遺構と遺物	
4. 第1遺構面の遺構と遺物	
5. まとめ	
第7章 総括	(三版) 129
第1節 弥生時代	129
1. 前期中葉	
2. 前期末・中期初頭	
3. 後期・終末期	
第2節 古墳時代以降	132
1. 古墳時代	
2. 古代・中世	
3. 近世・近現代	

挿図目次

第1図 庄・藏本遺跡と周辺遺跡の位置	4
第2図 庄・藏本遺跡の既往調査地点と本書報告地点の位置	6
第3図 作業風景	13
第4図 現地説明会風景	13
第5図 藤井節郎記念医科学センター新営地點の位置	14
第6図 調査地點の区割りと土層断面の位置	15
第7図 北区 A-A' 土層断面	17
第8図 北区 B-B'・C-C'・F-F' 土層断面	18
第9図 北区 D-D'・E-E' 土層断面	19
第10図 南区 G-G'・H-H' 土層断面	20
第11図 南区 I-I' 土層断面	21
第12図 南区 J-J' 土層断面	22
第13図 南区 K-K' 土層断面	23
第14図 水田区画の法量	24
第15図 北区第3遺構面平面図	25
第16図 南区第3遺構面平面図	26
第17図 水田畦畔の全景	27
第18図 水田畦畔の検出状況	29
第19図 水田畦畔に伴う遺物の出土状況	30
第20図 庄・藏本遺跡基本層序模式図	30
第21図 遺構の土層断面（第3遺構面）	31
第22図 北区第1・2遺構面平面図	32
第23図 溝の完掘状況	33
第24図 遺構の土層断面（第1・2遺構面）	34
第25図 第1・2遺構面の遺構出土遺物	36
第26図 包含層・擾乱出土遺物	36
第27図 包含層出土遺物	37
第28図 遺構全体図	41
第29図 西区北壁 A-A' 土層断面	42
第30図 西区旧河道 a-a' 土層断面	43
第31図 出土遺物	44
第32図 調査風景	47
第33図 調査地點の区割りと土層断面の位置	49
第34図 第2調査区東壁 A-A' 土層断面	51
第35図 第4調査区北壁 B-B' 土層断面	51
第36図 第6調査区南壁 C-C'・D-D' 土層断面	52
第37図 溝1～3完掘状況（南から）	53
第38図 第3遺構面全体図	54
第39図 旧河道1 土層断面	55
第40図 旧河道1 出土遺物1	55
第41図 第2遺構面全体図	56
第42図 旧河道1 出土遺物2	57
第43図 旧河道1 出土遺物3	58
第44図 旧河道2 出土遺物	59
第45図 溝5	61
第46図 井戸1 出土遺物	61
第47図 不明遺構1・2	61
第48図 撥乱出土遺物	62
第49図 第3遺構面全体図と土層断面の位置	66
第50図 A区中央西壁 A-A'・東壁 B-B' 土層断面	68
第51図 B区西壁 C-C'・東壁 D-D' 土層断面	69
第52図 B区南壁 E-E' 土層断面	70
第53図 C1区東壁 F-F' 土層断面	71
第54図 C1区南壁 G-G' 土層断面	72
第55図 C1区サブトレーン東壁・南壁 H-H' 土層断面	73
第56図 A区第3遺構面平面図	75
第57図 A区第3遺構面全景（西から）	75
第58図 B区第3遺構面平面図	76
第59図 C1区第3遺構面平面図	77
第60図 C2区第3遺構面平面図	78
第61図 B区第3遺構面全景（西から）	79
第62図 C1・2区第3遺構面全景（南から）	79
第63図 水田畦畔検出状況・遺物出土状況、土坑状の窪み I-I'・J-J' 土層断面	80
第64図 水田出土遺物	81
第65図 自然落ち込み	83
第66図 自然落ち込み出土遺物	84
第67図 第2遺構面全体図	86
第68図 B区第2遺構面平面図	87
第69図 C1区第2遺構面平面図	88
第70図 C2区第2遺構面平面図	89
第71図 溝土層断面・完掘状況	90
第72図 土坑・ピット土層断面	91
第73図 包含層・擾乱出土遺物	93
第74図 調査風景	97
第75図 調査区の区割りと土層断面の位置	98
第76図 南東区南壁 A-A'・西壁 B-B' 土層断面	100

第77図	南区南壁 C-C' 土層断面	101
第78図	西区西壁 D-D'・E-E' 土層断面	102
第79図	第3遺構面全体図	103
第80図	溝27・31	105
第81図	溝28~30	106
第82図	溝29	107
第83図	溝30	107
第84図	溝32	108
第85図	溝1001	108
第86図	第1・2遺構面全体図	109
第87図	溝1002	111
第88図	溝1003	111
第89図	溝04・07	111
第90図	溝20	111
第91図	溝21	112
第92図	溝24	112
第93図	溝25・26	113
第94図	自然流路09	114
第95図	土坑1004	116
第96図	土坑01	116
第97図	土坑02・03	116
第98図	土坑05・06	117
第99図	土坑08	117
第100図	不明遺構10・15	117
第101図	土坑1005	117
第102図	柱穴11~14・16(掘立柱建物)	119
第103図	土坑17	121
第104図	土坑18	121
第105図	土坑19	121
第106図	土坑22	121
第107図	7層出土遺物	123
第108図	6・7層出土遺物	124
第109図	6層出土遺物	124
第110図	4層出土遺物	125
第111図	溝23出土遺物	126
第112図	庄・藏本遺跡の水田城	130
第113図	庄・藏本遺跡弥生時代前期の遺構配置図	
		131

表 目 次

第1表	庄・藏本遺跡既往調査一覧表	7
第2表	遺構名対照表	9
第3表	出土遺物観察表	45
第4表	包含層・擾乱出土遺物観察表	94

図 版 目 次

巻頭図版	弥生時代前期中葉の水田畦畔(第24次調査)	
図版1	第24次調査地点出土遺物	
図版2	第25次調査地点出土遺物	
図版3	第26次調査地点出土遺物1	
図版4	第26次調査地点出土遺物2	
図版5	第28次調査地点出土遺物1	
図版6	第28次調査地点出土遺物2	
図版7	第29次調査地点出土遺物1	
図版8	第29次調査地点出土遺物2	
図版9	第29次調査地点出土遺物3	

第1章 地理的・歴史的環境と既往の調査

第1節 庄・蔵本遺跡について

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、徳島市庄町1丁目および蔵本町2丁目・3丁目にまたがり所在する。2006年に刊行された徳島県遺跡地図（徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター編 2006）によると、蔵本キャンパスは蔵本遺跡の大部分および庄遺跡の東端を含む範囲を占める（第1図-5・6）。1998年の時点では、蔵本キャンパスの範囲は庄遺跡の一部とみなされていたが、地籍上は大半が蔵本町に属し、庄町には西側の一部だけがかかるところから、本調査室では暫定的に庄・蔵本遺跡と呼称した（北條編 1998、第1図-1）。それ以降、本調査室では、この名称を使用し続けており、もはや正式名称として定着した感がある。そこで、本報告でも遺跡地図での名称とは別に、本学構内の範囲を独自に庄・蔵本遺跡と呼ぶこととする。

第2節 地理的環境

庄・蔵本遺跡は吉野川の支流である鮎喰川の下流域右岸、四国山地東端の眉山北麓に位置する。現在の鮎喰川は、四国山地の雲早山に源を発し、外帶を約50km北流して吉野川と合流する。下流域では、数面の沖積段丘面を伴う扇状地性平野が発達することが知られている。また、上流域で御荷鉾構造線をはじめとする複数の破碎帯を通過していることに加え、地すべりや山腹崩壊により、下流域の平野部において、礫層が厚く発達し、礫床河道となっている（古田 2005）。

吉野川下流域から河口付近の古環境をみると、約2万～1万8千年前には、海面の高さは現在に比べ約100m前後低かったのにに対し、その後の温暖化とともに海面が次第に上昇したとされる。約6千年前の縄文海進のピークには、吉野川河口部の汀線は現在の地形面に比べ標高5m程度内陸に入り込んでいたと推定される。鮎喰川は直接、紀伊水道に注ぎ込み、河口部に三角州性扇状地を形成したとみられている。その後、やや寒冷化する弥生時代以降、海面の低下と吉野川から流出した土砂の堆積により、三角州が発達していく（古田 1996・2005、平井 1998）。

第3節 歴史的環境

本学蔵本キャンパスは、全域が埋蔵文化財包蔵地の指定を受けており、縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡の上に位置する。以下、周辺の遺跡について時代ごとに概観する。

旧石器時代 現在のところ、庄・蔵本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は確認されていない。徳島県内においては、吉野川中流から下流域の北岸に同時代の遺跡が分布する（氏家 2002）。

縄文時代 徳島県内において、縄文時代草創期から前期の遺跡は存在するものの遺跡数は限られ、そ

の様相は不明瞭である。中期になると遺跡数が若干増加し、三好郡東みよし町の加茂谷川支流沿いに位置する加茂谷川1号岩陰や、吉野川中流域の美馬郡つるぎ町貞光前田遺跡では、船元I式・里木II式の土器が確認される。鮎喰川下流域左岸の矢野遺跡（第1図-18）では、中期末から後期前葉の集落が検出されている（湯浅2002）。

一方、庄・藏本遺跡周辺で遺跡形成が本格化するのは後期後葉以降であり（中村編2011）、庄遺跡（第1図-6）の財務省藏本住宅地点で、後期後葉の住居址1棟が検出されている（岡山編1999）。また、庄遺跡各調査地点では、後期末から晩期前半の土器や石器が確認されている（湯浅2002、中村編2011）。晩期後半には、名東遺跡（第1図-11）で自然落ち込み遺構から刻目突帯文土器および石器が出土し（勝浦編1990）、三谷遺跡では刻目突帯文土器と遠賀川式土器の共伴が認められる（勝浦編1997）。

弥生時代 庄・藏本遺跡では、弥生時代前期の居住域・墓域・生産域を含む集落の全容が把握されつつあり、これらが隣接する南藏本遺跡（第1図-4）まで広がることが確認されている（近藤編2014など）。一方、前期中葉～前期末・中期初頭になると、洪水起源砂層によって遺跡の広範囲が埋没した状況が確認されている（中村編2011など）。なお、庄・藏本遺跡や名東遺跡周辺の旧河道は、鮎喰川の旧分流の一部と考えられ、弥生時代初頭の居住域はこれらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に立地していたと想定されている（古田2005）。

中期前葉から中葉には、庄・藏本遺跡周辺において遺物自体は確認されるものの、居住域や墓域は不明瞭である。一方、中期後葉になると、鮎喰川流域では、右岸の名東遺跡や庄・藏本遺跡一帯で数十基の方形周溝墓、左岸の矢野遺跡（第1図-18）で30棟前後の竪穴住居址が確認されるようになるが、水田などの生産域はわかつてない。次の後期初頭になると本地域では、再び遺構、遺物とも極端に減少する（近藤2012）。なお、名東遺跡（第1図-11）では中期後葉から後期初頭と考えられる扁平紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている（勝浦編1990）。

後期前半は、中期後半に比べ竪穴住居址の数は少なく墓域や生産域も不明瞭であるが、次の後期後半から終末期になると、竪穴住居址数は増加し、中期後半の数を上回るようになる。矢野遺跡（第1図-18）では蛇紋岩製勾玉の未成品が出土する遺構や鍛冶関連遺構、突線紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている。矢野遺跡の南に隣接する延命遺跡（第1図-19）では墳丘墓をはじめとする墓域が認められ、石井城ノ内遺跡では水田が確認される（近藤2012）。

古墳時代 眉山西北麓の丘陵尾根上には前期古墳が点在する。節句山古墳群（第1図-12・13）では2号墳から浮彫式獸帶鏡が出土している。八人塚古墳（第1図-15）は本学が測量調査を実施し、全長約60mの前方後円墳で川原石を用いた積石塚であることがわかっている（東ほか2006）。庄・藏本遺跡の南にあたる眉山北麓では、今のところ前期古墳は確認されていない。また、当地域における中期古墳は未発見である。前期から中期の集落については、庄・藏本遺跡などで、溝や井戸、住居址が検出されているが、全容は不明瞭である。後期になると横穴式石室をもつ穴不動古墳（第1図-14）などがみられるが、やはり集落域はわかつてない（北條編1998、中村編2011）。

古代 観音寺遺跡と敷地遺跡（第1図-16・17）の発掘調査により、多数の木簡および多彩な遺構、遺物が確認され（藤川編2002など）、これらの遺跡一帯が国府であった可能性が高いとされている

(藤川 2015など)。一方、庄・蔵本遺跡と名東遺跡周辺では、大型の掘立柱建物跡や墨書き土器、石帯、木製祭祀具などが相対的に多くみられる点から、郡衙のうち名東郡であった可能性が指摘されているが、それを決定づける根拠は未発見である(藤川 2002、早瀬 2002)。また、この一帯では条里地割に伴う可能性がある溝が検出されている。

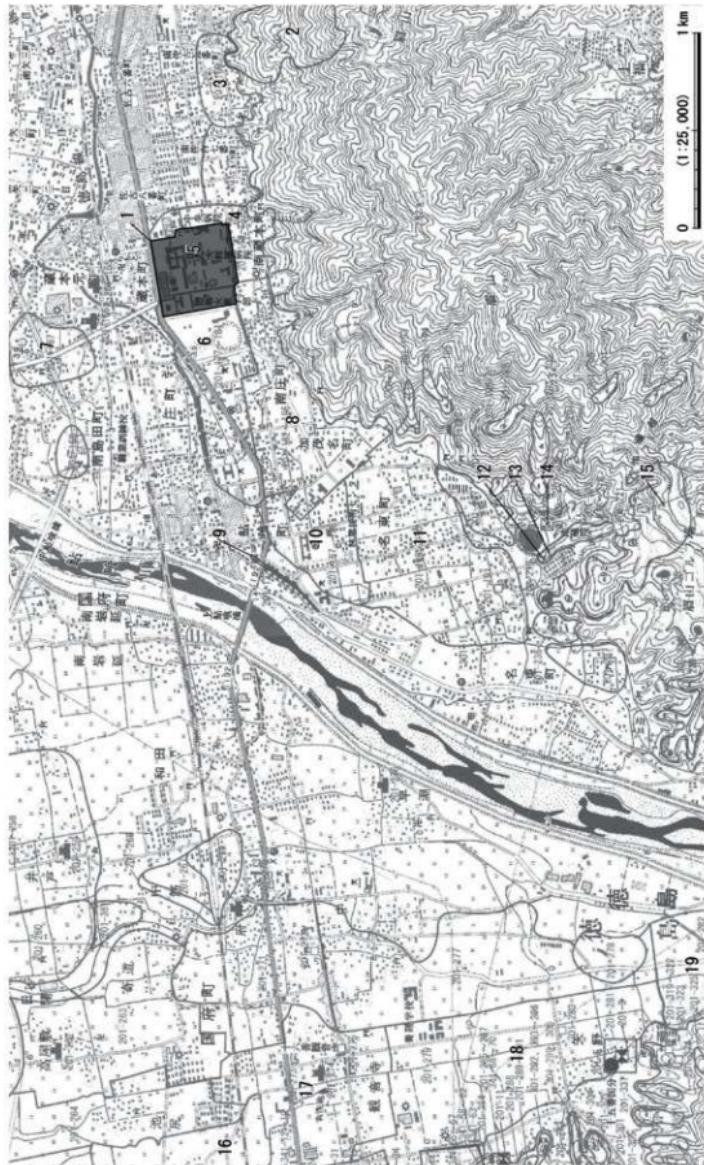
中世 12世紀後半から13世紀が中心時期とされる中島田遺跡(第1図-7)では、道路状遺構の両側に規則的な屋敷地区画が確認されるとともに、楕円形土器において他遺跡で一般的な和泉型瓦器椀よりも吉備系土師器椀が集中して検出されている(石尾 2002b、島田 2008)。そこから当遺跡を物資の集散地と評価し、さらに「市庭」跡(福家 2002)や「市町」(石尾 2002b)と解釈する見解もある。名東遺跡や庄遺跡周辺では、溝を中心とした遺構や瓦器・土師器などは検出されているが、遺跡の性格は不明瞭である(福家 2002、島田 2008)。

近世 近世の庄・蔵本遺跡周辺は、城下町周辺の散村および水田であった可能性が高く、後述する鮎喰川の改修工事などにより水田開発が進められていったと考えられる。その一方で、当該期の水田開発により、古墳時代から中世の遺構の多くが削平された可能性が指摘される(中村編 2011)。また、佐古に所在する蜂須賀家万年山墓所(第1図-2)は、10代藩主蜂須賀重喜が藩政改革に伴って造成した儀式の墓地で、以後蜂須賀家は仏式の奥源寺と儀式の万年山による両墓制となった(徳島県の歴史散歩編集委員会編 2009)。

鮎喰川の河川改修の記録は、1585(天正15)年の蓬庵堤が知られ、徳島城の築城および名東郡の洪水対策のために、右岸の築堤が行われた。その後、享保年間(1716~1736年)や寛政年間(1783~1792年)の工事によって、右岸の連続築堤が完成した。しかし、逆にこれが天井川化を加速させ、今日にいたる洪水被害の一因となったという指摘もある(古田 2005)。ほかに、元禄年間(1688~1704年)には、鮎喰川流域右岸の水不足解消のため、袋井用水(第1図-9)の開削が開始された。また、蔵本付近は伊予街道と讃岐街道の分岐点に位置し、交通の要所でもあったとされる(ふるさと徳島編集委員会編 1991)。

近現代 蔵本キャンパスおよびその周辺には、1907(明治40)年、第10旅団司令部、歩兵第62連隊が設置されたが、第1次大戦後は廃止された。これにかわり1925(大正14)年、歩兵第43連隊が移駐し、1945(昭和20)年まで存続することとなる。また、1908(明治41)年に徳島衛戌病院が設けられ、その後、徳島陸軍病院と改称された。1945年7月4日の徳島大空襲の後、同月24日に1トン爆弾によって、歩兵第43連隊本部を標的とした蔵本空襲があったとされる(山川 1995)。

終戦以降、連隊跡地には、1947年に官制徳島医学専門学校および同附属病院が移転し、翌1948年に徳島医科大学および同附属病院となった。1949年には国立大学徳島大学および同附属病院が設置された。また、陸軍病院跡には徳島県立中央病院、練兵場跡に蔵本公園・賀茂名中学校、実弾射撃場跡に徳島県立林業試験場(林業総合技術センター)が置かれることとなった(ふるさと徳島編集委員会編 1991)。



第1図 庄・藏木道跡と周辺道路の位置（徳島県教育委員会文化財課・附図法入徳島県埋蔵文化財センター編 2006 をもとに作成）

第4節 既往の調査

庄・藪本遺跡では、1982（昭和57）年の徳島県教育委員会による体育館器具庫新設に伴う第1次調査を嚆矢とし、2013年2月までに計29次、35,000m²以上の発掘調査が実施されている（第1表）。本遺跡では縄文時代から近現代にいたる遺構・遺物が検出されており、なかでも弥生時代前期の初期農耕集落の調査成果は特筆される。

まず、当該期の墓域が本遺跡南半の西と東にわかれ分布することがわかっている（中村2002）。とくに西側では、計20基以上の石棺墓・配石墓・土壙墓・土器棺墓が列状に配された状況が明らかにされた（第6次調査、北條編1998）。生産域については、水田が複数地点で検出されており（第17・19・24・28次調査）、東に隣接する南藪本遺跡までこれが広がることがわかっている（近藤編2014）。また、本遺跡南半を東流する旧河道（第5・13・15・16・27次調査）と、ここから分岐する用水路網（第5・9・10・13・15・16・26・27・29次調査など）や井堰（第5・13次調査）が検出され、水田への水の供給システムも判明しつつある。さらに、本遺跡では畠を伴う畠（第20次調査、中村2009b）が確認された点は特筆される。弥生時代前期の畠は全国的にも稀な事例である。第27次調査でも畠状の遺構が検出され（端野ほか2015）、出土した炭化種実の同定・年代測定や土壤の軟X線写真解析により、畠か否かについて慎重に検証を進めている。

居住域については、本遺跡で土坑群（第1～3・15次調査）が検出されているものの、明確な住居址は未検出である。ただし、南に隣接する南藪本遺跡で、当該期の住居址が数基検出されており（徳島市教育委員会1989、中村1998・2002など）、遺跡の南側の眉山北麓に居住域の存在が想定されている。また、当該期の植物種実や木製品を良好な状態で検出した点は、考古学だけではなく植物学的にもきわめて重要な成果といえる（北條編1998、中村2009b・2010c、端野ほか2015など）。

一方、遅くとも前期末・中期初頭になると、洪水起源砂層によって本遺跡の大部分が覆われている状況が確認されている（中村編2011など）。弥生時代前期末・中期初頭から中世にかけては、地層の堆積状況により、各時代の遺構面を個別に検出するのは困難な状況である。そのため、当該期については遺跡の全体像を把握することは難しいが、時期別に注目される遺構・遺物を概観する。

弥生時代中期後葉前後の四隅が切れる方形周溝墓が確認されている（第2・13・16・20・27調査、定森・中村編2005、中村2009b、端野ほか2015など）。また、鉄器生産に関して、弥生時代終末期の鍛冶関連遺構をはじめ、輪の羽口、鉄器、スラグ、石製の鉄槌や砥石が出土している（第16・18次調査、中村2003）。後期後葉から終末期に位置づけられる一〇（形）土坑を伴う住居址や、突線紐式銅鐸片（第27次調査、端野ほか2015）、異体字銘帶鏡片が出土している（第17次調査、中村2000）。

古墳時代前期については、布留式期前後の住居址や井戸（第2次調査、定森・中村編2005）、同中期は溝や井戸が確認されている（第9次調査、北條編1998）。古代には、掘立柱建物や墨書き土器、木製祭祀具、石帶などが出土しており、本遺跡周辺を郡衙である名東郡に比定する説の根拠とされる。また、東西正方向にのびる古代の溝が検出されており、これらは条里地割に伴う可能性がある（第



1. 体育館器具庫新営
2. 体育館新営
3. 課外活動共用施設新営
4. 医学部臨床講義棟新営
5. 動物実験施設新営
6. 青藍会館（同窓会館）新営
7. 医療技術短期大学校舎新営
8. 長井記念ホール・
薬学部実験研究棟新営
9. 医療技術短期大学校舎増築
10. 薬素科学研究センター新営
11. MRI・CT装置棟新営
12. 附属図書館蔵本分館増築
13. 東病棟新営（病棟Ⅰ期）
14. 医薬資源教育研究センター新営
15. 共同溝設置
16. ゲノム機能研究センター新営
17. 中央診療棟新営
18. ゲノム機能研究センター増築
19. 医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修
20. 西病棟新営
21. 医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修
(RI排水処理設備)
22. 西病棟新営その他電気設備
23. 連絡橋建設
24. 藤井節郎記念医科学センター新営
25. 附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期
26. 大塚講堂改修
27. 立体駐車場新営
28. 外来診療棟新営
29. 学生支援センター改修

■ 既往調査地点
■ 本書報告地点

第2図 庄・蔵本遺跡の既往調査地点と本書報告地点の位置

第1表 庄・森本遺跡既往調査一覧表

調査 次数	調査地点	年度	調査期間	調査主体	調査担当者 (○は調査主任)	面積 (m ²)	文献
1	体育館器皿庫新営	1982	1982年11月30日～1983年2月5日(2か月)	徳島県教育委員会	島澤賢二、秋山浩一ほか	147	中村編2010
2	体育館新営	1983	1983年1月中旬～1983年11月30日(10か月)	徳島県教育委員会	福家清司、久保脇美朗ほか	1160	定森・中村編2005、中村編2010
3	課外活動共用施設新営	1984	1984年7月3日～1984年8月10日(1か月)	徳島県教育委員会	福家清司、久保脇美朗ほか	157	中村編2011
4	医学部臨床講義棟新営	1985	1985年4月25日～1985年7月14日(3か月)	徳島県教育委員会	松永住美、大谷泰久ほか	655	中村編2010
5	動物実験施設新営	1985	1985年9月2日～1985年12月28日(4か月)	徳島県教育委員会	松永住美、大谷泰久ほか	1321	中村編2008
6	青藍会館(同窓会館)新営	1986	1986年12月11日～1987年3月20日(3か月)	徳島大学	岡内三真、河野雄次ほか	540	北條編1998
7	医療技術短期大学校舎新営	1987	1987年4月1日～1987年8月31日(4か月)	徳島県教育委員会	羽山久男、久保脇美朗ほか	870	中村編2011
8	長井記念ホール・柔学部実験研究棟新営	1989	1990年1月11日～1990年2月28日(1か月)	徳島大学	岡内三真、桑原久男	1430	北條編1998
9	医療技術短期大学校舎増築	1992	1992年7月11日～1992年9月4日(3か月)	徳島大学	東瀬、○北條芳隆	310	北條編1998
10	酵素化学研究センター新営	1993	1993年5月26日～1993年9月30日(4か月)	徳島大学	東瀬、○北條芳隆	623	北條編1998
11	MRI・CT装置棟新営	1994	1994年2月18日～1994年3月17日(1か月)	徳島大学	東瀬、○北條芳隆	224	HPに概要報告書を掲載
12	附属図書館蔵本分館増築	1994	1994年2月25日～1994年3月24日(1か月)	徳島大学	東瀬、○北條芳隆	288	HPに概要報告書を掲載
13	東病棟新営(病棟Ⅰ期)	1994～1996	1995年3月27日～1996年3月31日(12か月)、1996年4月1日～1996年7月31日(4か月)	徳島大学	東瀬、○北條芳隆	5000	HPに概要報告書を掲載
14	医療資源教育研究センター新営	1995	1995年6月21日～1995年9月5日(3か月)	徳島大学	東瀬、○橋本達也	300	HPに概要報告書を掲載
15	共同溝設置	1996～1997	1996年11月1日～1997年3月31日(5か月)、1997年4月1日～1997年6月7日(2か月)	徳島大学	北條芳隆、橋本達也、○中村豊	1754	HPに概要報告書を掲載
16	ゲノム機能研究センター新営	1998	1998年9月1日～1999年2月2日(5か月)	徳島大学	北條芳隆、○橋本達也、中村豊	1000	HPに概要報告書を掲載
17	中央診療棟新営	1998	1999年8月1日～1999年3月(8か月)	徳島大学	北條芳隆、○中村豊	5000	HPに概要報告書を掲載
18	ゲノム機能研究センター増築	2002	2002年3月11日～2002年6月10日(3か月)	徳島大学	北條芳隆、○中村豊	311	HPに概要報告書を掲載
19	医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修	2006	2006年4月17日～2006年7月25日(3か月)	徳島大学	定森秀夫、○中村豊、中原計	324	中村2009a
20	西病棟新営	2006	2006年6月27日～2007年3月15日(9か月)	徳島大学	定森秀夫、○中村豊、中原計	2645	中村2009b・2010c
21	医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修(RI排水処理設備)	2007	2007年10月22日～2007年11月7日(2週間)	徳島大学	定森秀夫、○中村豊、中原計	45	中村2010a
22	西病棟新営その他電気設備	2007	2008年1月9日～2007年2月14日(1か月)	徳島大学	定森秀夫、○中村豊	103	中村2010b
23	連絡橋建設	2011	2011年4月4日～2011年4月18日(2週間)	徳島大学	○中村豊、遠部慎	100	HPに概要報告書を掲載
24	藤井節郎記念医学センター新営	2011	2011年10月7日～2012年3月14日(5か月)	徳島大学	○中村豊、遠部慎	1800	本書
25	附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	2011	2011年10月6日～2011年10月26日(2週間)	徳島大学	○中村豊、遠部慎	430	本書
26	大塚講堂改修	2012	2012年4月9日～2012年6月1日(2か月)	徳島大学	中村豊、○遠部慎、山口雄治	1030	本書
27	立体駐車場新営	2012～2013	2012年5月1日～2013年4月19日(1か月半)	徳島大学	中村豊、遠部慎、○山口雄治	3610	端野ほか2015
28	外来診療棟新営	2012	2012年7月2日～2013年1月19日(6か月半)	徳島大学	中村豊、遠部慎、山口雄治	3688	本書
29	学生支援センター改修	2012	2012年10月31日～2013年2月5日(3か月)	徳島大学	○中村豊、遠部慎、山口雄治	555	本書

2次調査、定森・中村編 2005)。近世は水田や溝、井戸、暗渠（第11次調査など）、木棺墓（第10次調査、北條編 1998）などが検出されている。近現代においては、前節でみたように旧日本軍や病院の建造物が立地したことや、この一帯が戦災にあったことが知られており、実際に発掘調査でもこれらに関連する遺構や遺物がみつかっている。

第5節 本書報告地点と遺構名について

本書では、2011・2012年度に実施した第24～26・28・29次調査の計5地点について報告を行った。各調査地点の調査にいたる経緯・調査体制、調査成果については、次章以降に詳述した。

なお、遺構名について、本書では調査時のものに改変を加えたため、第2表に遺構名対照表を付した。

（三阪一徳）

文献

- 東潮・中原計・石村友規・大谷育恵・松浦稔, 2006. 徳島市八人塚古墳測量調査報告. 徳島大学総合科学部人間社会文化研究13, 61-83.
- 福家清司, 2002. 中世. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 135-162.
- 藤川智之, 2002. 古代. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 115-134.
- 藤川智之, 2015. 徳島県内における律令期帶金具と出土遺跡. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱11, 71-84.
- 藤川智之(編), 2002. 観音寺遺跡I(観音寺遺跡木簡編):一般国道192号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第40集, 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島, ふるさと徳島編集委員会(編), 1991. ふるさと徳島, 徳島.
- 古田昇, 1996. 徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程. 立命館地理学8, 61-72.
- 古田昇, 2005. 多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野. 平野の環境歴史学. 古今書院, 東京, pp. 209-246.
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・藏本遺跡第27次調査(立体駐車場地点)の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1, 43-97.
- 早瀬隆人, 2002. 古代阿波における官衙と祭祀. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 629-648.
- 平井松午, 1998. 吉野川の河川環境と流域史. 東潮(編), 川と人間:吉野川流域史. 溪水社, 広島, pp. 3-25.
- 北條芳隆(編), 1998. 庄・藏本遺跡1:徳島大学藏本キャンパスにおける発掘調査. 徳島大学埋蔵文化財調査報告書第1巻. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 石尾和仁, 2002a. 近世. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 163-180.
- 石尾和仁, 2002b. 中世阿波における集落の展開. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 647-656.
- 勝浦康守(編), 1990. 名東遺跡発掘調査概要:名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査. 名東遺跡発掘調査委員会, 徳島.

第2表 遺構名対照表

遺構名		調査区	遺構面	遺構名		調査区	遺構面
本書	調査時			本書	調査時		
第24次調査（藤井節郎記念医学センター新営地点）							
土坑1	SK301	北区	第3造構面	土坑・ピット17	SP12	C1区	第2造構面
土坑2	SK302	北区	第3造構面	土坑・ピット18	SP08	C2区	第2造構面
土坑3	SK303	北区	第3造構面	土坑・ピット19	SP07	C2区	第2造構面
不明遺構1	SX301	北区	第3造構面	溝1	SD01	B区	第2造構面
溝1	SD01	北区	第1・2造構面	溝2	SD02	C1・2区	第2造構面
溝2	SD02	北区	第1・2造構面	溝3	SD03	C1区	第2造構面
溝3	SD03	北区	第1・2造構面	第29次調査（学生支援センター改修地点）			
溝4	SD201	北区	第1・2造構面	溝27	S27	南区	第3造構面
溝5	SD202	北区	第1・2造構面	溝28	S28	南区	第3造構面
溝6	SD203	北区	第1・2造構面	溝29	S29	南区	第3造構面
ピット1	SP1	北区	第1・2造構面	溝30	S30	南区	第3造構面
第25次調査（附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期地点）							
旧河道	SR01	西区・東区	第3造構面相当	溝31	S31	南区	第3造構面
自然落ち込み	SX01	西区	第3造構面相当	溝32	S32	西区	第3造構面
第26次調査（大塚講堂改修地点）							
溝1	用水路1	第3・4調査区	第3造構面	溝1001	S1001	東南区	第3造構面
溝2	用水路2	第3～6調査区	第3造構面	溝1002	S1002	東南区	第2造構面
溝3	用水路3	第3～5調査区	第3造構面	溝1003	S1003	東南区	第2造構面
溝4	溝2	第3・6調査区	第2造構面	溝04	S04	南区	第2造構面
溝5	溝3	第6調査区	第2造構面	溝07	S07	南区	第2造構面
旧河道1	旧河道2	第3～5調査区	第2造構面	溝20	S20	南区	第2造構面
旧河道2	旧河道1	第2調査区	第2造構面	溝21	S21	南区	第2造構面
井戸1	SX01	第4調査区	第2造構面	溝24	S24	西区	第2造構面
不明遺構1	SX1	第5調査区	第2造構面	溝25	S25	西区	第2造構面
不明遺構2	SX2	第3調査区	第2造構面	溝26	S26	西区	第2造構面
不明遺構3	SX3	第3調査区	第2造構面	自然流路09	S09	南区	第2造構面
第28次調査（外来診療棟新営地点）							
自然落ち込み	落ち込み	C2区	第3造構面	土坑1004	S1004	東南区	第2造構面
土坑・ピット1	SP06	B区	第3造構面	土坑1005	S1005	東南区	第2造構面
土坑・ピット2	SP04	B区	第3造構面	土坑01	S01	南区	第2造構面
土坑・ピット3	SP05	B区	第3造構面	土坑02	S02	南区	第2造構面
土坑・ピット4	SP17	C2区	第3造構面	土坑03	S03	南区	第2造構面
土坑・ピット5	SP18	C2区	第3造構面	土坑05	S05	南区	第2造構面
土坑・ピット6	SP19	C2区	第3造構面	土坑06	S06	南区	第2造構面
土坑・ピット7	SP16	C2区	第3造構面	土坑08	S08	南区	第2造構面
土坑・ピット8	SP13	C2区	第3造構面	柱穴11	S11	南区	第2造構面
土坑・ピット9	SP14	C2区	第3造構面	柱穴12	S12	南区	第2造構面
土坑・ピット10	SP15	C2区	第3造構面	柱穴13	S13	南区	第2造構面
土坑・ピット11	SP01	B区	第2造構面	柱穴14	S14	南区	第2造構面
土坑・ピット12	SP03	B区	第2造構面	柱穴16	S16	南区	第2造構面
土坑・ピット13	SP02	B区	第2造構面	柱穴17	S17	南区	第2造構面
土坑・ピット14	SP11	C1区	第2造構面	柱穴18	S18	南区	第2造構面
土坑・ピット15	SP10	C1区	第2造構面	柱穴19	S19	南区	第2造構面
土坑・ピット16	SP09	C1区	第2造構面	柱穴22	S22	南区	第2造構面
				不明遺構10	S10	南区	第2造構面
				不明遺構15	S15	南区	第2造構面
				溝23	S23	西区	第1造構面

- 勝浦康守（編），1997，三谷遺跡：徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査，徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会，徳島。
- 木原克司，2002，吉野川下流域の条里施行期と阿波国府の構造，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp. 611-627。
- 近藤玲，2003，徳島の弥生時代：縄文時代から弥生時代へ，徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱3，13-40。
- 近藤玲，2012，徳島市眉山周辺の弥生集落の動態，徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱10，31-48。
- 近藤玲（編），2014，南藏本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第84集，徳島県埋蔵文化財センター，徳島。
- 栗林誠治，2002，古墳時代，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp. 99-114。
- 中村豊，1998，稻作のはじまり：吉野川下流域を中心に，東潮（編），川と人間：吉野川流域史，溪水社，広島，pp. 79-100。
- 中村豊，2000，庄・藏本遺跡発掘調査概要：新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査，徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 中村豊，2002，縄文から弥生へ，徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学，徳島考古学論集刊行会，徳島，pp. 245-258。
- 中村豊，2003，徳島における弥生時代終末期の鉄生産，青藍1，25-36。
- 中村豊，2009a，医療系総合実験研究棟II期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1，1-10。
- 中村豊，2009b，西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1，11-28。
- 中村豊，2010a，庄・藏本遺跡・医学系総合実験研究棟III期改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2，1-9。
- 中村豊，2010b，庄・藏本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2，11-21。
- 中村豊，2010c，概要，国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2，33-42。
- 中村豊（編），2008，庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書，徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 中村豊（編），2010，庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書，体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺，徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 中村豊（編），2011，庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書，弓道場建設に伴う立会調査報告書，徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 岡山真知子（編），1999，庄遺跡III：大蔵省藏本団地宿舎新営工事（第3期工事）関連埋蔵文化財発掘調査報告，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第24集，徳島県埋蔵文化財センター，徳島。
- 定森秀夫・中村豊（編），2005，庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書，徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 島田豊彰，2008，吉野川流域における中世集落の様相，徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱7，17-28。

- 菅原康夫, 2002. 弥生時代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.63-97.
- 徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター (編), 2006. 徳島県遺跡地図, 第2分冊. 徳島.
- 徳島県の歴史散歩編集委員会 (編), 2009. 徳島県の歴史散歩, 歴史散歩 36. 山川出版社, 東京.
- 徳島市教育委員会, 1989. 平成元年度文化財調査報告資料. 徳島.
- 氏家敏之, 2002. 先土器時代 (旧石器時代). 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 11-28.
- 山川浩實, 1995. 戦争から豊かな未来へ. 徳島県立博物館, 徳島.
- 山川浩實, 2005. 徳島大空襲, 徳島の自然と歴史ガイド4. 徳島県立博物館, 徳島.
- 湯浅利彦, 2002. 鍋文時代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.29-61.

第2章 第24次調査(藤井節郎記念医科学センター新営地点)

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

蔵本キャンパスのほぼ中央部に位置する地点に、藤井節郎記念医科学センターを2012年度に建設する計画が提出された。建設予定地の周辺には、弥生時代前期の水田が検出された第17次調査地点(中央診療棟新営地点)、第19次調査地点(医学系総合実験研究棟II期改修地点)が位置する。そのため、予定地の範囲でも、それに関係する遺構・遺物の広がりが予測された。そこで、調査員2名が担当して、約5か月間の予定で発掘調査を実施することになった。調査面積は約1800m²である。

2. 調査体制と期間

調査体制と期間は以下のとおりである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室(室長・中村 豊)
 調査担当 中村 豊
 遠部 慎(埋蔵文化財調査室・助教)

調査補助 中原尚子・板東美幸・前田千夏・山本愛子(以上、施設マネジメント部・技術補佐員)

調査期間 2011年10月7日～2012年3月14日



第3図 作業風景

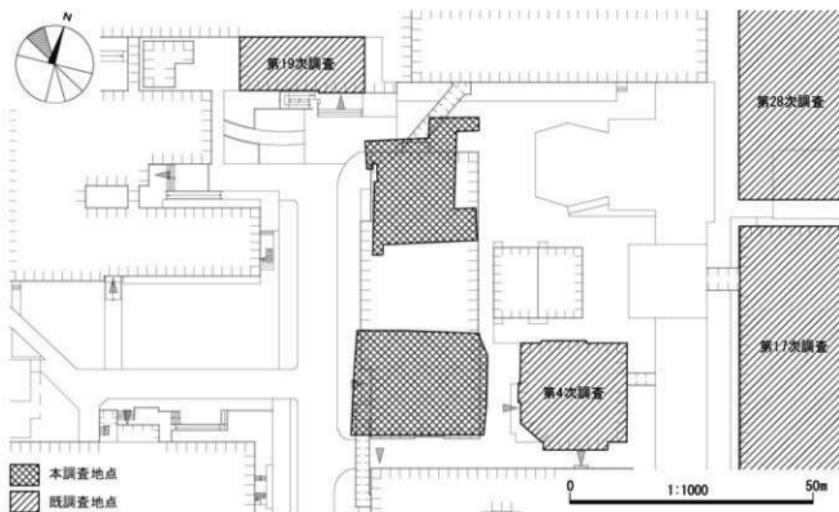
3. 調査地点の位置と区割り

(1) 調査地点の位置

本調査地点は、徳島大学蔵本キャンパスの中央部に位置する(第5図)。北西側には弥生時代前期の水田が検出された第19次調査地点(医学系総合実験研究棟II期改修地点)、東側には近代の水田に伴う暗渠が検出された第4次調査地点(医学部臨床講義棟新営地点)、弥生時代前期の水田、破鏡(異体字銘帶鏡)などが検



第4図 現地説明会風景



第5図 藤井節郎記念医学センター新営地点の位置

出された第17次調査地点（中央診療棟新営地点）、弥生時代前期の水田が検出された第28次調査地点（外来診療棟新営地点）がある。

（2）調査地点の区割り

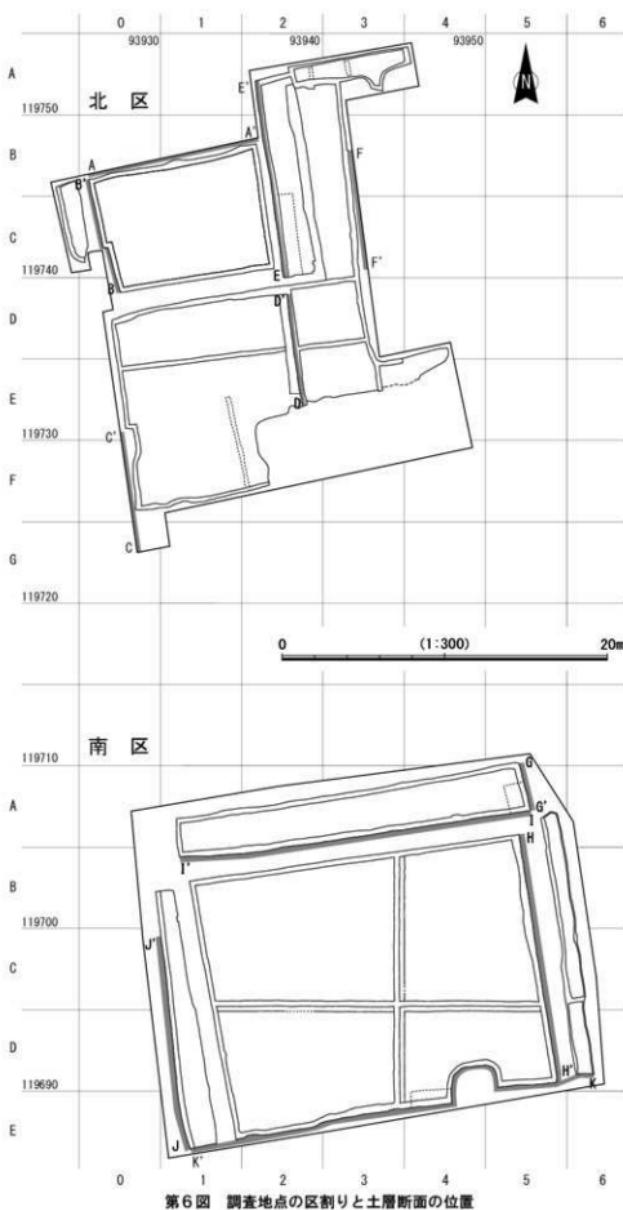
調査にあたっては、建設予定地の北側の掘削範囲を「北区」、南側の掘削範囲を「南区」と呼ぶこととした。そして、それぞれの地区について、調査区外の北西側に原点をとり、南北軸を真北に合わせ、5mグリッドを設定した（第6図）。

4. 調査の概要

本調査地点では、3面の遺構面が調査され、弥生時代I-2様式～中世の遺構が確認された。以下、遺構面ごとにその概要を述べたい。なお、第1遺構面と第2遺構面では、検出された遺構に明瞭な時期差を認めることができなかつたため、両者をまとめて報告する。

（1）第3遺構面

本遺構面では、弥生時代I-2様式の水田畦畔と、弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期のものとみられる土坑3基、不明遺構1基が確認された。水田畦畔は北区・南区の全域で、大畦畔と小畦畔の双方が確認された。これらからなる水田区画は、東西に長い長方形をなしているが、これは南



第6図 調査地点の区割りと土層断面の位置

区から北区にかけて緩く傾斜する地形に沿って、畦畔が造られた結果と考えられる。土坑・不明遺構から遺物は全く出土していないが、これらの所属時期は埋土からみて、第1・2遺構面で検出された遺構の一部と同時期と考えられる。これらの性格は不明である。

(2) 第1・2 遺構面

本遺構面では、弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期のものとみられる溝6条、ピット1基が確認された。北区で検出された6条の溝は、東西方向のもの（溝1・4～6）、北東～南西方向のもの（溝2）、北西～南東方向のもの（溝3）からなる。このように方向を違え、一部に切り合い関係も認められることから、すべての溝が同時に展開していたわけではなく、異なる複数の時期に属する溝が混在しているのは明らかである。残念なことに、これらの溝は、出土遺物がないか、あったとしても少量の弥生土器か土師器、須恵器の小片だけであり、正確な所属時期を確定するにはいたらなかった。ピットは遺物が出土していないため、正確な所属時期の確定は困難であり、性格も明らかではない。

第2節 調査成果

1. 基本層序

本調査地点では、北区で6か所、南区で5か所、合計11か所の土層断面を実測した（第6～13図）。本調査地点の基本層序は大きく14層に分けられる。以下、南区南壁K-K'の土層断面（第13図）にもとづいて詳述する。なお、北区では7層、南区では2層を二つに細分している。現地表面は標高3.3～3.5mであり、そこから標高2.8～3.0m辺りまでは近代以降の造成土となっているが、部分的にそれ以下の標高まで大きく擾乱を受けたところもある。

1層 灰色10Y4/1の粘土からなる。上面の標高は3.0～2.7m、厚さは10～30cmを測る。近代の水田層と考えられる。

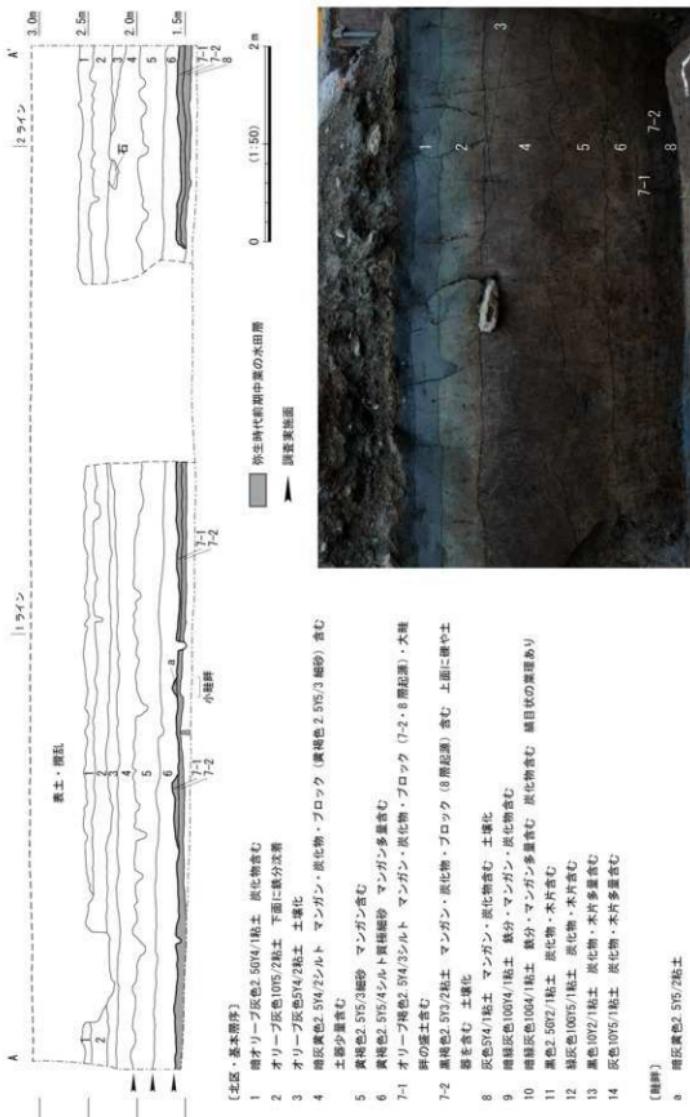
2-1層 灰オリーブ色7.5Y5/3の粘土からなる。鉄分を含む。上面の標高は2.4～2.7m、厚さは10～35cmを測る。近代の水田層と考えられる。

2-2層 褐色10YR4/6の粘土からなる。上面の標高は2.4～2.7m、厚さは5～20cmを測る。近世の水田層と考えられる。

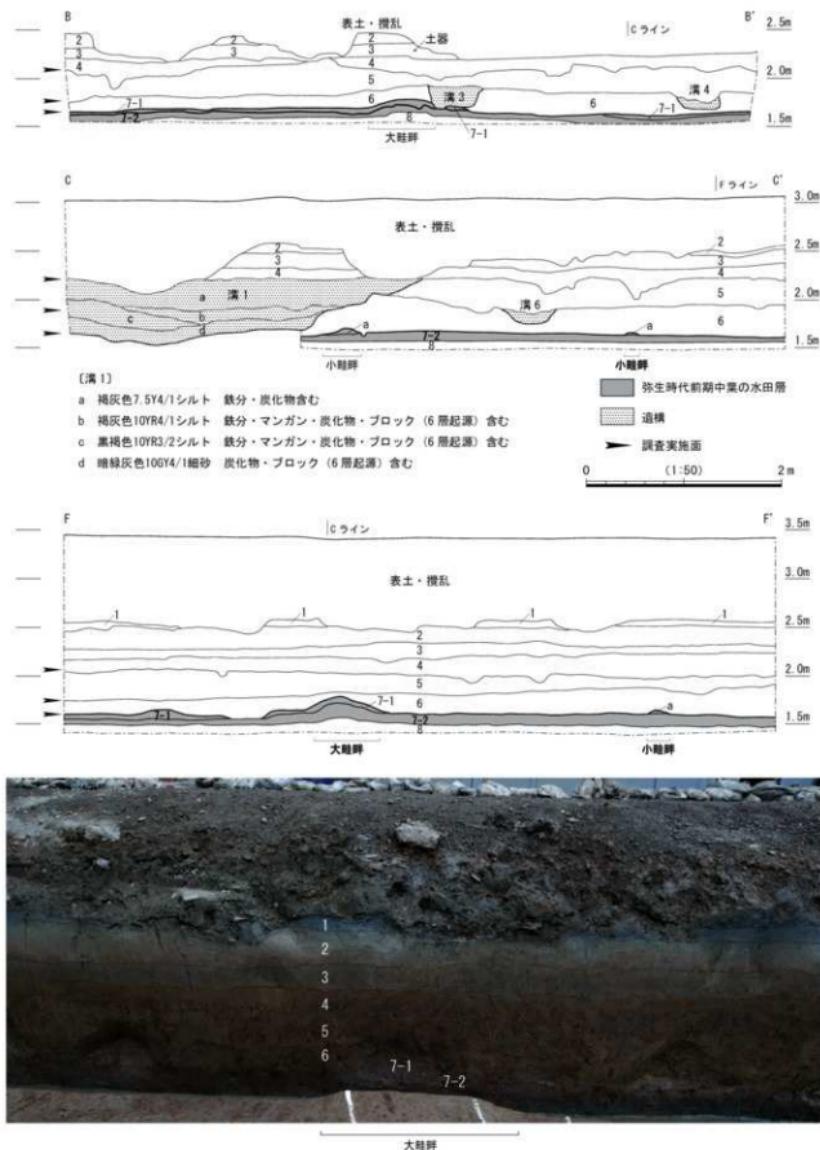
3層 褐灰色10YR4/1の粘土からなる。粘性が強く、下部に鉄分が沈着している。上面の標高は2.3～2.5m、厚さは10～20cmを測る。中世の水田層か。

4層 黒褐色10YR3/2のシルトからなる。マンガンを含む。上面の標高は2.1～2.4m、厚さは5～30cmを測る。弥生時代I-3様式～中世の土壤化層と考えられる。

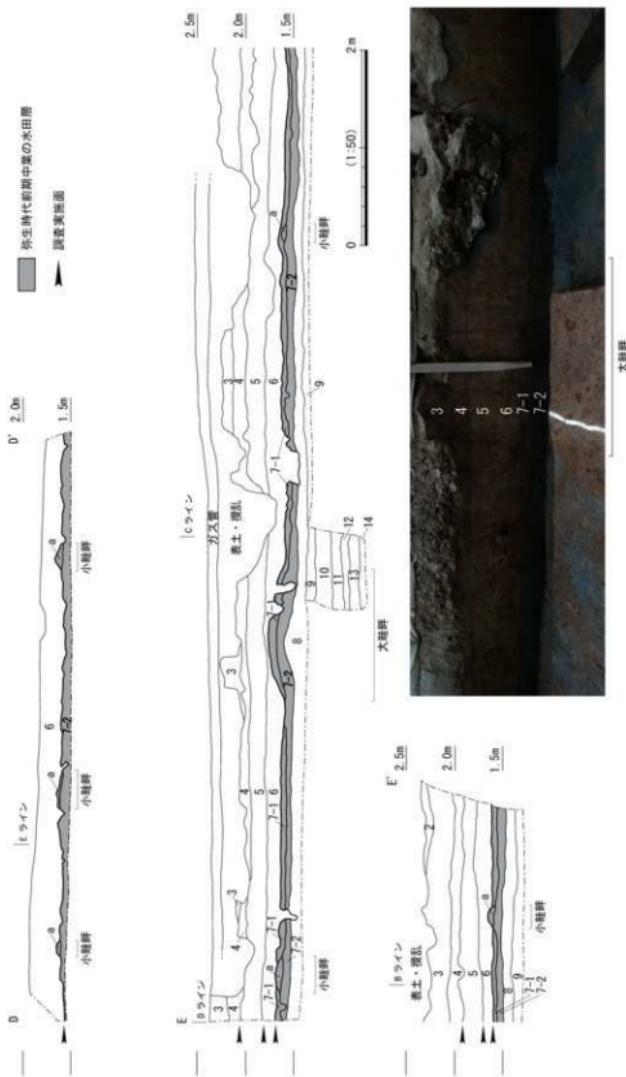
5層 黄褐色2.5Y5/4のシルト質極細砂からなる。鉄分・マンガンを含む。上面の標高は1.9～2.2m、厚さは10～30cmを測る。弥生時代I-3様式の洪水砂起源搅拌層と考えられる。上面では弥生時代I-3様式～中世の遺構が検出された。



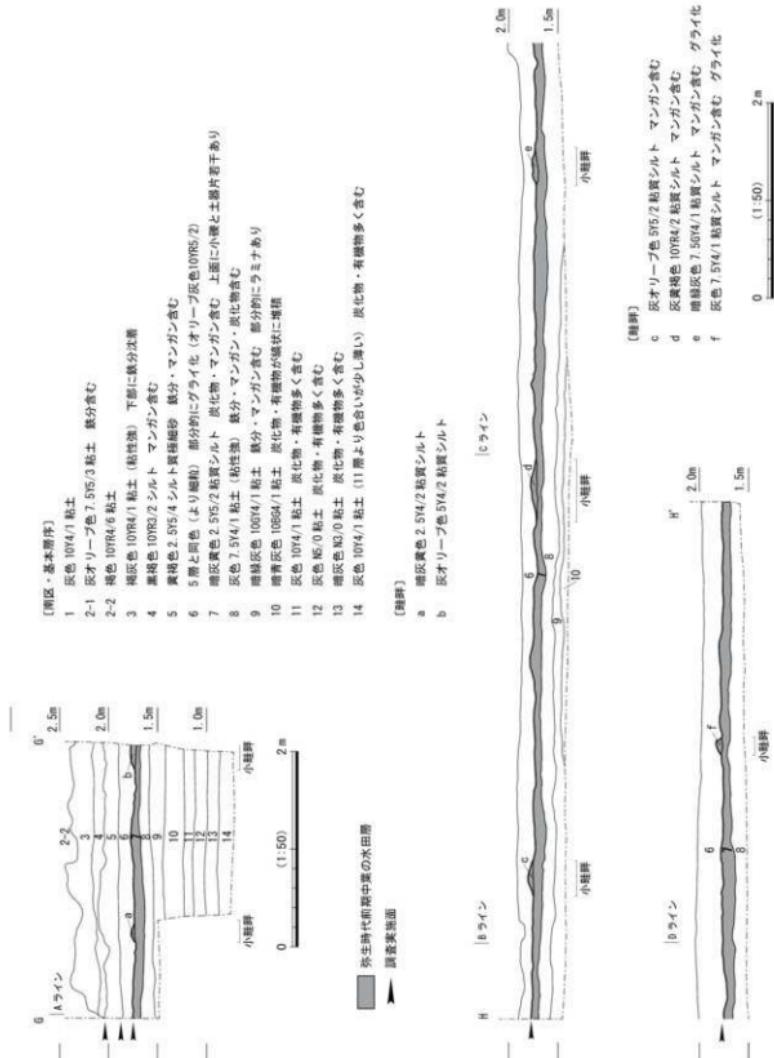
第7図 北区 A-A' 土壌断面



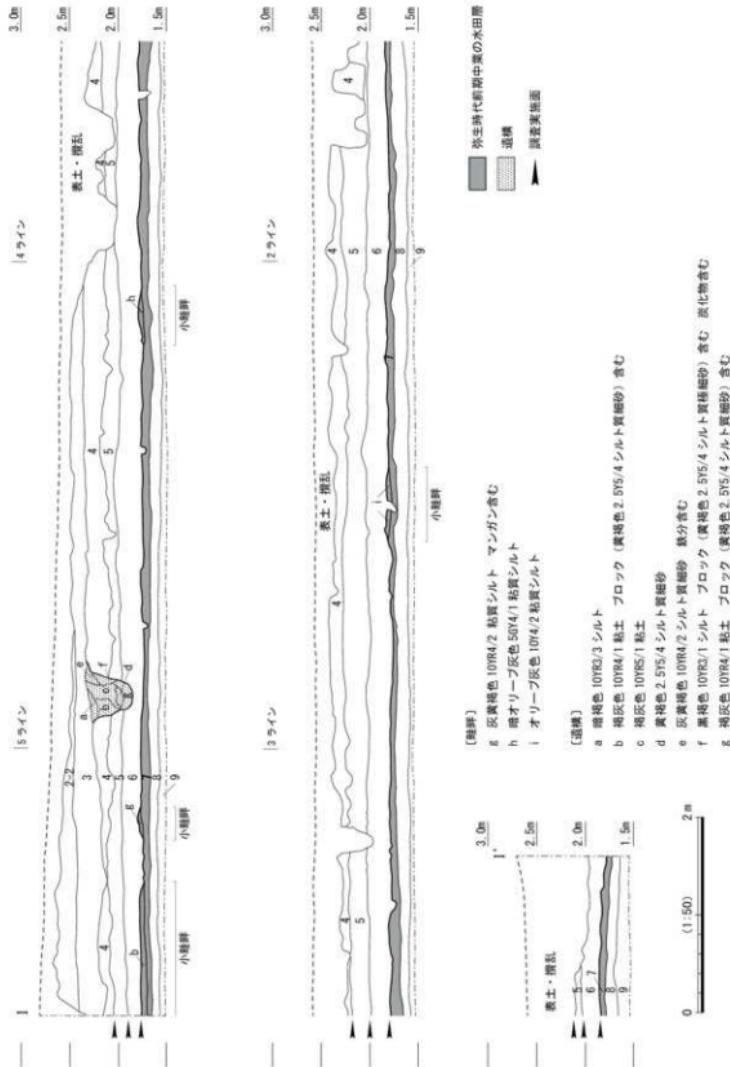
第8図 北区B-B'・C-C'・F-F' 土層断面



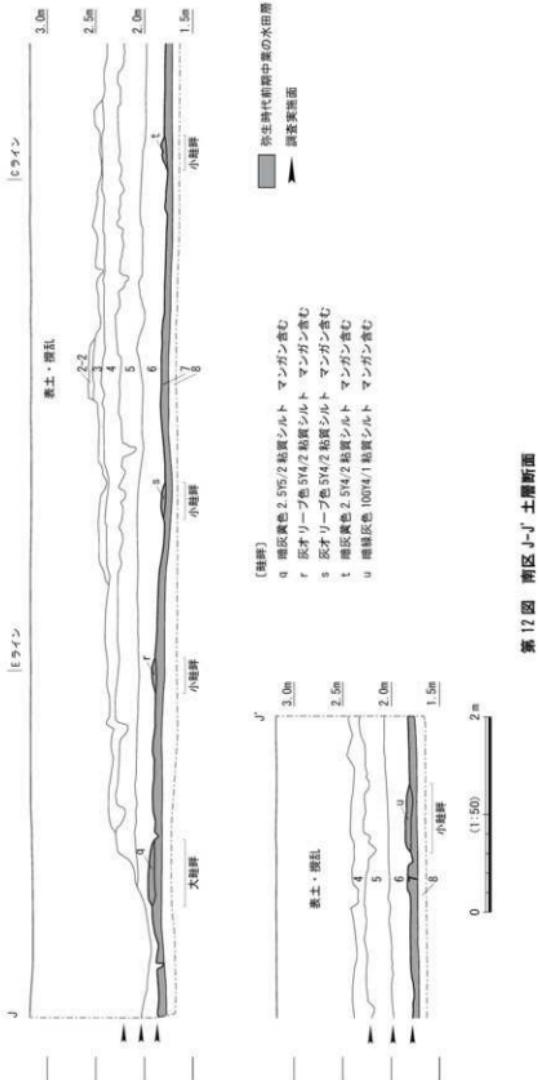
第9図 北区 D-D'・E-E' 土壌断面



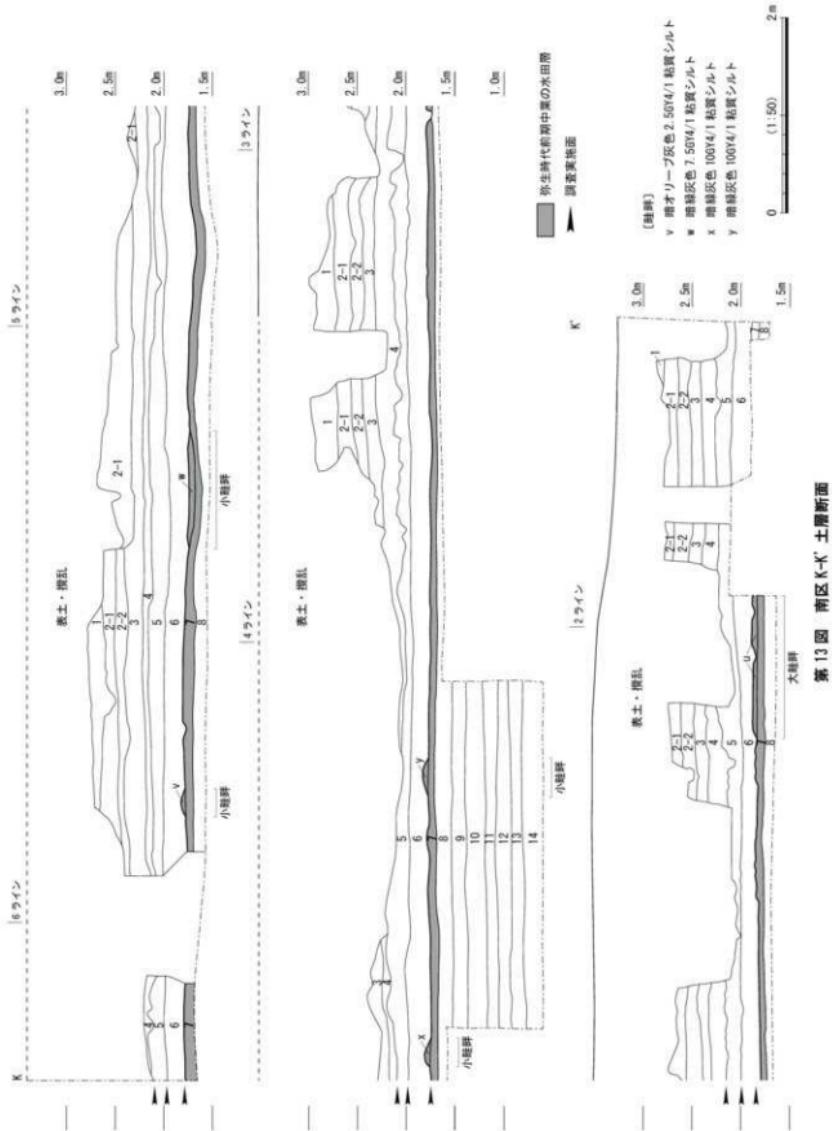
第10圖 南區 G-G' + H-H' 土層斷面



第11圖 南区[-]主層斷面



第12図 南区 J-J' 土層断面

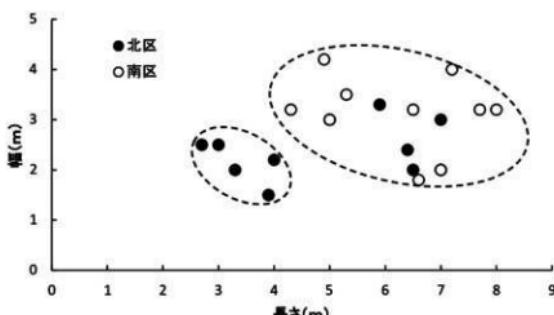


- 6層** 5層と同色だがより細粒の砂からなり、部分的にグライ化している。上面の標高は1.9～2.1m、厚さは10～30cmを測る。弥生時代I～2様式の洪水砂と考えられる。
- 7層** 暗灰黄色2.5Y5/2の粘質シルトからなる。炭化物・マンガンを含む。上面に小礫と土器片を若干含む。上面の標高は1.7～1.8m、厚さは5～10cmを測る。弥生時代I～2様式の水田耕作土と考えられる。上面では水田畦畔が検出された。
- 8層** 灰色7.5Y4/1の粘土からなる。粘性は強い。鉄分・マンガン・炭化物を含む。上面の標高は1.6～1.8m、厚さは10～20cmを測る。縄文時代晩期末～弥生時代I～1様式の土壤化層で、直上層の耕作土の母材と考えられる。
- 9層** 暗緑灰色10GY4/1の粘土からなる。鉄分・マンガンを含む。部分的にラミナが認められる。上面の標高は約1.5m、厚さは10～15cmを測る。湿地の堆積か。
- 10層** 暗青灰色10BG4/1の粘土からなる。炭化物・有機物が縞状に堆積している。上面の標高は約1.4m、厚さは20cmを測る。
- 11層** 灰色10Y4/1の粘土からなる。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は約1.2m、厚さは10～15cmを測る。
- 12層** 灰色N5/0の粘土からなる。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は1.0～1.1m、厚さは10～20cmを測る。
- 13層** 暗灰色N3/0の粘土からなる。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は約0.9m、厚さは10～15cmを測る。縄文時代晩期初頭の堆積土と考えられる。
- 14層** 灰色10Y4/1の粘土からなる。11層よりも色調がやや薄い。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は約0.8mを測る。

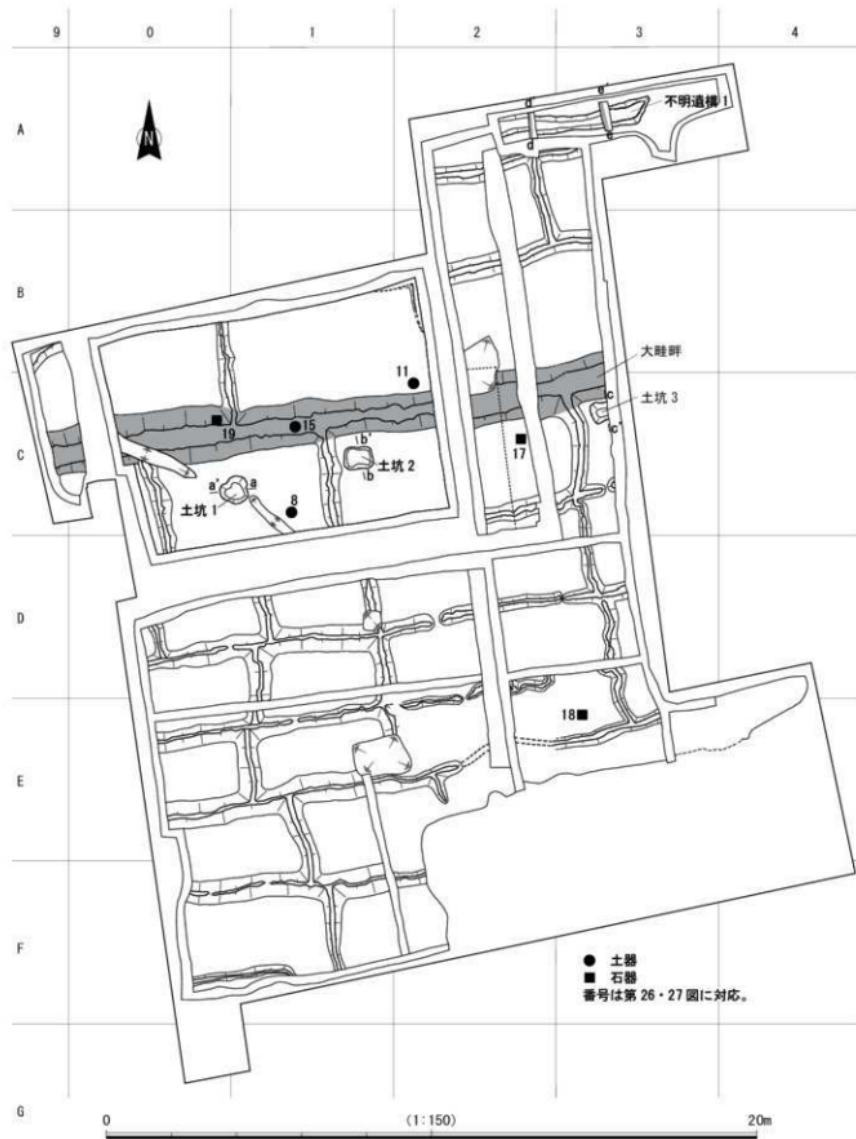
本調査地点では、5層上面を第1遺構面、6層上面を第2遺構面、7層上面を第3遺構面として調査を行った。

2. 第3遺構面の遺構

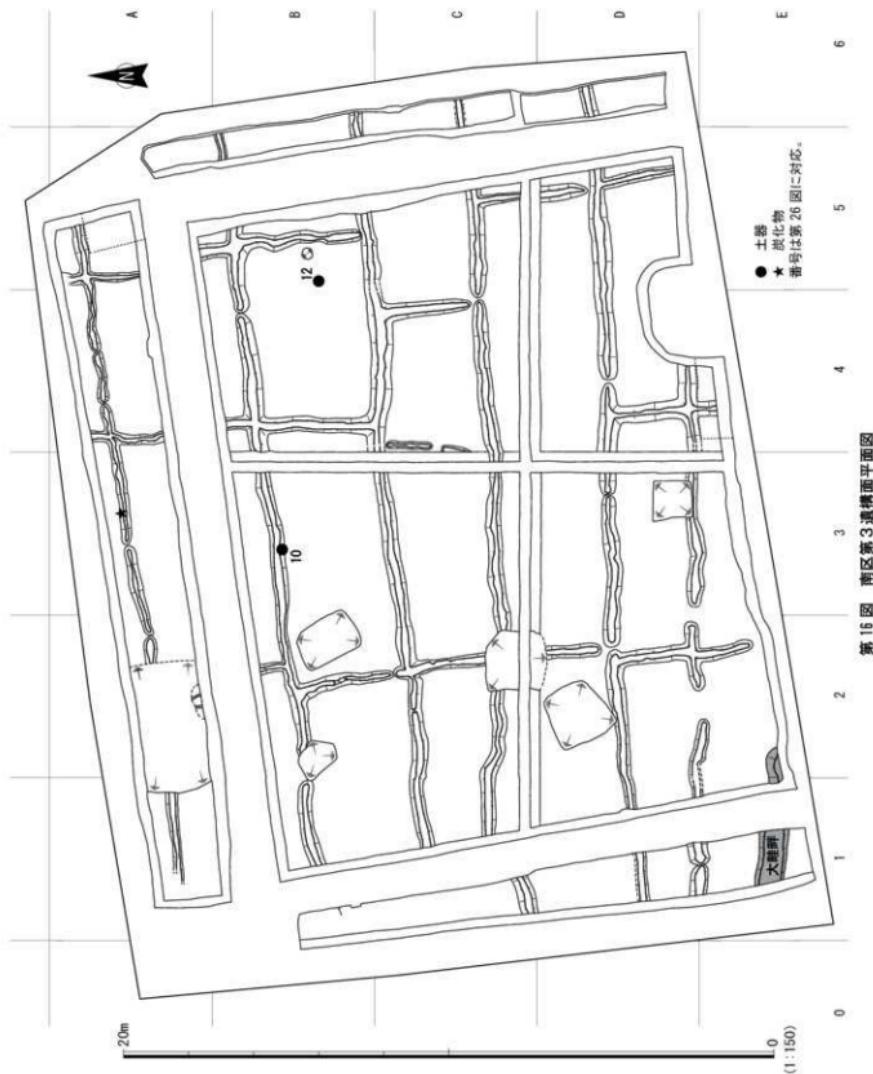
- (1) 水田畦畔(第15～19図、
巻頭図版)
- 北区・南区の全域で水田畦畔を検出した。畦畔は6層の黄褐色シルト質極細砂を掘り下げる過程で検出された暗灰黄色粘土などからなる高まりである。検出された畦畔には大畦畔と小畦畔の二者がある。北区の北半部(CO-3)に位置する大畦畔は、高さ10cm程度、

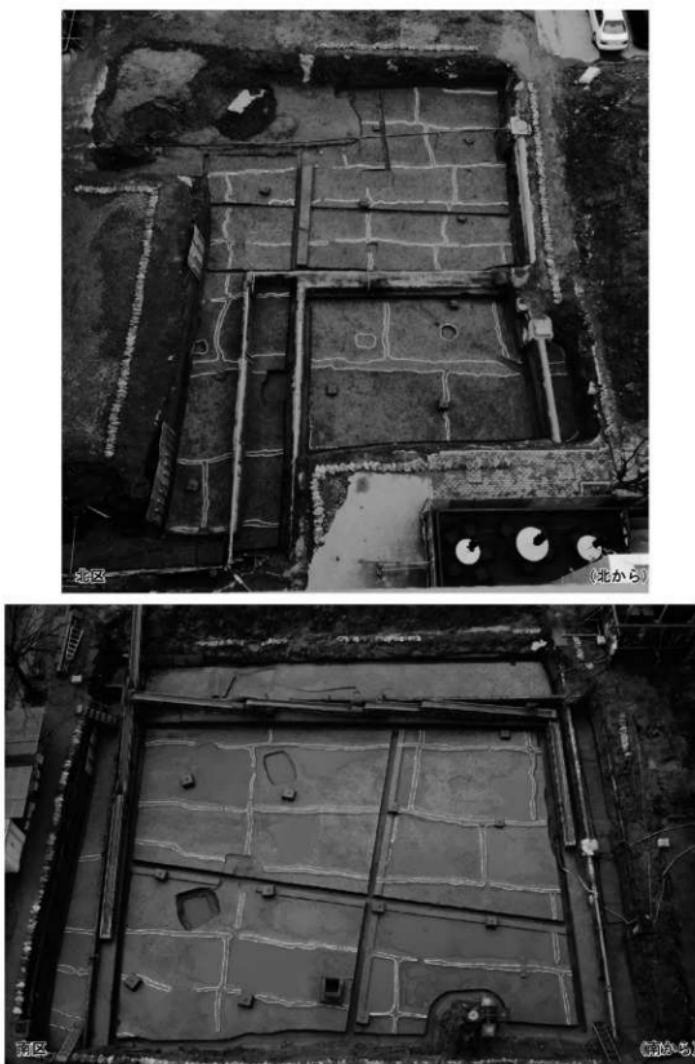


第14図 水田区画の法量



第15図 北区第3遺構面平面図





第17図 水田畦畔の全景

幅1.1～1.8m（底面に近い位置での数値）を測り、東西に17.2m分を検出した。南区の南西部（EI-2）に位置する大畦畔は、高さ5～10cm程度、幅0.9mを測り、東西に4.3m分を検出した。小畦畔の規模は、高さ5～10cm、幅20～80cmを測る。検出された水田面は少なくとも53面以上を数え、一区画の規模は一辺が1.5～7.7m、面積は5.9～28.8m²（12～14m²が中心）を測る。平面形はすべて長方形であるが、正方形に近い小型の群と細長い大型の群とに分かれる（第14図）。小型の群には北区の例が、大型の群には北区・南区両方の例が含まれており、本調査地点では北側に行くにつれ、一区画の規模が縮小する傾向にあることがうかがえる。旧地形は南区から北区へと緩く傾斜していたとみられ、水田区画が東西に長い長方形をなしているのは、こうした地形に沿って、畦畔が造られた結果と考えられる。水田区画の規模を決定づける要因には、自然的条件によるものと社会的条件によるものがあるが（工楽1991）、この場合は土地の傾斜度合や耕作土およびその直下の土壤状態といった自然的条件によると判断される。

本畦畔の所属時期は、結論から先にいうと、弥生時代I-2様式と考えられる。以下、こうした時期決定にいたった根拠を述べる。畦畔上に堆積した5・6層は、弥生時代I-2～3様式の洪水砂と考えられ、遺物をほとんど含まない。ただし、6層の最下部と7層の最上部から、遺物が少量出土した。これらの遺物を第26・27図・図版1に示した。このうち、6層の最下部（水田面直上）出土の土器片（11・12）、7層の最上部（水田耕作土）出土の土器片（10）は、弥生時代I-1・2様式に属するものであり、本畦畔の時期を示していると考えられる。ほかに、6層の最下部（水田面直上）出土の土器片（8）、6層の最下部（大畦畔直上）出土の土器片（15）、6層（大畦畔南洪水砂）出土の石鎌（17）、6層の最下部（水田直上洪水砂）出土の石鎌（18）、6層の最下部（大畦畔上）出土の用途不明石器（19）も、出土状況からみて、これと同時期の所産とみなせる。

以上の時期決定に関わる本調査地点での所見は、これまでの庄・蔵本遺跡の調査で得られた層位学的所見とも矛盾するものではない。第20図は、2000年までの調査所見を総括した中村豊（2000、pp.476～477）による基本層序模式図である。この図に示された「暗褐色粘質土層」が本調査地点の7層、「黄褐色細砂層」が本調査地点の5・6層に対応すると考えられる。そして、「暗褐色粘質土層」の上面では、弥生時代I-1・2様式の遺構が検出されている。こうした所見は、上述した本畦畔の時期決定が妥当であることを後押しする。

（2）土坑・不明遺構（第15・21図）

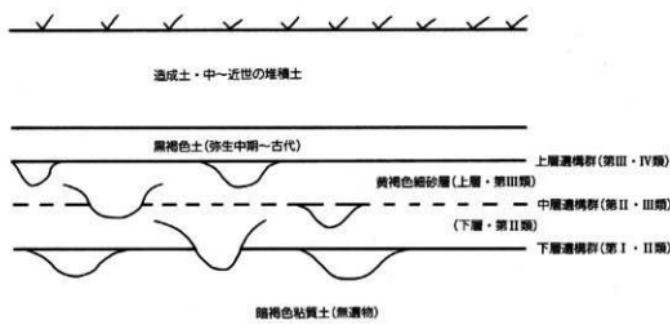
土坑1 北区の北西部（C0-1）に位置する土坑である。検出面の標高は1.65m、底面の標高は1.45mである。平面形は歪な梢円形、断面形はレンズ形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ15cmを測る。埋土は暗青灰色シルト質極細砂で、礫を含む。この埋土と土坑2・3のそれとは類似しており、これらの土坑は同時期のものである可能性が高い。出土遺物はないが、埋土からみて本土坑の所属時期は、第1・2遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期と考えられる。



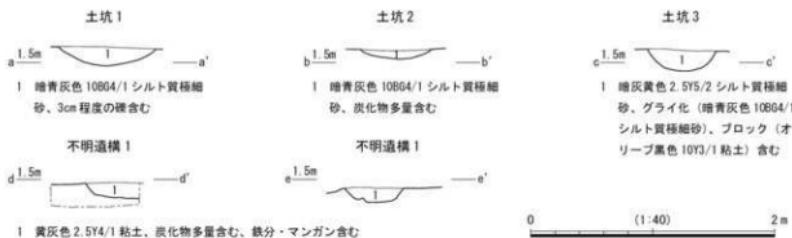
第18図 水田蛙の検出状況



第19図 水田畦畔に伴う遺物の出土状況



第20図 庄・藏本遺跡基本層序模式図（中村 2000 より引用）



第21図 遺構の土層断面（第3遺構面）

土坑2 北区の北半中央部（C1）に位置する土坑である。検出面の標高は1.6m、底面の標高は1.5mである。平面形は長方形、断面形はレンズ形を呈し、長さ0.9m、幅0.7m、深さ5cmを測る。埋土は暗青灰色シルト質極細砂で、炭化物を多量に含む。出土遺物はないが、埋土からみて本土坑の所属時期は、第1・2遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

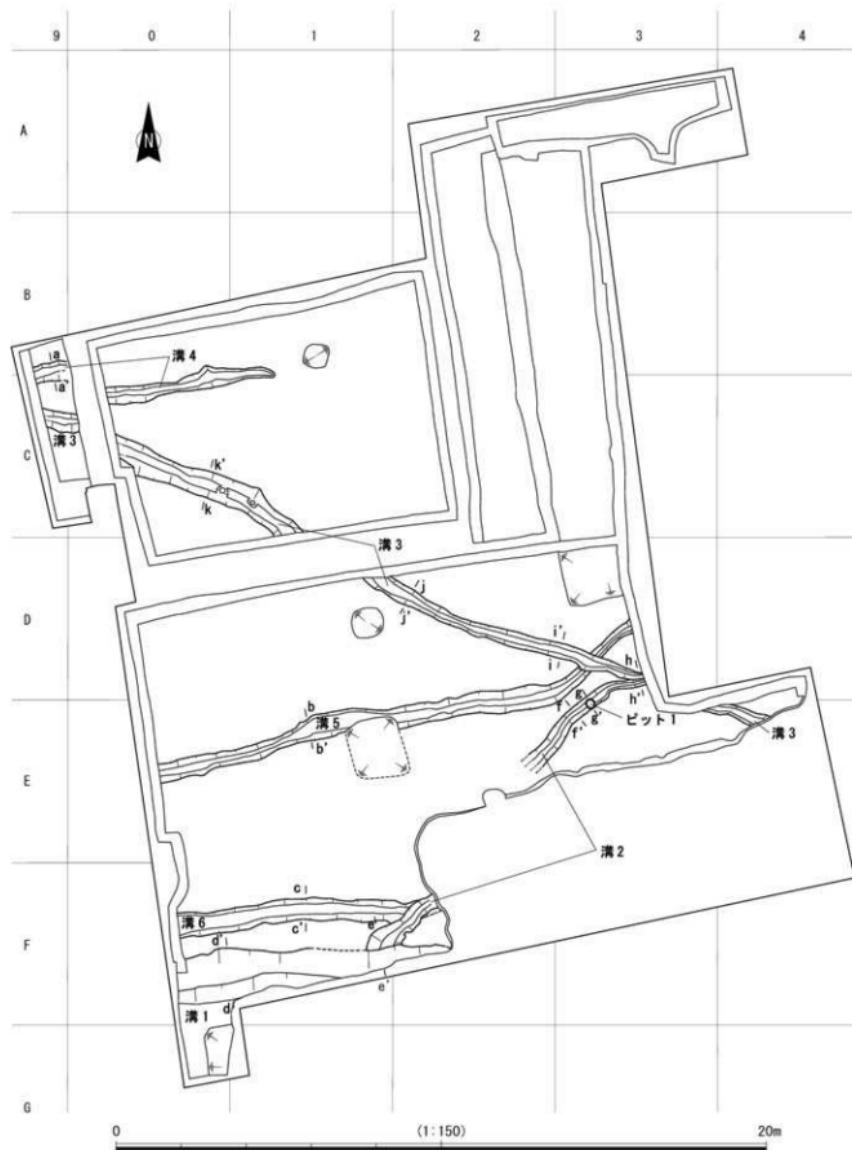
土坑3 北区の北半東部（C3）に位置する土坑である。検出面の標高は1.6m、底面の標高は1.45mである。調査区東壁にかかるつており、東半は調査区外へと続く。平面形は方形あるいは長方形、断面形はU字形を呈し、南北長0.6m、東西長（検出部位）0.5m、深さ15cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト質極細砂で、オリーブ黒色粘土のブロックを含む。出土遺物はないが、埋土からみて本土坑の所属時期は、第1・2遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

不明遺構1 北区の北東部（A2-3）に位置する性格の不明な遺構である。検出面の標高は1.4～1.5m、底面の標高は1.3mである。平面形は幅0.5～0.7mの溝状を呈し、東西に4.6m分検出した。断面形は皿形を呈し、深さ10cmを測る。埋土は黄灰色粘土で、炭化物を多量、鉄分・マンガンを含む。出土遺物はないが、埋土からみて本遺構の所属時期は第1・2遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

3. 第1・2遺構面の遺構と遺物

(1) 溝（第22～24図）

溝1 北区の南西部（F0-2・G0）に位置する溝である。検出面の標高は2.1m、底面の標高は1.65mである。幅（検出部位）4.0m、深さ45cmを測り、東西に8.0m分検出した。断面形は北側に段を有する緩い傾斜からなる。埋土は5層からなり、1～4層は灰色系のシルト、あるいは粘質シルト、5層は暗オリーブ灰色の極細砂である。溝2を切っている。遺物は弥生土器あるいは土師器、須恵器の小片が10点以上出土したが、図示し得たのは2点である（第25図、図版1）。出土遺物と検出層位からみて、本溝の所属時期は弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

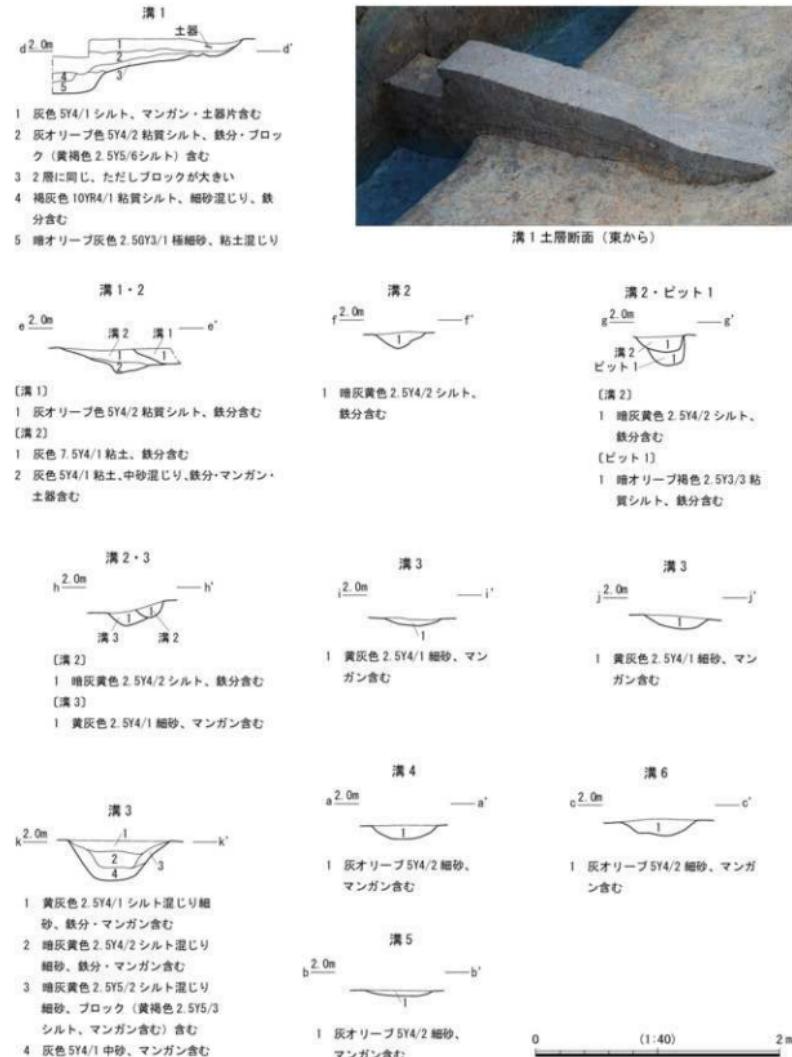


第22図 北区第1・2遺構面平面図



第23図 溝の発掘状況

溝2 北区の南東部 (D3・E2-3・F1-2) に位置する溝である。検出面の標高は 1.85 ~ 1.9m、底面の標高は 1.65 ~ 1.75m である。幅 0.3 ~ 0.8m、深さ 10 ~ 20 cm を測り、北東 - 南西に 12.0m 分検出した。断面形は逆三角形あるいは U 字形を呈する。埋土は灰オリーブ色～暗灰黄色の粘質シルトあるいはシルトで、鉄分を含む。溝 6 を切っている一方で、溝 1 と溝 3 に切られている。遺物は弥生土器片が 10 点以上出土したが、図示し得たのは 2 点である（第 25 図、図版 1）。2 の甕は弥生時代 V 様式の範疇に収まる。出土遺物と検出層位からみて、本溝の所属時期は弥生時代 I - 3 様式～中世にかけての一時期と考えられる。



第24図 遺構の土層断面（第1・2遺構面）

溝3 北区の北西部から南東部 (C0-1・D1-3・E3-4) にかけて位置する溝である。検出面の標高は1.8～2.0m、底面の標高は1.7～1.75mである。幅0.3～1.0m、深さ5～30cmを測り、北西～南東に24.4m分検出した。断面形はレンズ形あるいは逆台形を呈する。埋土はk-k'セクションで、4層からなる。1～3層は黄灰色～暗灰黄色シルト混じり細砂で、4層は灰色中砂である。溝5と溝2の一部を切っている。出土遺物はないが、検出層位と埋土からみて、本溝の所属時期は弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

溝4 北区の北西部 (B9-1・C0-1) に位置する溝である。検出面の標高は1.8m、底面の標高は1.7mである。幅0.3～0.7m、深さ10cmを測り、東西に7.5m分検出した。断面形はレンズ形を呈する。埋土は灰オリーブ色細砂で、マンガンを含む。この埋土と溝5・6のそれとは類似しており、かつ本溝を含めた3つの溝は東西に平行していることからみて、これらはすべて同時期のものである可能性が高い。出土遺物はないが、検出層位・埋土からみて、本溝の所属時期は溝5・6と同じく、弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

溝5 北区の南半部 (B2-3・E0-3) に位置する溝である。検出面の標高は1.85m、底面の標高は1.8mである。幅0.3～0.8m、深さ5cmを測り、東西に15.2m分検出した。断面形はレンズ形を呈する。埋土は灰オリーブ色細砂で、マンガンを含む。溝3に切られている。出土遺物はないが、検出層位埋土からみて本溝の所属時期は溝4・6と同じく、弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

溝6 北区の南西部 (F0-2) に位置する溝である。検出面の標高は1.9m、底面の標高は1.75mである。幅0.5～0.8m、深さ10cmを測り、東西に7.9m分検出した。断面形はレンズ形を呈する。埋土は灰オリーブ色細砂で、マンガンを含む。溝2に切られている。出土遺物はないが、検出層位・埋土からみて本溝の所属時期は溝4・5と同じく、弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

(2) ピット (第22・24図)

ピット1 北区の南東部 (E3) に位置するピットで、溝2の底面で検出された。検出面の標高は1.8m、底面の標高は1.65mである。平面形は円形、断面形はU字形を呈し、直径0.3m、深さ15cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質シルトで、鉄分を含む。出土遺物はないが、検出層位・埋土からみて、本ピットの所属時期は弥生時代I～3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

4. 包含層・擾乱出土遺物

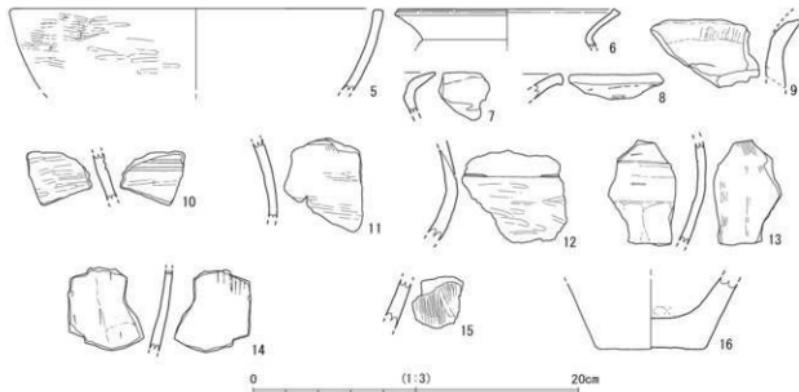
(1) 土器 (第26図、図版1)

12点を図示した。5～16はすべて弥生土器である。5はV～VI様式の鉢か高杯の口縁部片である。6はVI様式の甕の口縁部片である。10～12は壺の胴部片である。10～12はI～1・2様式のものと考えられる。7～9・13～16は器種不明で、7・8は口縁部片、13～15は胴部片、16は底部片である。



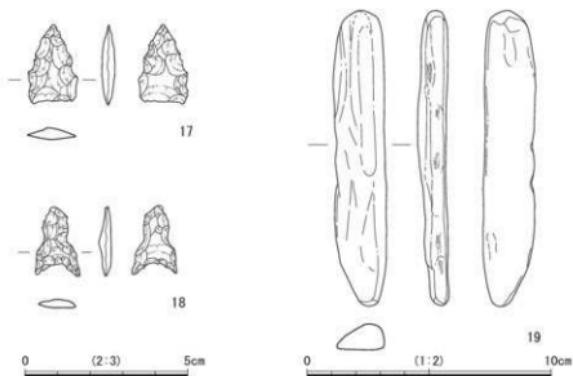
番号	造構	器種	法量(cm)			調整(外/内)	色調(外/内)	胎土
			口径	底径	器高			
1	溝1	弥生土器・土師器・鉢	13.8	—	—	ナデ/ナデ	橙SYR6/6 橙SYR6/6	微細
2	溝2	弥生土器・甕	—	—	—	ナデ/ナデ	明赤褐SYR5/6 明赤褐SYR5/6	微細、石英・長石少量含む
3	溝1	須恵器・蓋杯(身)	—	—	—	ナデ/ナデ	褐灰10YR6/1/ にぶい橙7SYR7/4	微細
4	溝2	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ後ナデ/ナデ・オサエ	にぶい橙7SYR6/4/ にぶい黄10YR6/3	微細、石英・長石・雲母含む

第25図 第1・2造構面の遺構出土遺物



番号	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区	層位
		口径	底径	器高					
5	弥生土器・鉢/高杯	23.0	—	—	ハケメ後ミガキ/ナデ	橙SYR6/6 橙SYR6/6	細、石英・長石含む	南区C3	5-6層
6	弥生土器・甕	13.8	—	—	ナデ/ナデ	明黄褐10YR6/6/ 明黄褐10YR6/6	微細、雲母少量含む	南区B5	擾乱
7	弥生土器・甕	—	—	—	ナデ/ナデ	にぶい橙7SYR6/4/ 橙SYR6/6	細、石英・長石少量含む	北区	表土・擾乱
8	弥生土器・甕	—	—	—	ヨコミガキ。ナデ/ヨコナデ	にぶい橙7SYR6/4/ にぶい橙7SYR7/4	細、石英・長石・ざくろ石含む	北区C1	6層
9	弥生土器・器種不明	—	—	—	調整不明/ナデ	にぶい橙7SYR7/4	細、石英・長石少量含む	北区E4	3層
10	弥生土器・甕	—	—	—	沈線2条以上、ミガキ/ミガキ	にぶい黄10YR7/4	細、石英・長石・ざくろ石含む	南区B3	7層
11	弥生土器・甕	—	—	—	沈線1条以上、ハケメ後 ミガキ/ナデ	にぶい橙7SYR6/4/ にぶい橙10YR7/4	細、石英・長石・ざくろ石含む	北区C2	6層・表土・擾乱
12	弥生土器・甕	—	—	—	沈線1条以上、ミガキ/ ナデ・オサエ	にぶい橙7SYR6/4/ にぶい橙SYR6/4	粗、石英・長石・ざくろ石・角 閃石多量含む	南区B5	6層
13	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ/ケズリ、ナデ	橙SYR6/6 橙SYR6/6	細、石英・長石少量含む	北区	表土・擾乱
14	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ/ケズリ	にぶい黄10YR6/3/ にぶい橙7SYR5/3	細、石英・長石・角閃石含む	北区	表土・擾乱
15	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ/ナデ	にぶい橙7SYR5/3/ にぶい黄7SYR5/3	粗、石英・長石・角閃石多量 含む	北区C1	6層
16	弥生土器・器種不明	—	—	—	ナデ/ナデ	暗黄灰2SYR5/2	粗、石英・長石・角閃石多量 含む	南区	底土

第26図 包含層・擾乱出土遺物



第27図 包含層出土遺物

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	特 徴	調査区	層位
17	打製石鏃	2.9	1.5	0.4	1.0	サヌカイト	平基式。	北区C2	6層
18	打製石鏃	2.1	1.4	0.3	0.5	サヌカイト	凹基式。	北区E3	6層
19	用途不明	12.1	2.1	1.1	42.1	頁岩	棒状を呈する。断面は三角形に近いが、角は鈍く、刃部は形成されていない。	北区B0	6層

(2) 石器(第27図、図版1)

打製石鏃2点、用途不明石器1点を図示した。打製石鏃(17・18)は2点ともサヌカイト製で、12は平基式、13は凹基式である。用途不明石器(19)は棒状を呈し、断面は三角形に近いが、角は鈍く、刃部は形成されていない。

(端野晋平)

文献

工楽善通, 1991. 水田の考古学. 東京大学出版会, 東京.

中村農, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之(編), 突蒂文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 松山, pp. 471-498.

第3章 第25次調査（附属図書館蔵本分館増築II期地点）

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

本学蔵本キャンパス北側中央付近に附属図書館蔵本分館の増築が計画された。建設予定地の南側に隣接する第12次調査（附属図書館蔵本分館増築）地点では、弥生時代後期～近世の構が検出されている。本建設予定地でも、これに関連する遺構が広がっていることが予測されたため、430 m²の範囲について発掘調査を実施した。

2. 調査体制と期間

調査の概要は以下のとおりである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

調査補助 中原尚子・板東美幸・前田千夏・山本愛子（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

調査期間 2011年10月6日～26日

3. 調査地点の位置と区割り

（1）調査地点の位置

調査地点の所在地は徳島市蔵本町3丁目18番地の15で、蔵本キャンパス北側中央付近に位置する。

（2）調査区の区割り

建物増築部分が東西2箇所に位置することから、西区と東区の2つの調査区を設定した（第28図）。

4. 発掘調査の概要

本遺跡では現地表下に、1近世、2弥生時代前期末・中期初頭～中世、3弥生時代前期中葉の概ね3枚の遺構面が存在することがわかっている。しかし、本調査地点西区では、第1遺構面に相当する頗る著な遺構はみられなかった。また、他地点で第2・3遺構面の間にみられる黄褐色細砂層も観察できず、第3遺構面相当の旧地表面において、旧河道と自然落ち込みを検出するにとどまった。

土層の堆積状況からみて、自然落ち込みは旧河道埋没後に形成されたと考えられる。旧河道は、幅10m前後の大規模なものである。検出面から2mほど掘り下げた時点で湧水が生じた。調査に危険が伴い、遺物もほとんど出土しないことから、それ以上の掘削を中止した。

また、東区は調査区全面が、西区において検出された旧河道の埋土に相当する可能性が高いことがわかった。

第2節 調査成果

1. 基本層序

基本層序について西区北壁 A-A' 土層断面（第29図）に基づき説明する。

1層 暗灰黄色 2.5Y5/2 のシルトで、鉄分を含む。上面の標高 1.8 ~ 2.0m、厚さ 5 ~ 10 cm である。

中世～近世に形成された層であろうか。

2層 オリーブ褐色 2.5Y4/3 の粘土で、マンガンを含む。上面の標高 1.8m、厚さ 10 ~ 20 cm である。

3層 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 の粘土である。土壌化する。上面の標高 1.6 ~ 1.7m、厚さ 5 ~ 15 cm である。

4層 黒褐色 2.5Y3/1 の粘土である。土壌化する。上面の標高 1.5 ~ 1.7m、厚さ 10 ~ 20 cm である。

5層 オリーブ黒色 5Y3/2 の粘土である。土壌化する。上面の標高 1.4 ~ 1.6m である。

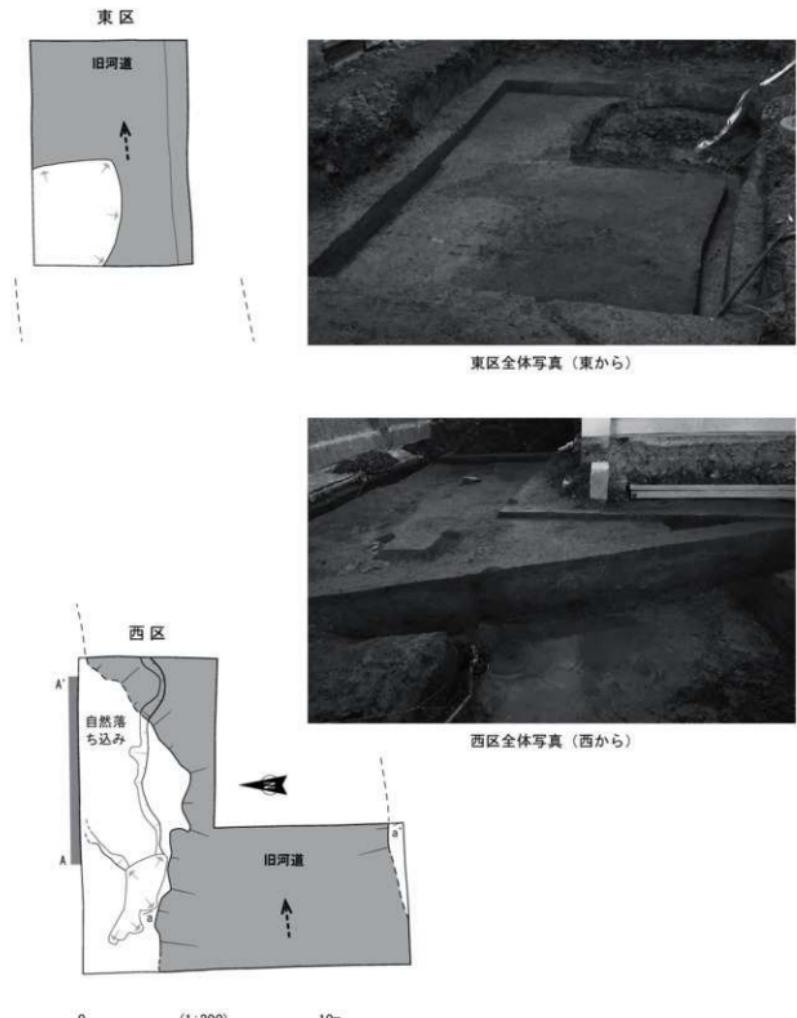
他地点で広域にみられ、弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭に形成されたと考えられる洪水起源砂層（黄褐色細砂層）は、本地点では検出されていない。なお、黄褐色細砂層は本地点の1層と2層の間に相当する。2～5層の形成時期は弥生前期以前と考えられる。

2. 遺構と遺物

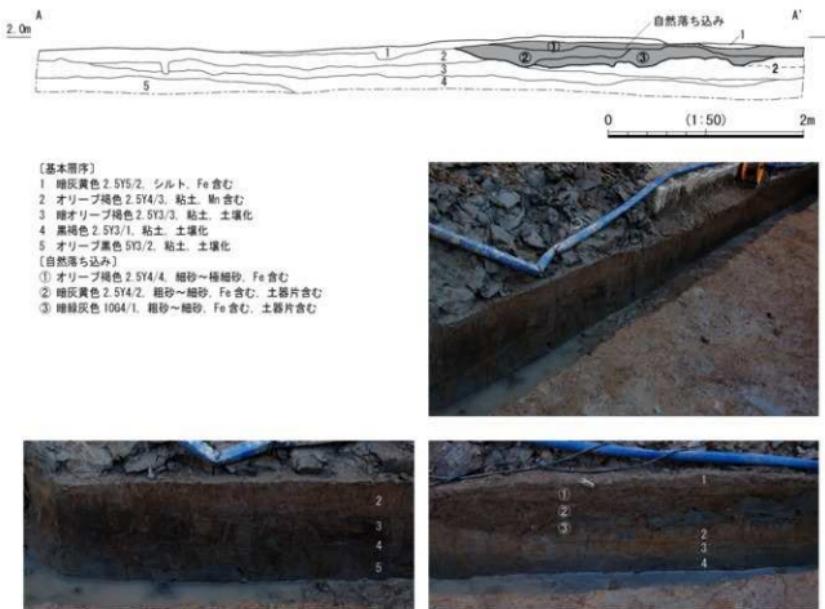
(1) 旧河道（第28・30図）

西区では東西方向にのびる。検出面は弥生前期以前に形成されたと考えられる第2層上面であるが、本来の遺構形成面はこれより上位に存在した可能性が高い。検出面で幅10m前後、深さ1.1m以上と規模が大きい。また、肩に段を有する断面形態である。なお、東区では旧河道埋土が調査区全面に堆積していると判断された。埋土は1～8層が粘土、9～12層は極細砂を中心となり、上層から下層にかけ粘質から砂質になる傾向がみられる（第30図）。また、底面を検出できなかったため旧河道の水流方向は判断できないが、既往の調査成果によると本調査地点周辺は南西から北東にかけ傾斜する地形であることがわかっており、本旧河道も西から東への水流が想定される。なお、本調査地点の西側に位置する第26次調査（本書第4章）で検出された旧河道2と同一の遺構である可能性が高い。

出土遺物（第31図、第3表、図版2） 出土遺物は少なく、図化できるものは1点のみであった。1は口縁部片である。口縁部は平らで上に肥厚する。時期は弥生時代中期以降であろう。このほかに、モモの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。



第28図 遺構全体図



第29図 西区北壁A-A' 土層断面

時期 本遺構は検出層位や遺物から時期を決めることができない。なお、本遺構と一連の旧河道の可能性がある第26次調査の旧河道2は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末～古代の一時期と考えられる。

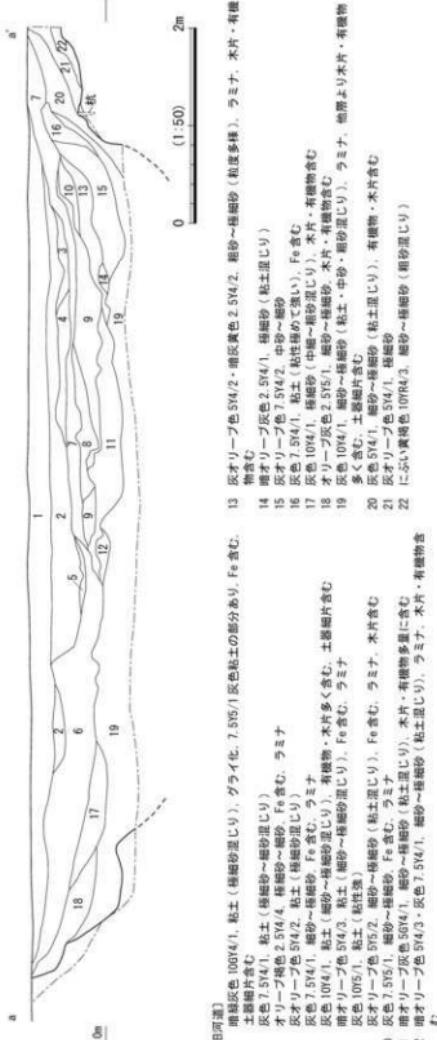
(2) 自然落ち込み（第28・29図）

西区北側の2層上面で検出された。旧河道と同様、本来の遺構形成面は上位に存在したと考えられる。検出面では、南北3.5m以上、東西8.5m以上、深さ25cmである。埋土は3層認められ、何れも砂質である（第29図）。自然落ち込みは旧河道を切っており、旧河道の埋没後に形成されている。また、人為的なものではなく自然に形成された落ち込みと考えられる。

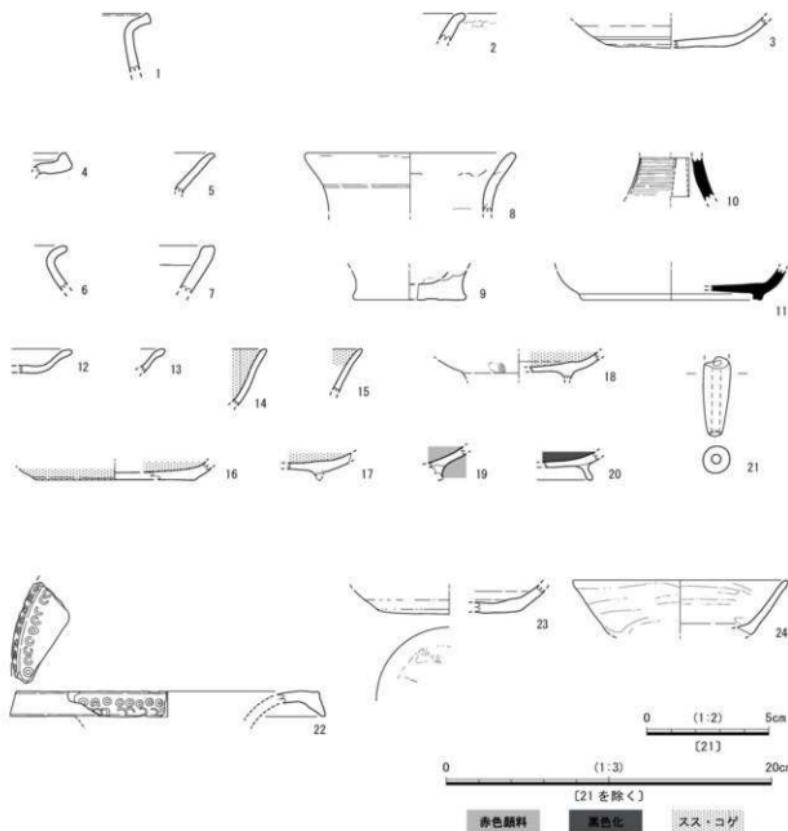
出土遺物（第31図、第3表、図版2） 2は口縁部片である。口縁部端部がわずかに外反する。古代の土師器杯もしくは皿であろうか。3は古代の土師器杯の底部と考えられる。外面は回転ナデ調整である。このほかにモモの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。

(3) 包含層・擾乱出土遺物（第31図、第3表、図版2）

4～8は土師質の土器口縁部である。4は端部がわずかに凹み上に肥厚する。7の口唇部はわずか



第30図 西区旧河道 a-a'、土層断面



第31図 出土遺物

に回む。8は口縁部下に浅い沈線がめぐる。弥生時代前期の壺の可能性もあるが、前期の壺と比べると沈線が不明瞭で口唇部が丸く、また接合痕も前期に典型的な幅広粘土帯—外傾接合とは異なるようである。9は底部で、中央部に焼成後穿孔がみられる。弥生土器と考えられる。10・11は須恵器である。10は高杯脚部と考えられる。方形透かしが2方向に残り、本来は3～4方向に施されていたとみられる。外面はカキ目調整、内面は回転ナデ調整である。時期は6世紀代であろうか。11は高台をもつ底部である。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

12～19は古代の土師器である。12・13は皿である。口唇部は肥厚し、口縁部はわずかに外反して開く。14・15は杯と考えられる。口縁部はゆるやかに外反して開く。外面は回転ナデ調整である。

第3表 出土遺物観察表

番号	器種	法量[cm]		文様・調整	色調	備考	調査区	遺構	層位
		口径	底径						
1	弥生土器/土器	-	-	-	ナデ/ナデ	にぶい檜7.5YR7/3 褐灰7.5YR6/2	西	旧河道	-
2	古代土師器?・杯/皿?	-	-	-	ユビオサエ・ ナデ/ナデ	にぶい檜7.5YR7/4 にぶい檜7.5YR7/4	西	自然落ち込み	-
3	古代土師器・杯	-	(8.0)	-	回転ナデ/	浅黄檜7.5YR8/4 にぶい檜10YR7/3	西	自然落ち込み	-
4	弥生土器/土器	-	-	-	ナデ/ナデ	にぶい黄檜10YR6/4 にぶい黄檜10YR7/3	西	包含層	-
5	弥生土器/土器	-	-	-	-/-	にぶい黄檜10YR6/4 にぶい黄檜10YR7/3	摩耗顯著	包含層	-
6	弥生土器/土器	-	-	-	ナデ/ナデ	にぶい檜10YR6/3 にぶい檜7.5YR6/3			
7	弥生土器/土器	-	-	-	ナデ/ナデ	にぶい檜7.5YR6/3 にぶい黄檜10YR6/4	西	包含層	-
8	弥生土器/土器・壺?	(13.0)	-	-	沈線1条・ ナデ/ナデ	明黄檜10YR7/6 にぶい黄檜10YR7/4	西	包含層	-
9	弥生土器・底部	-	(7.0)	-	ナデ/ユビオ サエ・ナデ	にぶい黄檜10YR6/4 にぶい檜7.5YR6/4	焼成後穿孔	包含層	-
10	須恵器・高杯	-	-	-	カキ目/ 回転ナデ	灰N6/0・灰N6/0			
11	須恵器・蓋 杯身	-	-	-	回転ナデ/ 回転ナデ	灰白N7/0・灰白N7/0	西	包含層	-
12	古代土師器・皿	-	-	-	-/-	にぶい黄檜10YR6/3 灰黄檜10YR6/2	西	包含層	-
13	古代土師器・皿	-	-	-	-/-	にぶい黄檜10YR6/3 にぶい黄檜10YR6/3	摩耗顯著	包含層	-
14	古代土師器・皿・杯	-	-	-	回転ナデ/	にぶい檜7.5YR6/4 灰檜7.5YR5/2			
15	古代土師器・杯	-	-	-	回転ナデ/	にぶい檜7.5YR6/4 にぶい檜7.5YR6/4	内面コゲ付着	西	包含層
16	古代土師器・杯/皿	-	(9.7)	-	-/回転ナデ	黄灰2.5Y4/1/ 暗灰黄2.5Y4/2	外面上ス付着・内面コゲ付着	包含層	-
17	古代土師器・杯	-	-	-	-/-	にぶい檜5YR6/4 にぶい檜7.5YR5/4			
18	古代土師器・刷毛目?/・ 刷毛目?/	-	-	-	ユビオサエ・ 刷毛目?/-	にぶい檜7.5YR6/3 赤褐2.5YR4/6	結合痕・内面 コゲ付着	西	包含層
19	古代土師器・杯	-	-	-	-/-	にぶい檜7.5YR5/3 にぶい赤檜2.5YR4/4	内面コゲ付着	西	包含層
20	黒色土器・碗	-	-	-	-/-	にぶい檜7.5YR6/4 暗青N3/0	内外面赤色顔料	西	包含層
21	土錐	-	-	-	-/-	にぶい檜5YR6/4 にぶい檜5YR6/4	摩耗顯著	包含層	-
22	弥生土器・壺?	(19.4)	-	-	竹管文・ナデ /ナデ	にぶい檜5YR7/3 にぶい檜7.5YR7/3			
23	古代土師器・杯/杯	-	(8.6)	-	ヘル切り?/ 回転ナデ	檜7.5YR6/6 檜7.5YR6/6	東	表土・擾乱/旧河道	-
24	古代土師器・杯	(13.4)	-	-	ナデ/ナデ	檜7.5YR7/6 檜7.5YR7/6	東	表土・擾乱/旧河道	-

内面にコゲがつく。16は土師器杯もしくは皿の底部である。内面は回転ナデ調整である。外面にスス、内面にコゲがつく。17・18は高台付杯と考えられる。内面にコゲがつく。17は粘土帶の接合痕がみられる。18の外面調整は横方向のナデ調整で、一部に刷毛目状の痕跡が認められる。19は高台付杯で、内外面に赤色顔料が塗布される。20は黒色土器A類の椀である。高台端部はわずかに肥厚する。高台貼り付け部で剥離している。9~10世紀に位置づけられる(早瀬1994・1999)。21は土錐である。

このほかに、西区包含層でモモの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。

22~24は東区の重機掘削中に出土した。出土層位は表土・擾乱もしくは旧河道1埋土の可能性

を含む。22は壺口縁部と考えられる。垂下する口縁をもち、竹管文が口縁部外面に2段、上面に1段施される。時期は弥生時代後期後半頃であろうか。矢野遺跡で類例がみられる（近藤編2001）¹。23・24は古代の土師器杯である。23は底部である。内面は回転ナデ調整である。底部接地面はヘラ切りであろうか。24の口縁部は直線的に開く。内外面ともに横方向のナデ調整である。口縁部と底部の境界に粘土帯の接合痕がみられる。黒谷川宮ノ前遺跡の溝17（SD1017）に代表される10世紀前半の資料と形態・サイズが類似する（早渕1994・1999）。ほかに東区の重機掘削中に、サヌカイトの剥片、モモの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。

（三阪）

註

1. 近藤玲氏よりご教示をえた。

文献

- 早渕隆人, 1994. 黒谷川宮ノ前遺跡における古代の土器様相について, 菅原康夫（編）, 黒谷川宮ノ前遺跡：四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第9集, 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島, pp. 369-376.
- 早渕隆人, 1999. 徳島県内における古代土器様相：川端遺跡出土土器の位置づけ, 栗林誠治（編）, 金泉寺遺跡・川端遺跡：徳島県中央構造線断層帯調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第32集, 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島, pp. 122-129.
- 近藤玲（編）, 2002. 矢野遺跡（I）：一般国道192号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査第2分冊, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第33集, 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 大久保徹也, 2002. 中国・四国地方の土器, 赤塚次郎（編）, 考古資料大観第2巻, 弥生・古墳時代土器II, 小学館, 東京, pp. 159-168.

第4章 第26次調査（大塚講堂改修地点）

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

1965年に建設された大塚講堂の改修および増築が決定され、それに伴い増築部分の東側と南側において埋蔵文化財発掘調査を行う必要性が生じた。

調査区の位置は、第25次調査地点（附属図書館藏本分館増設II期地点）の西側で、第14次調査地点（医薬資源教育研究センター新営地点）の北東側である（第2図）。前者では、幅10mの旧河道が確認されている。後者では近世の道・溝・耕作痕跡などのほか、古墳時代の溝、弥生時代と考えられる柱穴などが検出されている。本地点においても、第25・14次調査と同様の遺構が確認される可能性が高いと予想されたため、発掘調査を実施した。調査面積は約1,030m²である。2012年6月2日には現地説明会を実施し、調査成果の公開を行った。



第32図 調査風景

a 旧河道1掘り下げ（東から） b 現地説明会の様子

2. 調査体制と期間

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 板東美幸、古川裕美、前田千夏、山本愛子

（以上、施設マネジメント部技術補佐員）

調査期間 2012年4月9日～6月10日

3. 調査地点の位置と区割り

(1) 調査地点の位置

調査地点の所在地は、徳島市蔵本町3丁目18番地の15で、本学蔵本キャンパスの北西部にあたる。また、第25次調査地点（附属図書館蔵本分館増設II期地点）の西側、第14次調査地点（医薬資源教育研究センター新営地点）の北東側に位置する。

(2) 調査地点の区割り

調査にあたっては、建設予定地となる掘削範囲を6分割し、旧大塚講堂の東側に位置する調査区を北から第1～5調査区とし、南側に位置する調査区を第6調査区と設定した（第33図）。工事の工程に従い、北側の第1調査区から順に南に向かって調査を進めた。

4. 調査の概要

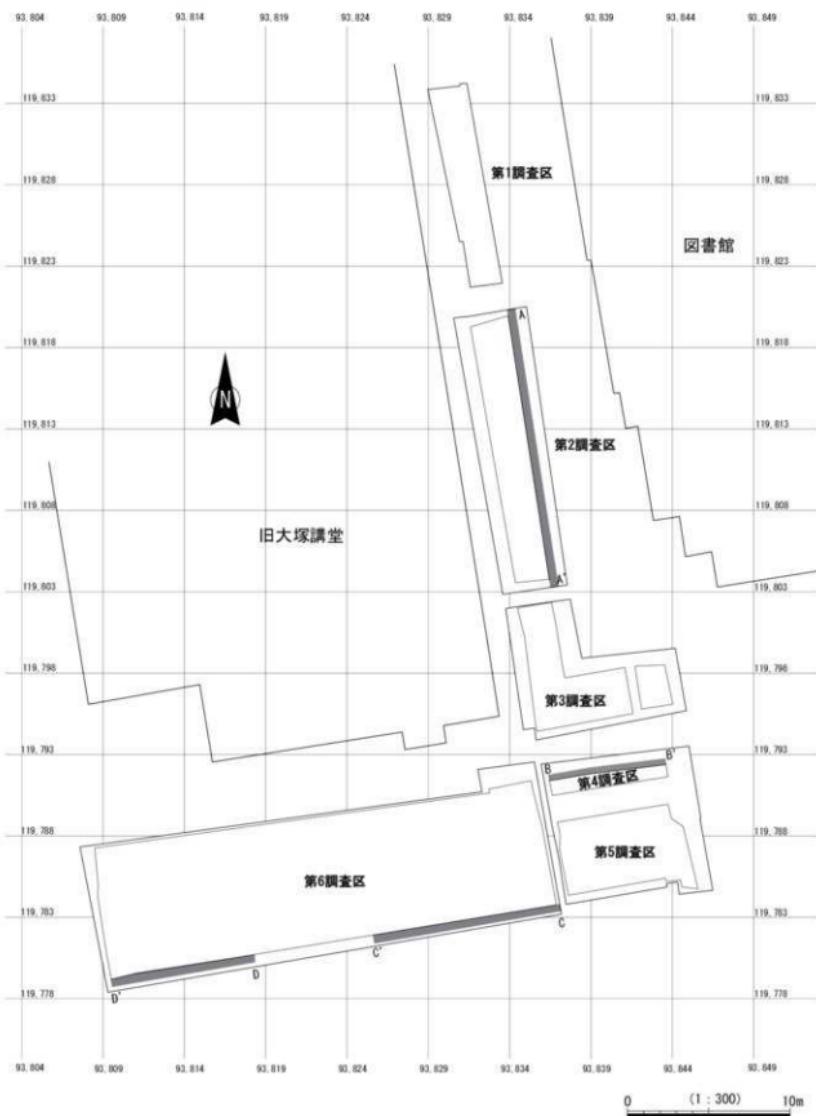
本調査地点では、3つの遺構面を設定し、弥生時代前期中葉（I-2様式）から近世にわたる遺構を確認した。なお、第1遺構面では明確な遺構は認められなかった。出土遺物は少なく、コンテナで土器4箱、木器・植物遺体は2箱、合計6箱である。以下、遺構面ごとにその概要を述べる。

(1) 第1遺構面

本遺構面では弥生時代I-2様式と考えられる溝を3条検出している。これらの溝は用水路としての機能が想定される。遺物は非常に少なく弥生土器の細片のみである。

(2) 第2遺構面

本遺構面では、弥生時代前中期・中期初頭（I-3・4様式）～中世の一時期に属する旧河道、溝、井戸を検出している。本地点の遺物の多くは、旧河道1から出土したものであり、ここからは、弥生時代の土器、打製石器、古墳時代～古代の須恵器が出土している。このほかには、井戸1の埋土から、布留式0～1式期の甕1点がほぼ完形の状態で出土しており、井戸の廃絶に伴った祭祀行為が行われた可能性が推定された。



第33図 調査地点の区割りと土層断面の位置

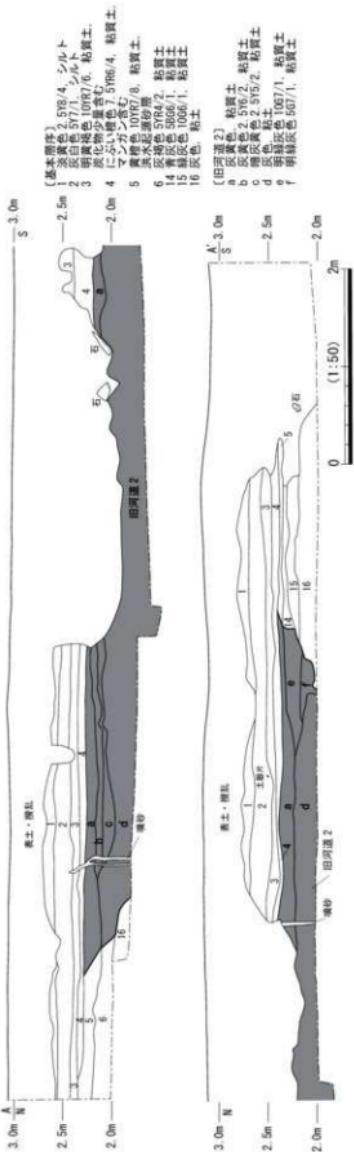
第2節 調査成果

1. 基本層序

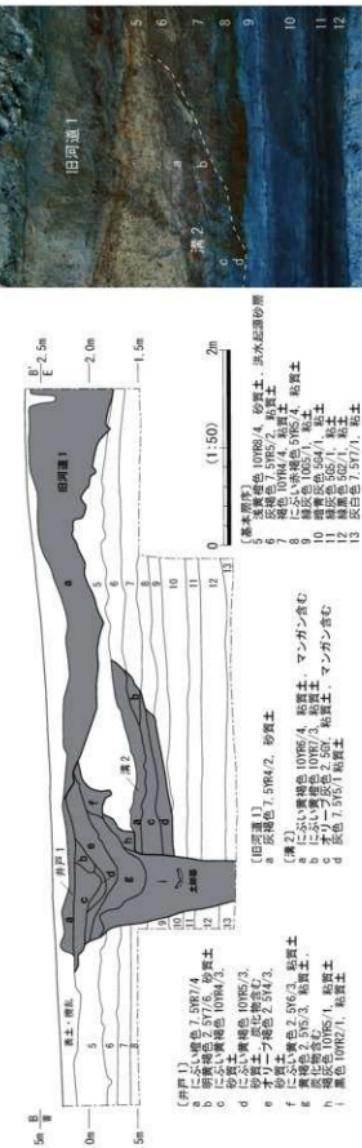
第2・4・6調査区の層序を第34～36図に示している。基本層序は1～16層からなり、1～5・14～16層は第2調査区東壁（第34図）、6～13層は第4調査区北壁（第35図）をもとに説明する。14～16層は6層以下に相当するが、6～13層との対応関係は不明である。なお、現地表面は標高3.0～3.1mであり、そこから、第1調査区では標高2.7m前後、第6調査区では標高2.8m前後まで造成土が堆積する。

- 1層** 淡黄色2.5Y8/4のシルトで、グライ化している。上面の標高は2.7m、厚さ5～10cmである。近世の水田層と考えられる。
- 2層** 灰白色5Y7/1のシルトで、グライ化している。上面の標高は2.6m、厚さ20cmである。近世の水田層と考えられる。
- 3層** 明黄褐色10YR7/6の粘質土であり、第1調査区から第3調査区にて確認される。炭化物を少量含む。上面の標高は2.3～2.4m、厚さは10cmである。
- 4層** にぶい橙色7.5YR6/4の粘質土である。マンガンを含んでいる。上面の標高は2.4～2.5m、厚さ10cmである。既往の調査から、弥生時代I～3・4様式～中世の土壤化層と判断される。
- 5層** 黄橙色10YR7/8の粘質土である。本調査地点全体を覆っており、これまでの庄・蔵本遺跡の各調査地点においても検出される。上面の標高は2.4m、厚さは10～20cmである。第2調査区では薄く堆積する。弥生時代I～2～3・4様式を中心とする洪水起源砂層である。
- 6層** 灰褐色7.5YR5/2の粘質土である。上面の標高は1.9m、厚さは20cmである。既往の調査では、本層上面から弥生時代I～1・2様式の遺構が検出されている。
- 7層** 暗褐色10YR4/4の粘質土である。上面の標高は1.6～1.7m、厚さは20～30cmである。
- 8層** にぶい赤褐色5YR5/4の粘質土である。上面の標高は1.5m程度、厚さは15cm前後である。
- 9層** 緑灰色10G5/1の粘土である。上面の標高は1.3～1.4m、厚さは10cm前後である。
- 10層** 暗青灰色5G4/1の粘土である。上面の標高は1.2～1.3m、厚さは20～30cmである。
- 11層** 緑灰色5G5/1の粘土である。上面の標高は1.0m程度、厚さは15cm前後である。
- 12層** 緑黒色5G2/1の粘土である。上面の標高は0.8～0.9m、厚さは25cm前後である。
- 13層** 灰白色7.5Y7/1の粘土である。上面の標高は0.6～0.7m、厚さ10cm以上である。
- 14層** 青灰色5BG6/1の粘質土である。上面の標高は2.3～2.4m、厚さ5～10cmである。
- 15層** 緑灰色10G6/1の粘質土である。上面の標高は2.3m、厚さ10cmである。
- 16層** 灰色の粘土である。上面の標高は2.2m、厚さ20cm以上である。

本調査地点では、基本的に1層上面を第1遺構面、5層上面を第2遺構面、6層上面を第3遺構面と設定した。

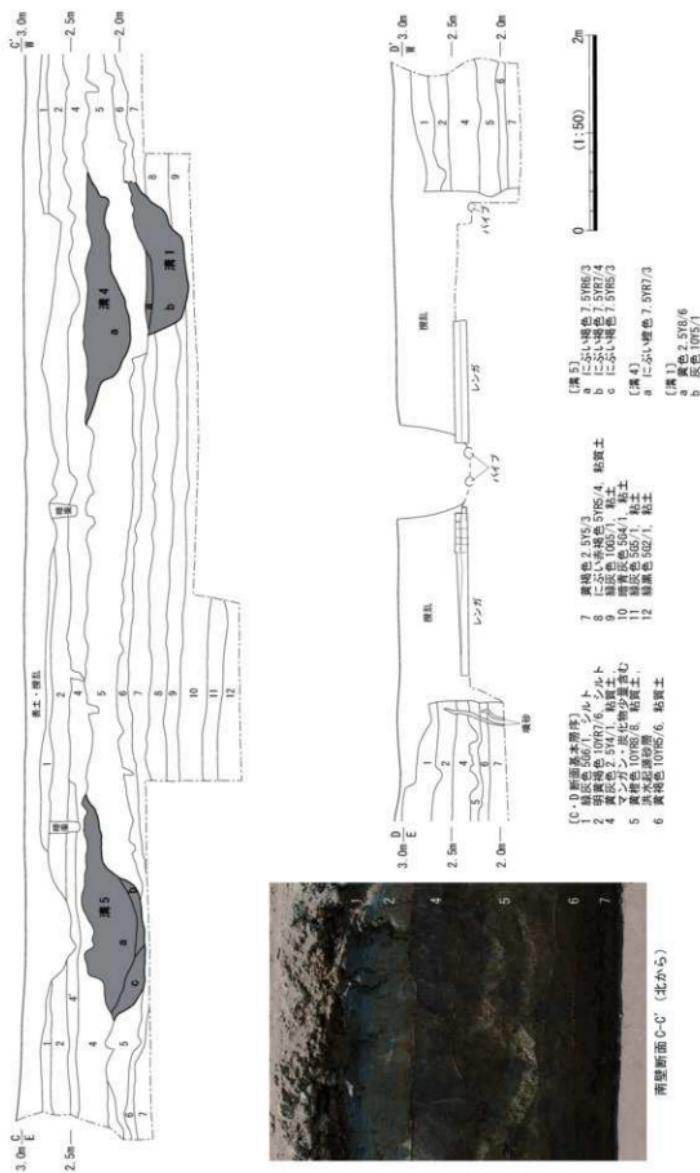


第34圖 第2調查區東壁 A-A' 壓層斷面



第4 調査区北壁断面B-B' (南から)

第35圖 第4調查區北壁B-B' 土層斷面



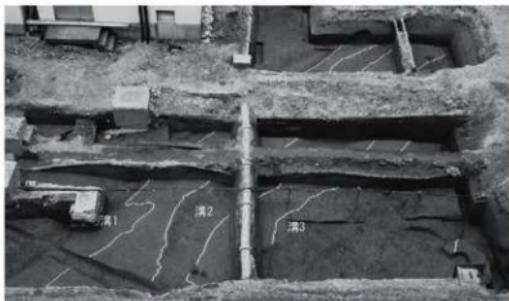
第36图 第6型有区商号C-C·D-D·主断面

2. 第3遺構面の遺構と遺物

(1) 溝（第35～38図）

溝1 第3・6調査区に位置する。

6層上面もしくは7層上面で検出され、検出面の標高は1.85mである。残存長18.5m前後、最大幅2.0m、底面の標高1.3mで、検出面からの深さ55cmである。第6調査区南壁土層断面（第36図）によると、埋土は2層確認され、上層は黄色2.5Y8/6土、下層は灰色10Y5/1土である。



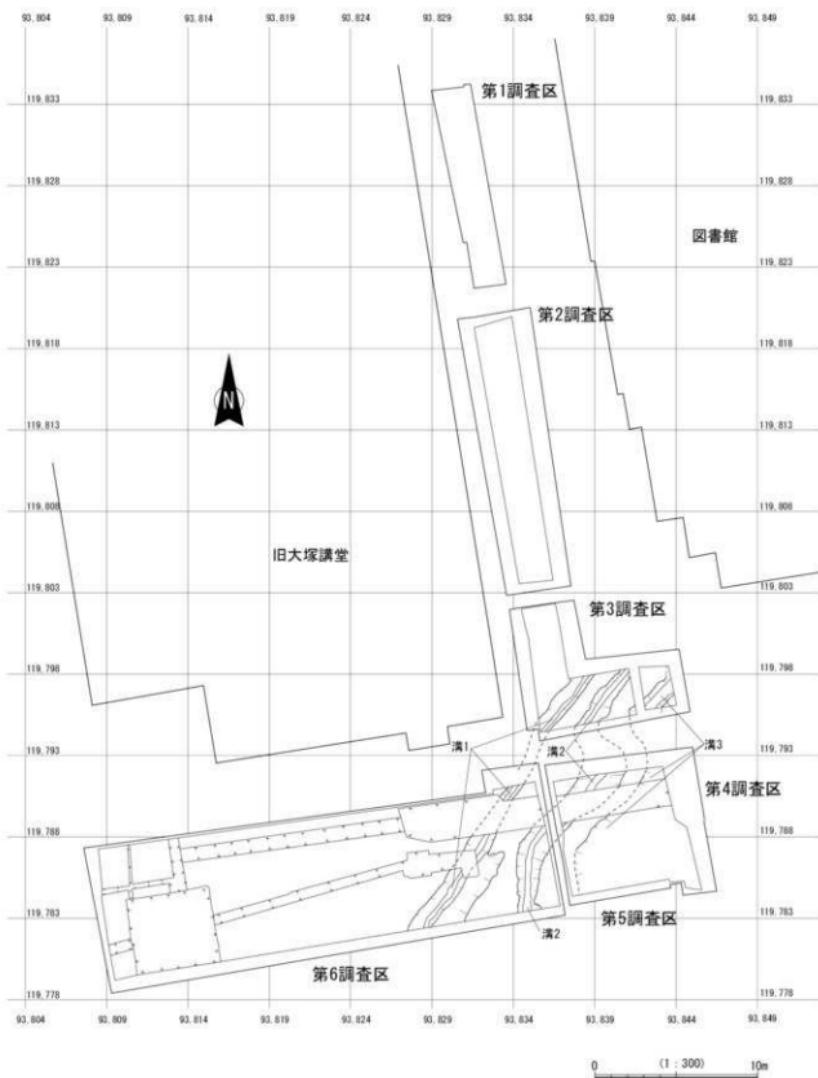
第37図 溝1～3完掘状況（南から）

遺物はほとんど出土しておらず、弥生土器の胴部と考えられる小片が1点出土している。図化はできないものの、胎土からみて弥生時代前期の可能性が高い。

溝2 第3～6調査区に位置する。6層上面で検出され、検出面の標高は1.8mである。残存長16m前後、最大幅2.4m、底面の標高1.15mで、検出面からの深さ65cmである。第4調査区北壁土層断面（第35図）では、埋土に粘質土層が4層確認される。遺物は出土していない。井戸1に切られる。

溝3 第3～5調査区に位置する。6層上面で検出され、検出面の標高は1.9mである。残存長14.5m前後、幅1.2m、底面の標高1.2mで、検出面からの深さ70cmである。南側の第5調査区では、溝の平面形が不明瞭であるが、これは上層の旧河道1による擾乱を受けたことが要因と考えられる。遺物は出土していない。

これらの溝から時期を知りうる遺物は出土していないが、いずれも6層上面から検出されている。既往の調査成果によると、本調査地点6層に相当する「暗褐色粘質土」上面で検出された遺構は、弥生時代I-1・2様式に位置づけられる（中村2000）。他地点では、弥生時代I-2様式の水田やこれに伴う用水路が検出されており、溝1～3も用水路としての機能を想定すれば、I-2様式に位置づけられる可能性が高いといえる。また、これらの溝は並行し、底面の標高も近いことから、同時期に機能していた可能性が考えられる。周辺の調査成果では南西から北東へ標高が低くなることがわかつており、これらの溝も同様の水流方向が想定される。



第38図 第3遺構面全体図

3. 第2遺構面の遺構と遺物

(1) 旧河道・溝

旧河道1（第35・39～43図、図版3・4） 第3～5調査区に位置する。表土・擾乱を除去した5層上面から検出された。本旧河道は、第3調査区では1条、第4調査区で2条に分岐し、第5調査区では再び1条となる（第41図）。幅1.4～5.0m、底面の標高は南西で1.75m（第35図）、北東で1.85m（第39図）で、検出面からの深さ30～80cmである。埋土は単層で暗灰黄色2.5V5/2の粘質土である。後述する井戸1を切っている。

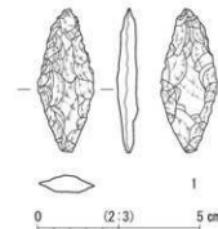
出土遺物には、サヌカイト製打製石鏃、弥生土器、須恵器、堅果類がみられる。1（第40図）は凸基式の打製石鏃で、長さ4.4cm、幅1.7cm、重量3.8gである。両面のほぼ全面が調整されるが、一部主要剥離面が残る。河内平野では弥生時代中期中葉から後段階になると打製石鏃が大型化し、重量が3g以上のものが5割を超えると指摘される（寺前2010）。これをふまえると、本例は大型の打製石鏃であることから、時期は弥生時代中期中葉以降の可能性が高いといえる。

2～13（第42図）は弥生土器あるいは土師器である。2は壺の口縁部である。復元口径は22.0cmである。弥生時代I～3・4様式であろうか。3は口縁部片で、端部外側は玉縁状に肥厚する。4は高杯もしくは壺の口縁部と考えられる。5は壺の口縁部で、復元口径20.6cmである。弥生時代V～VI様式である。6は壺の頸部で、弥生時代V～VI様式と考えられる。7は壺の口頸部である。復元口径は17.6cmである。弥生時代V～VI様式である。8は甕の口頸部である。復元口径は14.1cmである。弥生時代V～VI様式である。9は胴部であろうか。10は高杯の脚部である。円形の透し孔が2か所に確認でき、本来は4か所に施されていたと考えられる。11は高杯の脚部であろうか。12・13は底部である。形態に加え胎土や外傾接合である点からみて、弥生時代前期に位置づけられる可能性が高い。12は内面にコゲの付着がみられる。



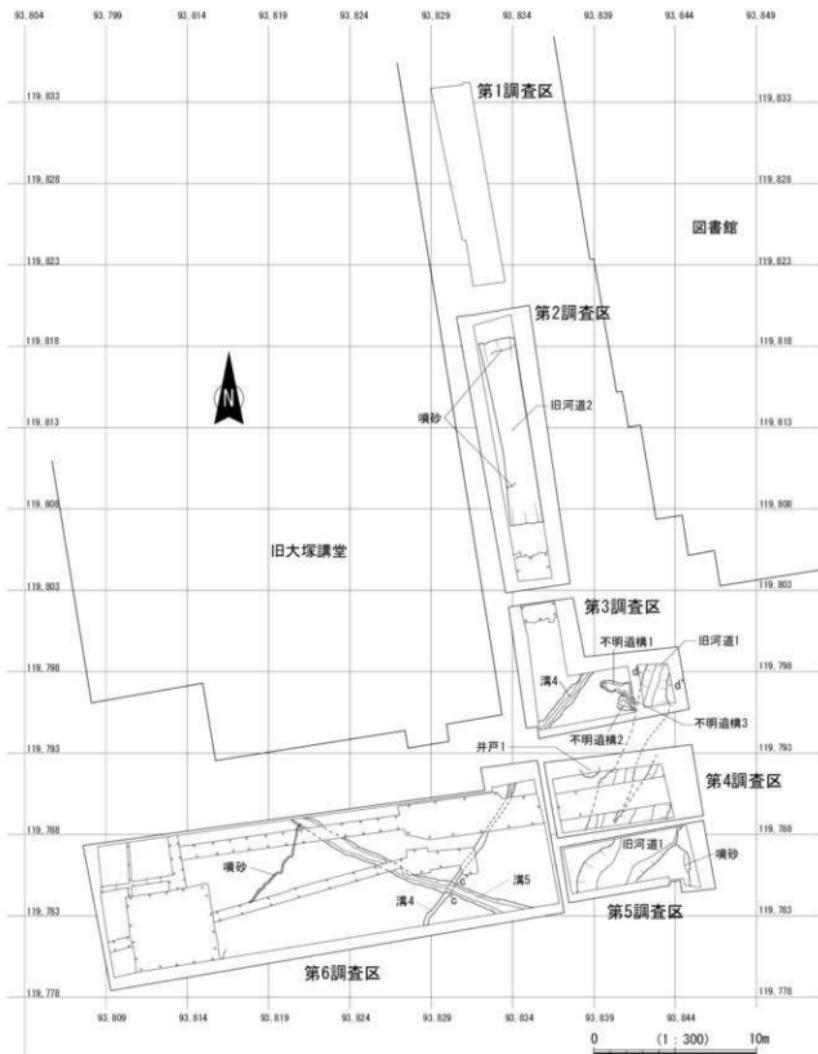
旧河道1断面（南から）

第39図 旧河道1土層断面

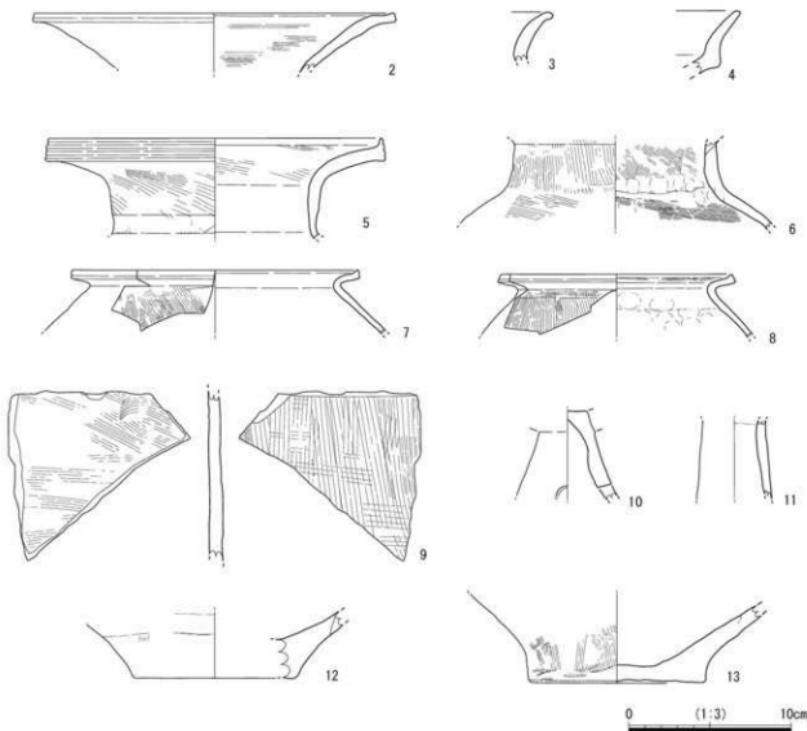


No.	器種	法面(cm)			重量 (g)	石材	調査区
		長さ	幅	厚さ			
1	打製石鏃	4.4	1.7	0.5	3.8	サヌカイト	5

第40図 旧河道1出土遺物1

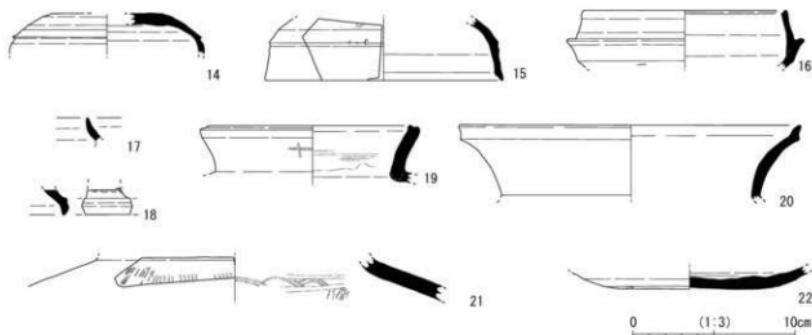


第41図 第2遺構面全体図



番号	遺構	器種	法量(cm) 口径 底部 器高	文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
2	旧河道1	弥生土器・壺	22.0 - -	ナデ/刷毛目、ナデ	灰黄褐色10YR6/2 にぶい黄褐色10YR6/3	細、長石	5
3	旧河道1	弥生土器・土師器・壺	- - -	ナデ/ナデ	にぶい橙5YR6/4 橙SYR6/6	細、長石	-
4	旧河道1	弥生土器・壺	- - -	ナデ/ナデ	にぶい橙7YR6/4 にぶい橙7.5YR6/4	微細、長石	-
5	旧河道1	弥生土器・壺	20.6 - -	刷毛目3条、刷毛目、ナデ/刷毛目、ナデ	にぶい橙7YR6/4 にぶい橙7.5YR6/4 にぶい橙7.5YR6/4	微細、長石	5
6	旧河道1	弥生土器・壺	- - -	刷毛目/刷毛目、ユビオサエ	にぶい黄褐色10YR7/2 にぶい黄褐色10YR7/2	微細、長石、角閃石	5
7	旧河道1	弥生土器・壺	17.6 - -	刷毛目、ナデ/ナデ	橙SYR6/6 にぶい橙7.5YR5/4	微細、長石、當母	5
8	旧河道1	弥生土器・壺	14.1 - -	刷毛目、ナデ/ユビオサエ、ナデ	にぶい黄褐色10YR6/3 にぶい黄褐色10YR7/3	細、石英	-
9	旧河道1	弥生土器・土師器・壺	- - -	刷毛目/刷毛目	にぶい橙7YR6/4 明赤SYR5/6	細、石英、角閃石	4
10	旧河道1	弥生土器・土師器・高杯	- - -	ナデ、ユビオサエ、シボリ痕	橙SYR7/B/橙SYR7/B	微細、石英、角閃石	5
11	旧河道1	弥生土器・土師器・高杯	- - -	ナデ/-	にぶい橙SYR6/4 灰SYR6/1	細、長石	4
12	旧河道1	弥生土器・底盤	- 10.0 -	刷毛目、ナデ/ナデ	にぶい橙7YR7/4 にぶい黄褐色10YR7/3	細、石英、角閃石	4
13	旧河道1	弥生土器・底盤	- 10.7 -	刷毛目、ナデ/ナデ、ユビオサエ	橙SYR6/6/橙SYR6/6	細、石英、長石、角閃石	2

第42図 旧河道1出土遺物2

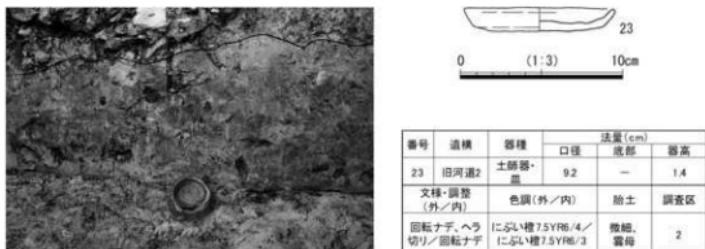


番号	造形	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
14	旧河道I	須恵器・杯蓋	—	—	—	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、長石、角閃石	6
15	旧河道I	須恵器・杯蓋	14.6	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白N7/0/灰白N7/0	微細、長石、角閃石	5
16	旧河道I	須恵器・杯身	12.4	—	—	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、長石	4
17	旧河道I	須恵器・杯身	—	13.6	—	回転ナデ/回転ナデ	灰N6/1/灰N7/0	微細、長石	—
18	旧河道I	須恵器・高杯	9.2	3.2	4.5	波状文、回転ナデ/回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、石英、長石	—
19	旧河道I	須恵器・壺・要	12.2	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白N7/0/灰白N7/0	微細、長石、角閃石	4
20	旧河道I	須恵器・壺	21.1	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、長石	—
21	旧河道I	須恵器・壺	—	—	—	平行タキ、自然縫/当て具痕、ナデ	灰オリヅ75Y4/2/灰白N7/0	微細、長石、角閃石	5
22	旧河道I	須恵器・杯身・杯蓋	—	14.0	—	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転ナデ	灰SY6/1/灰SY6/1	微細、石英、長石	4

第43図 旧河道1出土遺物3

14～22(第43図)は須恵器である。14・15は杯蓋であり、14は天井部と口縁部境界の稜は短い。15の稜は丸みをおび、復元口径は14.6cmである。16・17は杯身である。16は復元口径12.4cmである。口縁端部に段が形成されるが、鈍く不明瞭である。受け部は短い。胴部下半には回転ヘラケズリが施されている。17は杯身の口縁部であり、短く内傾し端部は丸い。14～16はMT15型式前後と考える。18は高杯の脚部と考えられる。端部は下方にのび、稜がみとめられる。透しが1か所確認でき、その下端に波状文が施されている。19は壺もしくは甕の口頭部である。復元口径12.2cmである。口縁端部には強いナデが施され、頸部は強く屈曲する。口縁の外面に十字のヘラ記号が施されている。20は広口甕の口縁部である。復元口径は21.1cmで、口縁部は端部で屈曲し上にのびる。21は甕の頭部と考えられる。復元頭部径は18.5cmである。22は杯身の底部もしくは杯蓋の天井部である。19～22の時期は絞り込めないが、古墳時代から古代の幅におさまるものと考えられる。

第4調査区北壁土層断面(第35図)では、本旧河道は井戸1を切っており、井戸1が埋没したのちに形成されたことがわかる。なお、井戸1から布留0～1式期の土器が1点出土しており、こ



出土状況(西から)

第44図 旧河道2出土遺物

れが井戸の廃絶時期を示すとすれば、本旧河道は布留0～1式期以降に形成されたといえる。本旧河道出土遺物の時期幅は弥生時代前期～古代である。よって、本旧河道の所属時期は、上限が古墳時代前期、下限が古代といえよう。

旧河道2（第34・41・44図、図版4） 第2調査区に位置し、東西方向にのびる。5層上面にて検出され、4層に覆われている。検出面の標高は2.3mである。最大幅11m前後である。湧水のため底面まで掘削できなかつたが、検出面からの深さは75cm以上である。埋土は6層に分けられる（第34図）。溝の位置や幅から判断すると、第25次調査地点（附属図書館蔵本分館増築II期地点、第3章）で検出された旧河道に連結する可能性がある。

出土遺物は、第2調査区中央付近において、検出した最下層（d層）より、土師器の皿（23）が出土した（第44図）。口径9.2cm、器高1.4cmである。底部はヘラ切りである。徳島県三好郡三好町大柿遺跡の古代～中世の土器編年（氏家2005）を参考にすると、皿の年代は11世紀代に位置づけられる。

なお、本旧河道と連結する可能性がある第25次調査地点の旧河道からは、遺物がほとんど出土しておらず時期は不明である。検出層位や遺物から本溝の所属時期を絞り込むことは困難であるが、弥生時代I～III・IV様式～中世の一時期といえる。

溝4（第36・41図） 第3・6調査区にまたがり、南西から北東にのびる。5層上面にて検出され、4層に覆われている。検出面は標高2.4mである。残存長19m前後、幅0.2～0.7m、底面の標高1.9mで、検出面からの深さ50cmである。埋土は単層でにぶい橙色7.5YR7/3の砂層である（第36図）。溝5に切られる。

出土遺物は、須恵器片1点、土師器片1点が確認されたが、図化できるものはない。

本遺構の所属時期は、層位から判断すると弥生時代I～III・IV様式～中世の一時期といえる。

溝5（第36・41・45図） 第6調査区に位置し、おおよそ北西から南東にのびる。5層上面にて検出され、4層に覆われる。検出面は標高2.25mである。残存長14.5m、幅0.5～0.9m、底面の標高1.75mで、検出面からの深さ50cmである。埋土は2層で、上層はにぶい黄褐色10YR7/3粘質土、下層は灰白色10YR7/1シルトである（第45図）。溝4を切る。

埋土から弥生土器片1点が出土しているが、小片のため図化できなかった。

本遺構の所属時期は、層位から判断すると、弥生時代I～3・4様式～中世の一時期である。

(2) 井戸

井戸1（第35・41・46図、図版4） 第4調査区に位置する。5層上面にて検出され、検出面の標高は2.2mである。掘方の約2分の1を検出した。平面形態は円形で、最大幅2.1mである。検出面から1.75mほど掘削しているが、湧水のためそれより下は掘削できなかつた。埋土下層のf～i層は粘質土で、上層のa～e層は砂質土である。遺構の切り合い関係をみると（第35図）、溝2→井戸1→旧河道1の順で形成されたことがわかる。

出土遺物は土師器の甕（24）が、現状の埋土最下層にあたるi層より出土している。i層は1.35m以上堆積していることから、井戸を廃棄する際に埋め戻され、甕はその過程で廃棄されたものと考えられる。胴部下半の一部分が欠損するもののほぼ完形である。口唇部はナデによって凹み、上方に肥厚する。頸部の屈曲は強く、「く」の字状を呈する。胴部は球状を呈し、底部は丸底である。外面調整は全体に刷毛目が施された後、底部付近に横方向の強いナデにより、刷毛目が消される。内面調整は胴部にヘラケズリと頸部と底部にユビオサエがみられる。外面にススが付着する。底部にはあまり付着していないが、胴部への付着は著しい。内面にはコゲがみられる。本土器の類例として、黒谷川郡頭遺跡昭和59年度調査の方形周溝墓2号墓土壤域出土の供献土器（菅原編1986）があげられる。これは、黒谷川IV式（大西編1990）に相当し、布留0～1式期に併行する。したがって、本土器もこの時期の所産と考えられる。

井戸の埋土から出土した土器からみて、この井戸の廃絶時期は、布留0～1式期の可能性が高い。

(3) 不明遺構

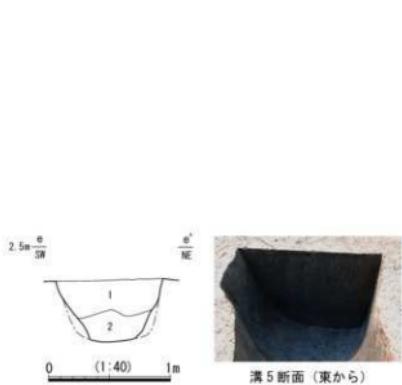
不明遺構1（第41・47図） 第3調査区の東部に位置する。5層上面で検出され、検出面の標高は2.1mである。平面形態は不整梢円形を呈し、長軸2.0m、短軸0.8mである。底面の標高1.9mで、検出面からの深さ20cmである。埋土は単層で、暗灰黄色2.5Y5/2の粘質土である（第47図）。

埋土から土器片が3点出土しているが、図化できるものはない。

不明遺構2（第41・47図） 第3調査区の東部、不明遺構1の南に位置する。5層上面で検出され、検出面は標高2.1mである。平面形態は不整三角形で、長軸1.1m、短軸0.8mである。底面の標高1.95mで、検出面からの深さ15cmである。埋土は単層で、暗灰黄色2.5Y5/2の粘質土である（第47図）。遺物は出土していない。

不明遺構3（第41図） 第3調査区の東部、不明遺構2の東に位置する。5層上面で検出された。平面形態は梢円形を呈し、長軸0.5m、短軸0.3mである。埋土は単層で、暗灰黄色の粘質土である。

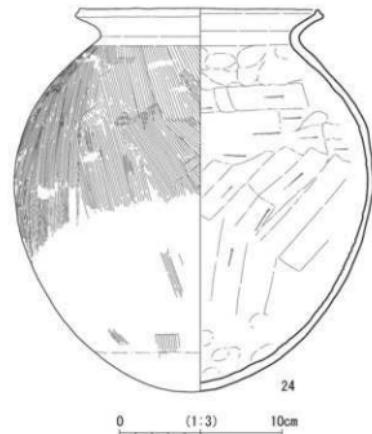
遺物は出土していない。



第45図 溝5

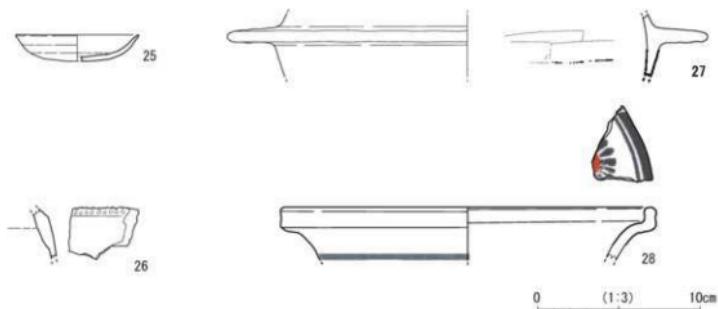


第47図 不明遺構1・2



第46図 井戸1出土遺物

番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	高さ				
24	井戸1	土師器・甕	14.6	—	23.5	ナギ、網目/ナギ、ヘラゲズ リ、ユビオサエ	にぶい緑15YR6/4/ にぶい黄緑10YR8/3	機織、長石、霞母	4



番号	器種	法量(cm)			文様・調整(外／内)	色調(外／内)	胎土	調査区
		口径	底径	器高				
25	備前焼・燈明皿	7.6	—	1.6	ナデ／ナデ	黒褐2.5Y3/1／灰褐5YR6/2	粗細	2
26	瓦質土器・火鉢	—	—	—	円形浮文状の突起。ナデ／ナデ	オリーブ墨5Y3/1／緑灰黄2.5Y5/2	粗細	3
27	瓦質土器・羽釜	—	—	—	ナデ／ナデ	灰N4/0／灰5Y5/1	粗細	3
28	瀬戸・美濃系陶器・鉢	23.0	—	—	灰釉圓線、回転ナデ／鉄釉花文様・圓線、回転ナデ	灰白2.5GY8/1／灰白2.5GY8/1	粗細	6

第48図 掘乱出土遺物

(4) 掘乱出土遺物（第48図、図版4）

第2調査区からは備前焼の燈明皿1点（25）が出土している。時期は近世と考えられる。

第3調査区からは陶器片2点・磁器片3点・瓦質土器片3点が出土し、このうちの2点を図化した。26は瓦質土器の火鉢であり、外面には直径2mmの円形浮文状の突起が2段みられる。時期は近世である。27は瓦質土器の羽釜である。復元鈎部径は29.4cmである。内外面ともにロクロによる回転ナデがみられる。外面にはスヌが付着している。時期は幕末と考えられる。本遺跡第2次調査（体育馆新営地点）東西大溝101の出土遺物（定森・中村編2005）に類例がみられる。

第6調査区からは、瀬戸・美濃系陶器片が出土している。28は外外面に鉄釉による文様が描かれており、内面に菊花文が配されている。時期は19世紀代と考えられる。

4.まとめ

本調査の主な成果を以下に整理する。まず、第3遺構面で検出された弥生時代I～2様式（前期中葉）に位置づけられる可能性が高い溝1～3が注目される。これらはほぼ並行し、ともに検出時の幅1.5m程度である。また、底面が機能時の標高をとどめていたとすれば、南西から北東方向への水流が想定される。第27次調査（立体駐車場新営地点）、第29次調査（学生支援センター改修地点、第6章）でも、同時期の溝群が検出されており、水田などに伴う用水路とみられる。以上が、庄・藏本

遺跡における弥生時代前期の集落構造を把握するうえで重要な調査成果といえる。

第2遺構面では、布留0～1式期の土器を伴う井戸が1基検出された。本遺跡第2次調査（体育館新設地点）井戸201の上層からも、形態的に類似する同時期の甕1点が出土している（定森・中村編2005）。山崎孝盛（2005）は、井戸から出土した完形土器について、奈良県の事例を中心に検討を行っている。これによると、弥生時代後期から庄内式期の井戸からは複数の甕が出土するのに対し、古墳時代前期の井戸では1点ないし数点の甕が出土するようになるという。本調査地点でもこれと同様の事例が確認されたといえる。これらの事例は、井戸廃棄時に行われた祭祀行為の痕跡とみられている。

（脇山佳奈）

文献

- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之（編），突蒂文と遠賀川，土器特寄会論文集刊行会，愛媛，pp. 471-498.
- 大久保徹也, 2002. 中国・四国地方の土器. 赤塚次郎（編），考古資料大観2. 弥生・古墳時代土器II. 小学館，東京，pp. 159-168.
- 大西浩正（編），1990. 黒谷川郡頭遺跡V. 徳島県教育委員会，徳島.
- 定森秀夫・中村豊（編），2005. 庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島.
- 菅原康夫（編），1986. 黒谷川郡頭遺跡I. 徳島県教育委員会，徳島.
- 菅原康夫・瀧山雄一, 2000. 阿波地域. 菅原康夫・梅木謙一（編），弥生土器の様式と編年. 四国編. 木耳社，東京，pp. 11-130.
- 田辺昭三, 1981. 須恵器大成. 角川書店，東京.
- 寺前直人, 2010. 武器と弥生社会. 大阪大学出版会，大阪.
- 氏家敏之, 2005. 大柿遺跡古代～中世の土器編年と遺構面の時期. 大柿遺跡III：四国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告31, 第8分冊まとめ／分析編. 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第60集. 徳島県埋蔵文化財センター，徳島，pp. 3-26.
- 山崎孝盛, 2005. 古墳時代の井戸祭祀に関する一考察：奈良県の井戸を題材として. 岡山大学大学院文化科学研究所紀要20, 71-87.

第5章 第28次調査（外来診療棟新営地点）

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

本学藏本キャンパスにおいて外来診療棟の新営が計画された。建設予定地の位置は、弥生時代前期の水田が確認された第24次調査（藤井節郎記念医科学センター新営）地点の東側、同じく弥生時代前期の水田および、弥生時代終末期に破棄された前漢鏡（異体字銘帶鏡）の破鏡が出土した第17次調査（中央診療棟新営）地点の北側、弥生時代前期の畠が確認された第20次調査（西病棟新営）地点の約120m北側に位置する（第2図）。

既往の発掘調査成果から、本調査地点で弥生時代をはじめとする遺構・遺物の存在が予想されたため、3688 m²の範囲について発掘調査を実施した。

2. 調査体制と期間

調査体制と期間は以下のとおりである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 岸本多美子・中原尚子・板東美幸・古川裕美・前田千夏・山本愛子
(以上、施設マネジメント部・技術補佐員)

調査期間 2012年7月2日～2013年1月19日

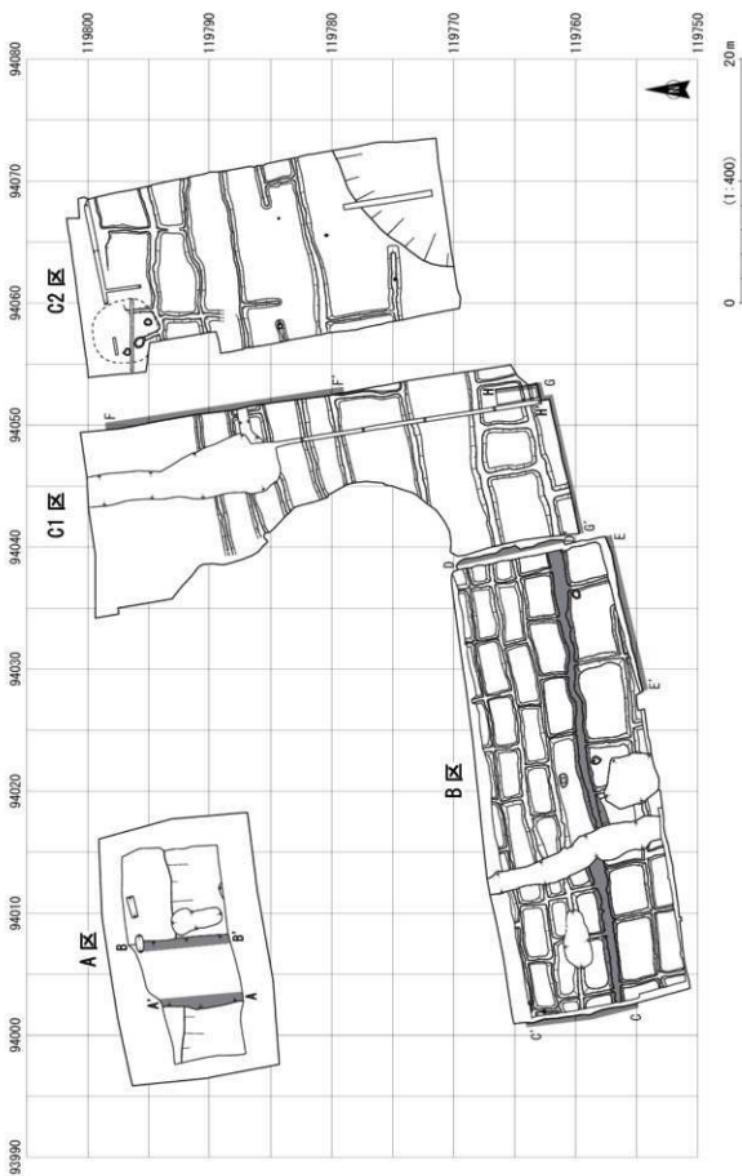
3. 調査地点の位置と区割り

（1）調査地点の位置

調査地点の所在地は徳島県徳島市藏本町2丁目50番地の1である。本学藏本キャンパスの東半中央付近に位置する（第2図）。

（2）調査地点の区割り

本調査地点では、西半北側をA区、西半南側をB区、東半西側をC1区、東側をC2区に区分し、計4つの調査区を設定した。また、本調査地点は世界測地系に基づく平面直角座標系・第IV系のX=119750～119805m、Y=93990～94080mの範囲におさまり、この範囲のなかで座標値を基準に南北・



第49図 第3連標面全体図と土層断面の位置

東西に5m間隔のグリッドを設定した（第49図）。

4. 調査の概要

本調査地点では、3つの遺構面を設定し調査を行った。その結果、第3遺構面で弥生時代前期中葉、第2遺構面で弥生時代前期末・中期初頭～中世の遺構が検出された。第1遺構面では明確な遺構は認められなかった。

（1）第3遺構面の遺構

弥生時代前期中葉の水田が検出された。水田は、標高1.2～1.5mで検出され、弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭の洪水起源砂層に覆われていた。東西75m、南北50mの範囲のなかに、70枚程度の水田が確認された。ただし、調査地点の北端付近では水田は検出されず、北西部のA区では谷状の地形が確認された。また、調査地点南東隅にあたるC2区の南側では自然落ち込みが検出された。これらは、水田域の北限と南東限を示す可能性がある。B区で確認された大畦畔は、本調査地点の西側に位置する第24次調査地点北区（第2章）で確認された大畦畔とつながる可能性がある。

（2）第2遺構面の遺構

土坑・ピットが複数検出されたが、時期がわかる遺物が出土しておらず、遺構の所属時期は決定できない。ただし、既往の調査による層位学的な所見から弥生時代前期末・中期初頭～中世の範囲におさまるものと考えられる。

（3）出土遺物

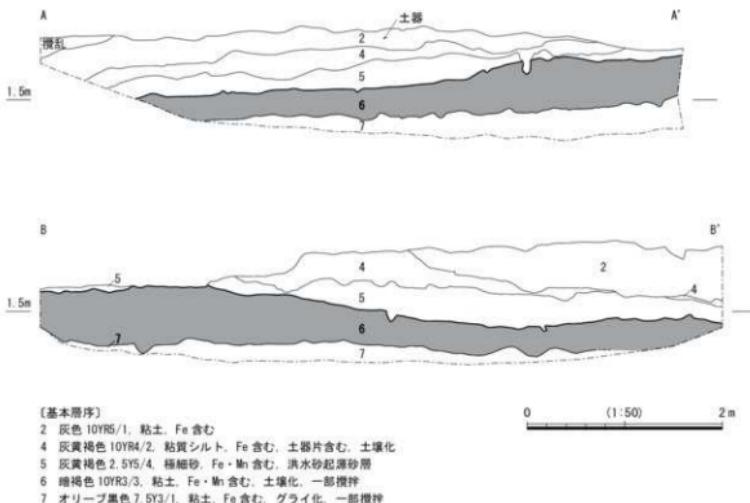
出土遺物は、弥生時代前期の土器と炭化鱗茎付着土器、粗製剥片石器、打製石斧、打製石鏽が検出された。また、近世から現代の陶磁器類が攪乱・表土から採集された。出土遺物の量はコンテナで、土器・陶磁器4箱、石器1箱、植物種実1箱である。

第2節 調査成果

1. 基本層序

第49図に土層断面図を記録した位置を示している。1～5層についてはB区南壁E-E'土層断面（第52図）、6～11層はC1区サブトレーナー東壁・南壁H-H'土層断面（第55図）を基準とし、必要に応じ他地区の層序を用い説明する。また、既往の調査成果（中村2000aなど、本書第20図）を参照しつつ各層の年代を比定した。

表土・攪乱 現地表面は標高3.2～3.3m、厚さ80～90cm程度である。近代以降に形成されたと考えられる。



第50図 A区中央西壁A-A'・東壁B-B' 土層断面

1層 造成土とみられる。上面は標高 2.5 ~ 2.6m、厚さ 20 ~ 30cm 程度である。近世以降に形成されたと考えられる。

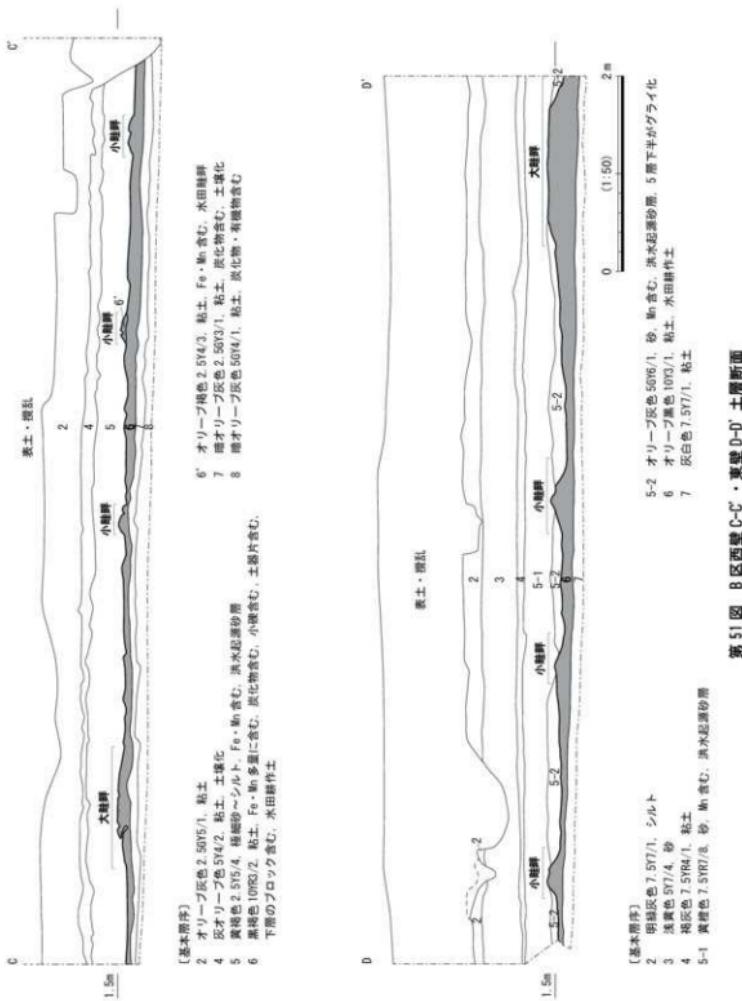
2層 明緑灰色 7.5Y7/1 のシルトで、上面は標高 2.4m、厚さ 10 ~ 20cm 程度である。近世以降の水田耕作土と考えられる。

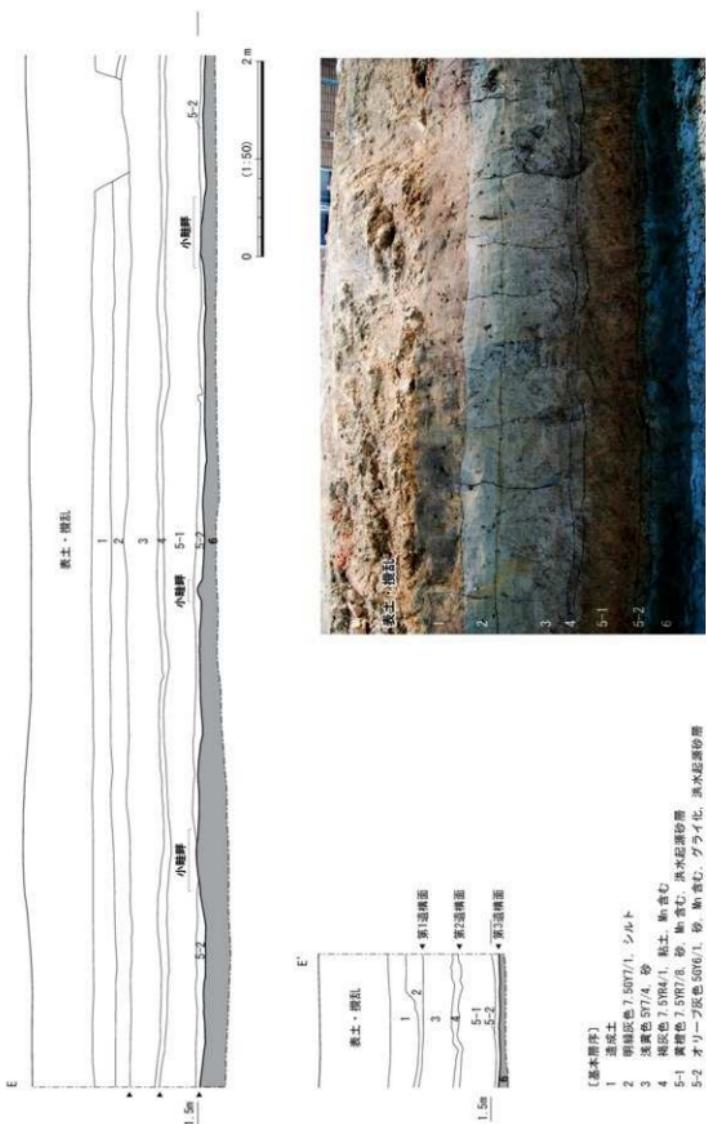
3層 浅黄色 5Y7/4 の砂層で、上面は標高 2.2 ~ 2.3m、厚さ 30 ~ 40cm 程度である。近世以降に形成されたと考えられる。3層上面を第1遺構面とした。

4層 褐灰色 7.5YR4/1 の粘土で、マンガンを含む。上面は標高 1.9m、厚さ 5 ~ 15cm 程度である。既往調査の「黒褐色土」に相当し、弥生時代前中期・中期初頭～中世の土壌化層であることがわかっている（中村 2000a）。

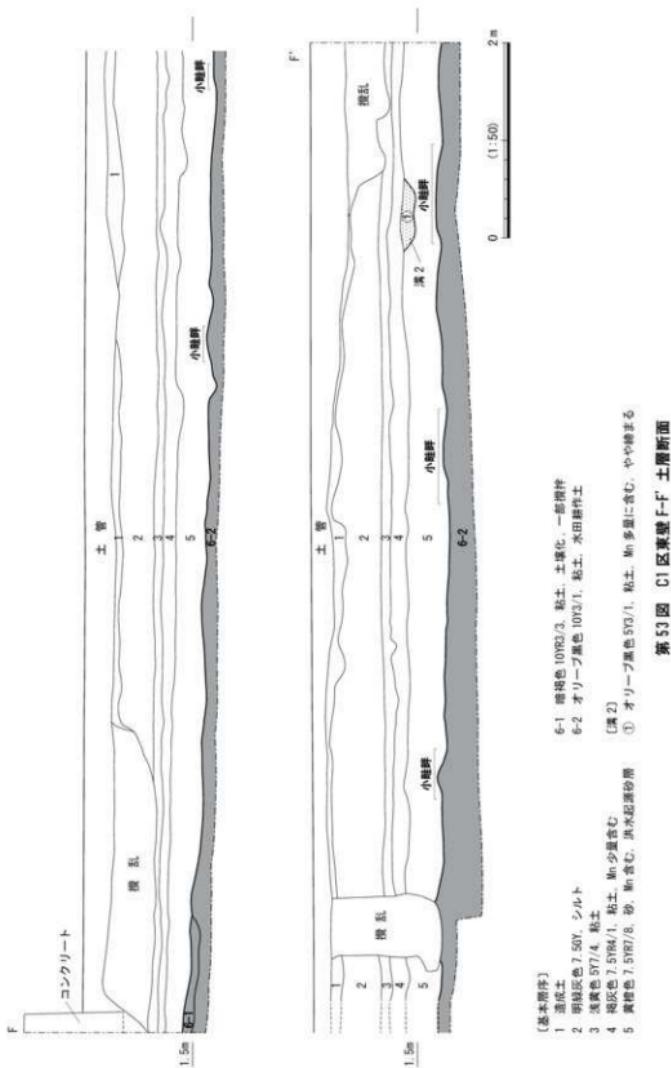
5層 黄橙色 7.5YR7/8 の砂層で、マンガンを含む。上面は標高 1.8m、厚さ 25 ~ 40cm 程度である。下層がグライ化し分層できる場合は、上層を 5-1 層、グライ化した下層を 5-2 層とする。5-2 層はオリーブ灰色 5GY6/1 の砂層で、マンガンを含む。上面は標高 1.5m 付近、厚さ 10 ~ 20cm 程度である。既往調査の「黄褐色細砂層」に相当し、弥生時代前期中葉～前中期・中期初頭の洪水起源砂層であることが明らかにされている（中村 2000a）。5 層上面を第2遺構面とした。

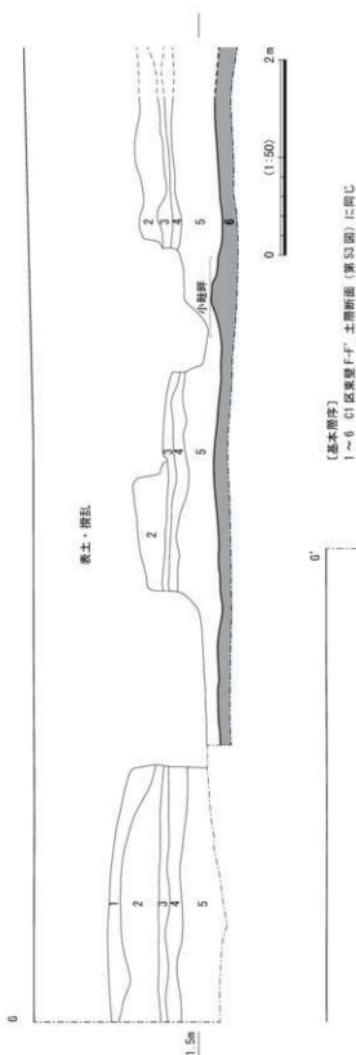
6層 オリーブ黒色 10Y3/1 の粘土である。既往調査の「暗褐色粘質土層」に相当し、その上面では突帯文・遠賀川併行期～弥生時代前期中葉の遺構が検出される（中村 2000a）。本調査地点では水田畦畔が検出された。畦畔上面が標高 1.5m、水田面の上面は標高 1.4m、厚さ 15 ~ 35cm 程度である。B 区西壁 C-C' 土層断面（第51図）では、畦畔の盛土と考えられる部分が分層でき、これを 6'



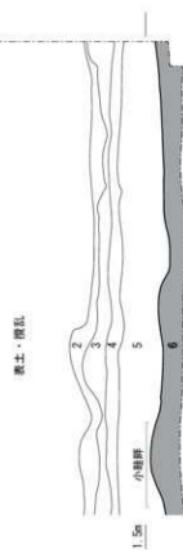


第52図 B区南壁E-E' 土層断面

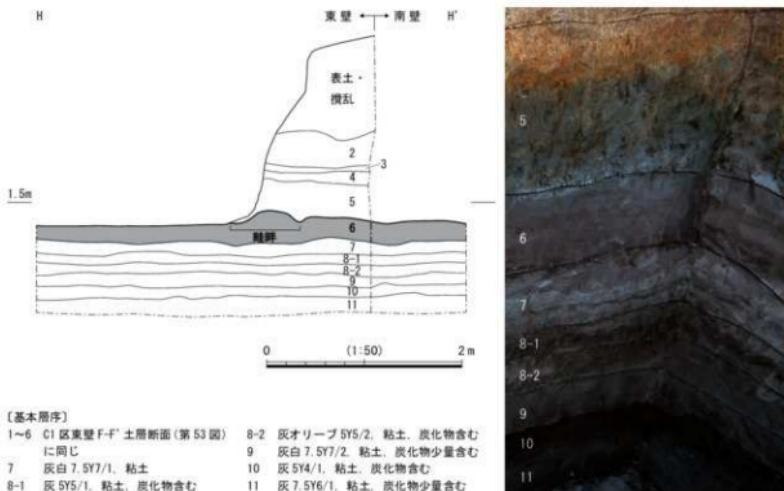




〔基本断面〕
1～6 C1区表層F-F' 土壌断面(第53図)に同じ



第54図 C1区南壁G-G' 土壌断面



第55図 C1区サブトレンチ東壁・南壁 H-H' 土層断面

層とした。6' 層はオリーブ褐色 2.5Y4/3 の粘土で鉄分・マンガンを含む。C1区東壁 F-F' 土層断面(第53図)では、6 層は2層にわかれる。上層の 6-1 層は暗褐色 10YR3/3 の粘土で、土壤化し一部搅拌される。下層の 6-2 層はオリーブ黒色 10Y3/1 の粘土である。

なお、水田が形成されないC2区の自然落ち込み付近では、6 層の様相がやや異なる(第65図)。上層を 6-3 層と下層を 6-4 層としたが、基本的に同質である。6-3 層は明青灰色 5B7/1 の粘土でグライ化し、炭化物含む。6-4 層は暗青灰色 5B4/1 の粘土で、6-3 層に比べ細片の炭化物を含む。6 层上面を第3遭構面とした。

7層 C1区サブトレンチ(第55図)では、灰白色 7.5Y7/1 の粘土で、上面は 1.1m、厚さ 10~20cm 程度である。なお、A区中央西壁 A-A'・東壁 B-B' (第50図)や B区西壁 C-C' (第51図)ではやや色調が暗い部分もみられる。

8層 土色によって2層に分層できる部分がある。上層の 8-1 層は灰 5Y5/1 の粘土で炭化物を含む。上面は標高 1.0m、厚さ 10~15cm 程度である。8-2 層は灰オリーブ 5Y5/2 の粘土で、炭化物を含む。上面は標高 0.9m、厚さ 10~15cm 程度である。

9層 灰白 7.5Y7/2 の粘土で、炭化物を少量含む。上面は標高 0.8m、厚さ 10~20cm 程度である。

10層 灰 5Y4/1 の粘土で、炭化物を含む。上面は標高 0.6~0.7m、厚さ 10~15cm 程度である。

11層 灰 7.5Y6/1 の粘土、炭化物を少量含む。上面は標高 0.5~0.6m、厚さ 20cm 以上である。

2. 第3遺構面の遺構と遺物

(1) 水田

弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭の洪水に起源する黄褐色細砂層（5層）によって覆われた、暗褐色粘質土層（6層）の上面から水田畦畔が検出された。水田域周辺の地形をみると、調査地点北西のA区（第56・57図）では、標高1.8m前後の微高地から南に向かって落ち込む谷状地形が形成される。もっとも低いところで標高1.5m前後である。微高地や谷状地形では水田は検出されていない。調査地点東半のC1・2区（第59・60・62図）では北から南に向かって標高が低くなる傾向がみられる。標高が高い北隅付近では水田が確認されておらず、水田域の北限を示すものと考えられる。また、C2区南東隅で自然落ち込みが確認されている。もっとも低い部分で標高0.3m前後である。この範囲から水田は検出されていないため、水田の南東限を示す可能性がある。なお、調査地点全体では北西から南東へ標高が低くなる傾向がみられる。

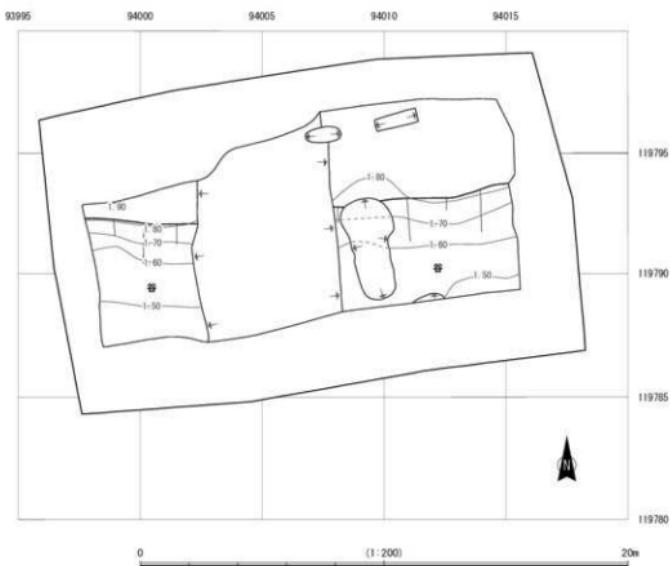
土層の堆積状況などの条件によって、すべての畦畔が検出できたわけではないが、東西75m、南北50mの範囲に70枚程度の水田面が検出された。とくに、B区（第58・61図）西側3分の2の範囲では、畦畔を明瞭に検出できたため、この部分について検討する。これらは小区画水田に分類され、各区画の形態は、東西を長辺にした長方形のものが多く、正方形に近いものもわずかにみられる。規模は、一辺1.5～7.0m程度、面積は4～25m²程度で10m²前後のものが中心となる。

畦畔は小畦畔と大畦畔に区分できる可能性が高い。大畦畔はB区中央付近を東西にのびる（第58図の網掛け部）。一方、C1区南半は土層の堆積状況により畦畔の検出が困難であったため、C1区南半を東西にのびる畦畔が、B区の大畦畔と連続するかは不明瞭である。なお、B区の大畦畔は、本調査地点西側の第24次調査北区で確認された大畦畔（第2章）とつながる可能性がある。大畦畔の規模は、上端幅50～120cm程度、下端幅110～170cm程度、高さ数～15cm程度である。小畦畔の規模は、上端幅15～80cm程度、下端幅30～100cm程度、高さ数～15cm程度である。明確な水口は確認されないことから、「小畦畔の上を水がオーバーフローして順次隣の田へ移っていく方法」（工楽1991、78頁）が採用されていたことを暗示する。もしそうであれば、本調査地点では、北西から南東方向に、小畦畔の上をオーバーフローさせながら水を流していたことが想定される。

C2区北西隅付近で、水田耕作土（6層）上面に、3×1m程度の土坑状の窪みが複数みられ、掘り返されたような痕跡が残る（第63図-6・7）。形成要因は不明である。水田の造成や耕作に伴うものであろうか。なお、土坑・ピット4～6（第60図）の本来の掘り込み面は、後述のように5層以上と考えられることから、土坑状の窪みとは無関係である。

出土遺物（第63図-5、第64図、図版5） 水田の時期を検討する手がかりとなる、水田耕作土中（6層）と水田面直上もしくはやや浮いた位置、つまり水田面を覆う弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭の洪水起源砂層（5層）の最下層・下半で出土した遺物を以下にあげる。

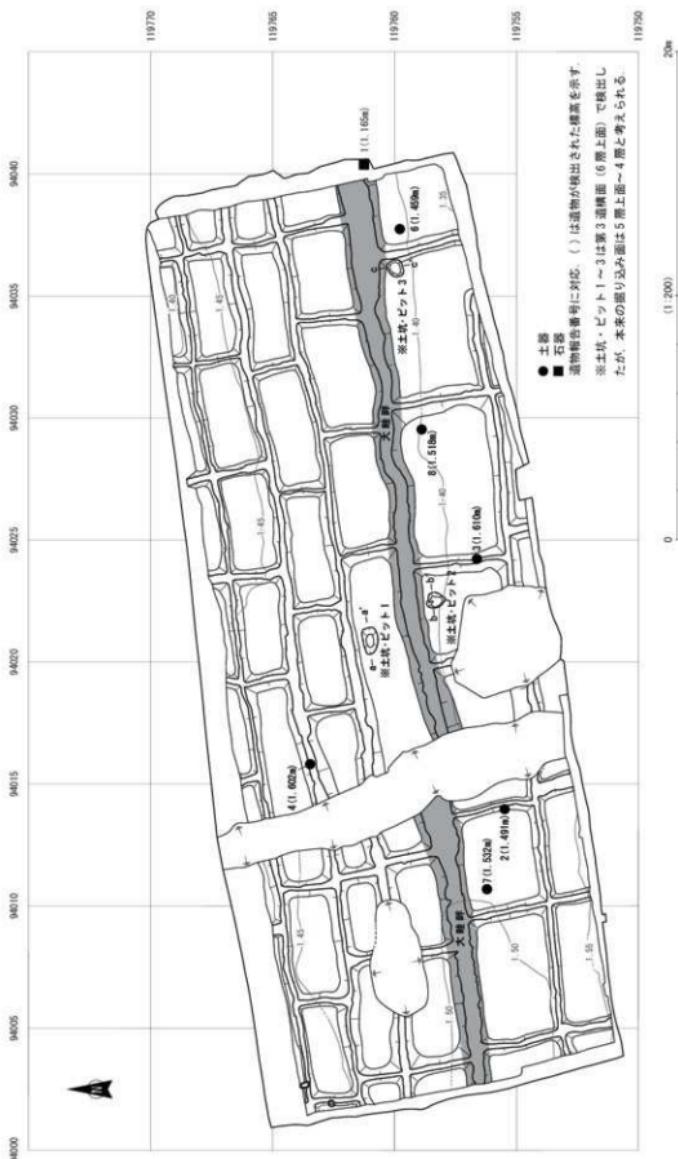
1は緑色岩製の粗製剥片石器である。調査地点側溝掘削時に出土し検出層位は水田耕作土中（6層）下部もしくは7層に相当する（第63図-5）。刃部の両面に光沢がみられる。図面の網掛け部は、肉眼観察により光沢がみられる範囲を示す。



第56図 A区第3遺構面平面図



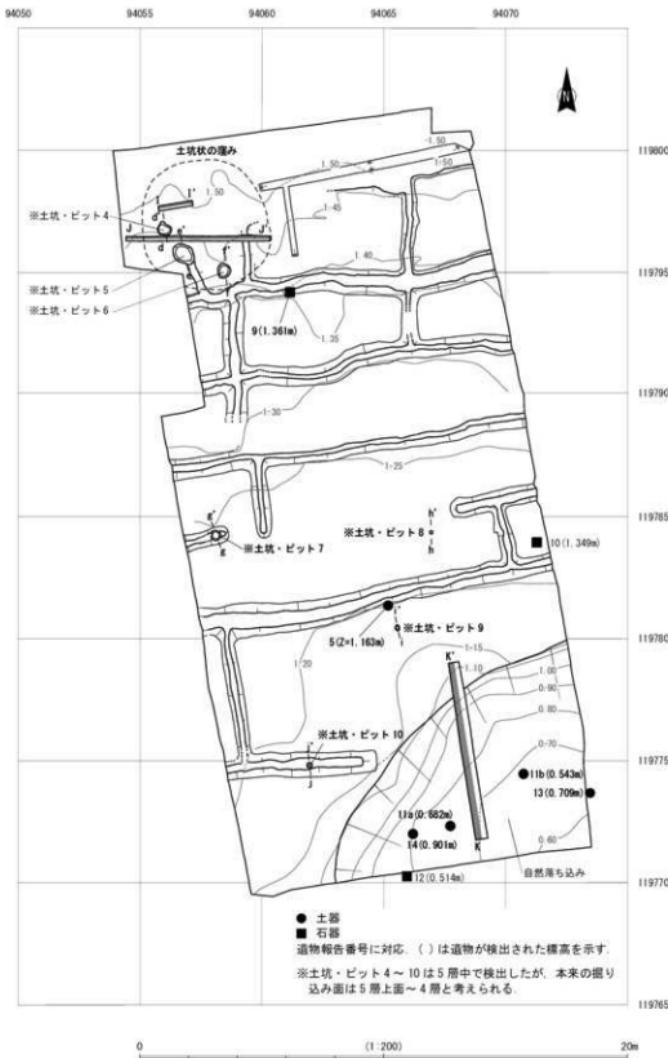
第57図 A区第3遺構面全景（西から）



第58图 8区第3道棋面平面图



第59図 C1区第3構造物平面図



第60図 C2区第3遺構面平面図



第61図 B区第3遺構面全景（西から）



第62図 C1・2区第3遺構面全景（南から）



1. 大畦畔検出状況 (B区西半, 北東から)



2. 水田面完掘状況 (B区西半, 南東から)



3. 大畦畔 (B区西壁 C-C' 土層断面)



4. 小畦畔 (B区西壁 C-C' 土層断面)



5. 粗製剥片石器 (1) 出土状況 (B区東壁 D-D' 土層断面)

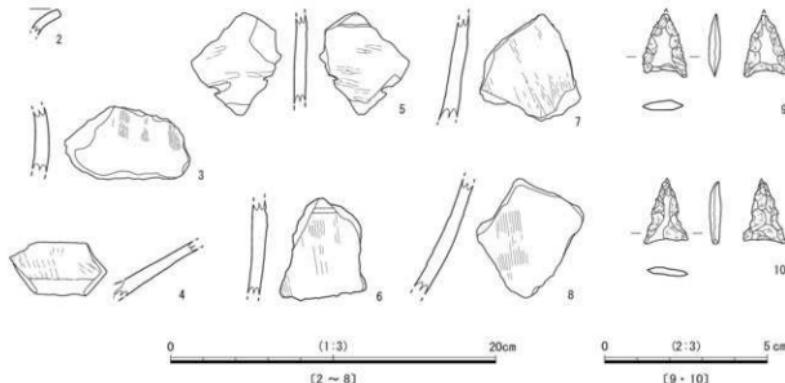
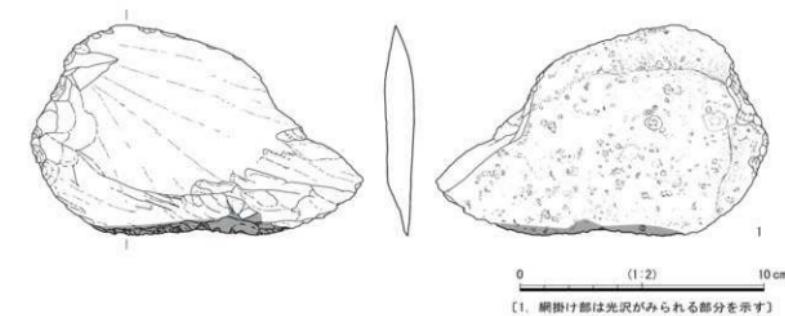


6. 土坑状の窪み (C2区, 西から)



7. 土坑状の窪み I-I'・J-J' 土層断面

第63図 水田畦畔検出状況・遺物出土状況、土坑状の窪み I-I'・J-J' 土層断面



番号	器種	最大長 [cm]	最大幅 [cm]	最大厚 [cm]	重量 [g]	石材	備考	調査区	造構	層位
1	粗製剥片石器	8.6	13.6	1.3	166.5	緑色岩	刃部両面に光沢	B	包含層	6~7層
9	打製石鏃	1.9	1.3	3.0	0.63	サヌカイト	凹基式	C2	包含層	5層 下半
10	打製石鏃	1.9	1.3	2.5	0.61	サヌカイト	凹基式	C2	包含層	5層 下半

番号	器種	法量 [cm] 口径	法量 [cm] 底径	文様	器面調整 器高	色調 (外/内)	備考	調査区	造構	層位
2	弥生土器・ 壺?	—	—	—	ナデ/ナデ	明赤褐色5YR5/6/ にふい橙7.5YR6/4		B	包含層	5層 下半
3	弥生土器・ 壺?	—	—	—	刷毛目/-	灰黃褐10YR5/2/ 褐7.5YR4/4		B	包含層	5層 下半
4	弥生土器・ 壺?	—	—	—	-/-刷毛目	褐灰10YR5/1/ 灰黃褐10YR5/2	幅広粘土帯-外 傾接合	B	包含層	5層 下半
5	弥生土器・ 壺?	—	—	箇描沈縄 文1条	ミガキ、ナデ/ ミガキ、ナデ	灰黄2.5Y7/2/ 黄2.5YR4/1		C2	包含層	5層 下半
6	弥生土器・ 壺?	—	—	箇描沈縄 文1条	-/-刷毛目、ナデ	橙5YR6/6/ 橙5YR7/6		B	包含層	5層 下半
7	弥生土器・ 壺?	—	—	—	刷毛目、ナデ/-	灰褐7.5YR5/2/ 灰褐7.5YR5/2		B	包含層	5層 下半
8	弥生土器・ 壺?	—	—	—	刷毛目、ナデ/-	橙5YR6/6/ にふい橙5YR7/4		B	包含層	5層 下半

第64図 水田出土遺物

2～10は水田面の直上もしくはやや浮いた位置（5層最下部・下半）から出土した遺物である。

2～8は土器である。2は口縁部である。3は壺の胴部であろうか。外面に刷毛目調整が残る。4は壺の底部と考えられる。粘土帶の接合痕が観察され、幅広粘土帶－外傾接合（三阪2014）の可能性が高い。内面に刷毛目調整がみられる。5は胴部片である。箋描沈線文が1条残る。外面・内面に横方向のミガキ調整がみられる。6は壺胴部上半と考えられる。箋描沈線文が1条残る。外面には縱方向の刷毛目調整がみられる。7・8は胴部で、外面に刷毛目調整がみられる。

9・10はサスカイト製の回基式の打製石鏟である。

時期 庄・藏本遺跡の層序とその形成時期については、中村豊（2000a）によって整理され、その後も資料が蓄積されている。これらを参照すると、洪水起源砂層である本調査地点5層の形成は、弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭と考えられる。

本調査地点では、この洪水起源砂層（5層）を除去した暗褐色粘質土層（6層）上面から水田が検出された。本調査地点の南に隣接する第17次調査（中央診療棟新営）地点でも同様に、洪水起源砂層を除去した暗褐色粘質土層上面から水田面が検出されており、出土遺物の検討を通じ、水田の時期は弥生時代前期中葉に位置づけられている（中村2000b）。本調査地点で検出された水田も検出層位からみて、第17次調査の水田と同様、弥生時代前期中葉に位置づけられる可能性が高いといえる。

本調査地点における出土遺物の時期について検討すると、水田耕作土（6層）あるいはその下層（7層）から出土した粗製剥片石器（1）は、縄文時代晚期～弥生時代前期末・中期初頭（I-3・4様式）の範囲におさまると考えられる。また、水田面直上あるいはやや浮いた位置から出土した土器は、箋描沈線文が施されるものが含まれ（5・6）、突帯文・遠賀川併行期（I-1様式）～弥生時代前期末・中期初頭の時期幅におさまる。打製石鏟（9・10）は回基式で重量が0.6g程度であり、縄文時代晚期～弥生時代前期に量的なピークがある（寺前2010）。本調査地点の水田の所属時期について、出土遺物から詳細な時期を絞り込むことは難しいが、上述の層位学的な所見や周囲の調査地点の水田の時期をふまえると、弥生時代前期中葉（I-2様式）であるとの見方に矛盾しない。

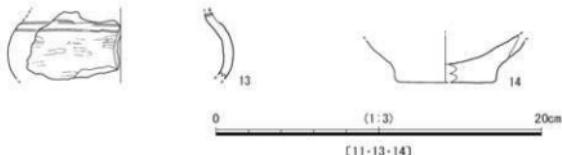
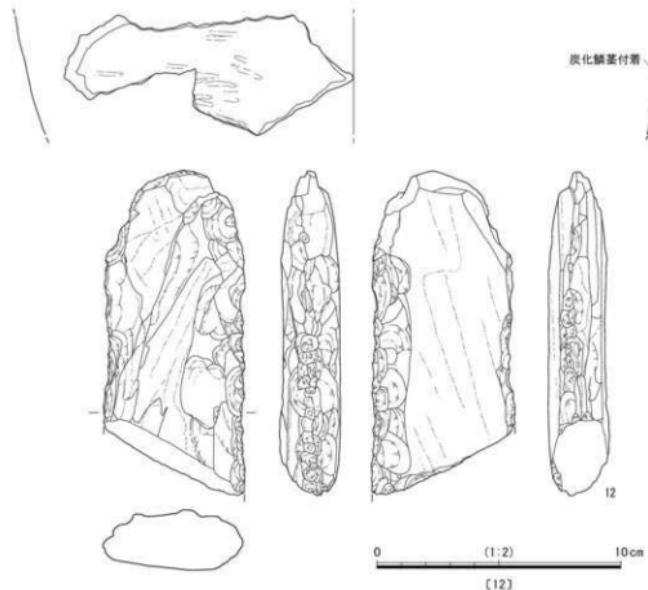
（2）自然落ち込み（第60・65図）

自然落ち込みはC2区南東隅で検出された。土層断面・検出状況・遺物出土状況を第65図に示している。検出された層位は、水田面と同じ6層上面である。平面規模は残存部分で、東西10.6m、南北8.5m程度である。5層を除去した段階では、上端から緩やかに標高が低くなる状況が確認され、上端の標高1.1m前後、下端の標高0.6m前後、深さ0.5m前後であった。第60図の自然落ち込み部分については、この段階の等高線を記録したものである。

さらに、自然落ち込み中央に南北方向のサブトレーンチを設定し、土層断面K-K'（第65図）を観察したところ、南半でさらに一段下がる部分が検出された。最も低い南端で標高0.3m前後である。そこには基本層序6-3・4層と似た埋土が2層堆積している状況が確認された。上層の1層は明青灰色5B7/1の粘土で炭化物を含む。6-3層と類似する土質である。下層の2層は黒褐色10YR3/1の粘土で



第65図 自然落ち込み



番号	器種	法量[cm] 口径 底径 器高	() は復元径	文様	器面調整 (外/内)	色調 (外/内)	備考	調査区	遺構	層位
11	弥生土器・ 壺?	-	-	-	ミガキ/-	灰黄褐10YR6/2/不明	内面に炭化鰐 茎付着	C2	自然落 ち込み	2層
13	弥生土器・ 壺	-	-	-	謹描沈線 文2条以上	ミガキ/ユビ オサエ, ナデ	黒褐10YR3/1/ 灰黄褐10YR5/2	C2	自然落 ち込み	1層
14	弥生土器・ -	-	(6.2)	-	ナデ/-	褐灰10YR4/1/ 黄灰2.5Y6/1	幅広粘土帯-外 縫接合	C2	自然落 ち込み	1層
番号	器種	最大長 [cm]	最大幅 [cm]	最大厚 [cm]	重量 [g]	石材	備考	調査区	遺構	層位
12	打製石斧	13.3	5.8	2.5	282.4	緑色岩		C2	自然落 ち込み	2層

第66図 自然落ち込み出土遺物

6-3・4層より粘性が低く、炭化物を多量に含む。

出土遺物（第66図、図版6） 11・12は、自然落ち込み埋土2層から出土した遺物である。11は壺の胴部と考えられる。外面は横方向のミガキ調整で、胎土は粗く砂粒が多く含まれる。調整・胎土・色調などの特徴からみて、弥生時代前期の土器である可能性が高いが、時期は確定できない。ただし、後述するように下層の1層から、突帯文・遠賀川併行期～弥生時代前期中葉の土器が出土しているため、2層の時期もこれと同時期かそれ以前の可能性がある。さて、この土器の内面には炭化鱗茎（佐々木2014）が付着¹、外面には炭化物が吹きこぼれ状に付着している。縄文時代の炭化鱗茎は報告されているが、弥生時代の事例は初とされる。弥生時代前期の摂取食物を知るうえで、きわめて重要な資料といえよう。12は緑色岩製の打製石斧である。刃部は欠損する。

13・14は埋土1層から出土した遺物である。13は小型の壺胴部で、頸部下に籠描沈線文が現状で2条残る。外面は横方向のミガキ調整で、黒色化した痕跡がみられる²。胴部形態や籠描沈線文が少条である点から、その時期は前期中葉（1-2様式）、あるいは突帯文・遠賀川併行期（1-1様式）に遡る可能性もある。14は底部である。幅広粘土帶—外傾接合（三坂2014）がみられ、これは弥生時代前期に普遍的な技術である。また、自然落ち込みからは数点の植物種実が出土している。これと炭化鱗茎については、今後、同定および年代測定を行い別稿で報告する予定である。

時期 自然落ち込みの検出層位および埋土の出土遺物から検討した場合、自然落ち込みの形成時期は弥生時代前期中葉以前と考えられるが、水田機能時にどの程度落ち込みが埋没していたのかは不明である。

3. 第2遺構面の遺構と遺物

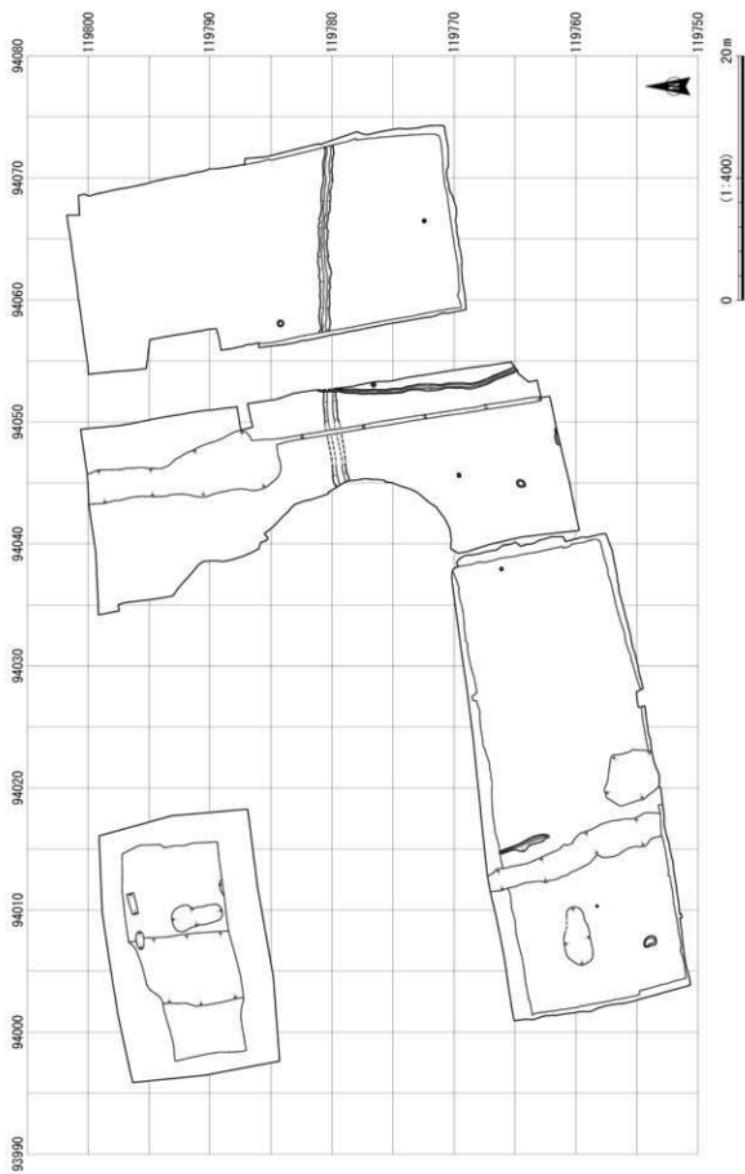
弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭に形成された洪水起源砂層である5層の上面を第2遺構面とした。本遺構面で検出された遺構には、5層の上面から掘り込まれたものだけではなく、弥生時代前期末・中期初頭～中世の土壤化層である4層から掘り込まれ、5層に達したものも含まれる。これは4層では基盤層と遺構埋土が同質で区分が困難であり、5層上面でこれらの遺構を検出せざるをえなかつたためである。

（1）溝

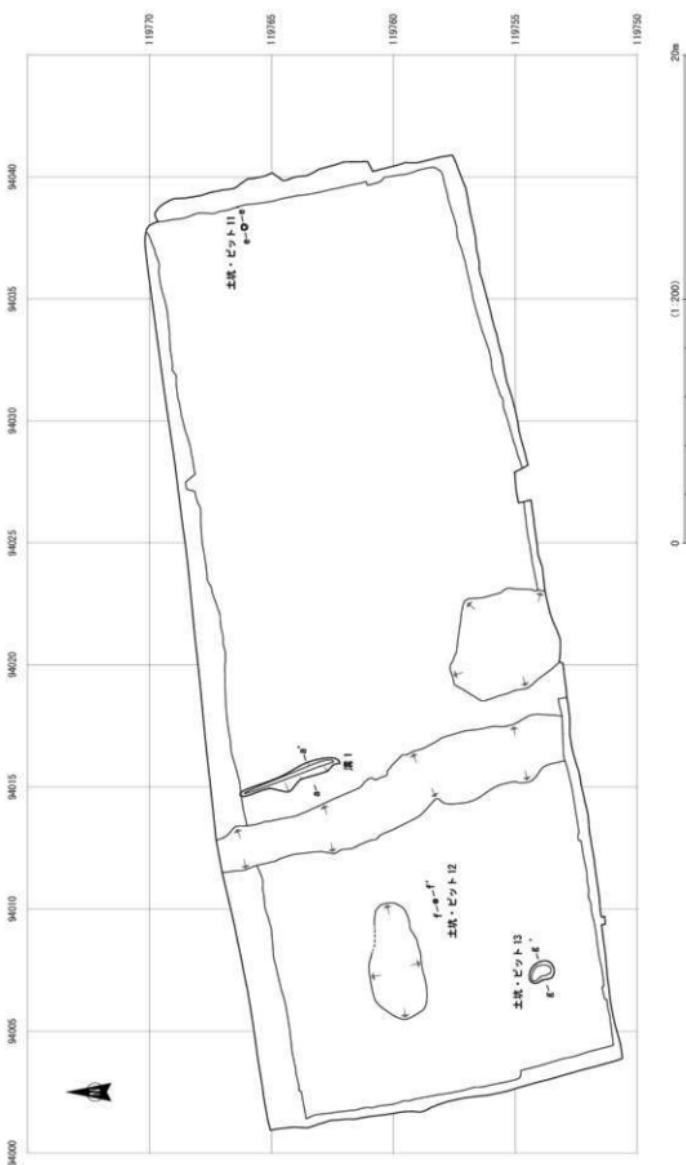
溝1～3は5層上面で検出された。埋土はオリーブ黒色の粘土である。これらの溝からは時期が特定できる遺物が出土しておらず、層位学的な所見から弥生時代前期末・初頭～中世の一時期と考えられる。

溝1（第68・71図） B区に位置し、南北方向にのびる。幅0.3～0.6m、長さ4.1m、深さ15cmである。断面形態は段を有しテラス状を呈する部分がみられる。

溝2（第53・69～71図） C1区とC2区で検出された東西方向にのびる溝である。両区の溝は連続するものとみられるため、一括し溝2と報告した。C1区では中央付近は擾乱により削平されているものの、幅1.0～1.3m、長さ7.8m、深さ5cmである。C2区は幅0.6～1.0m、長さ15.1m、深さ5cmである。溝3に切られる。



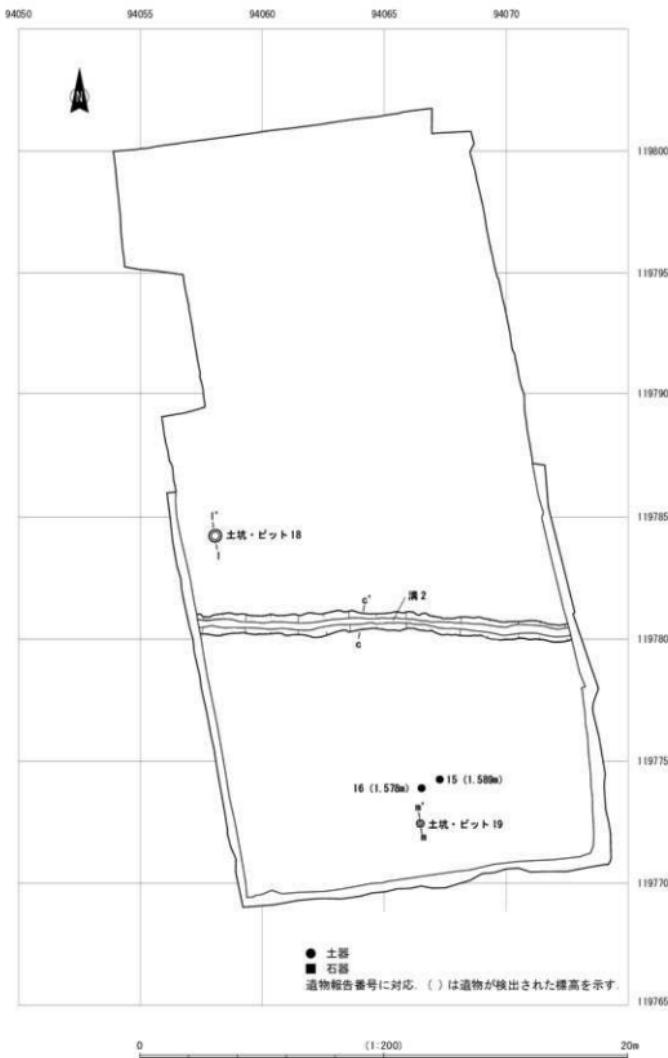
第51図 第2透構面全林図



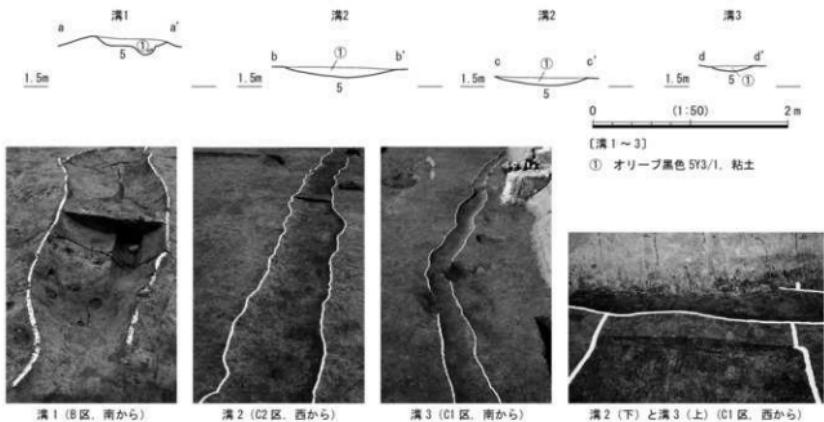
第68図 B区新2遺構平面図



第69図 C1区第2構造面平面図



第70図 C2区第2遺構面平面図



第71図 溝土層断面・完掘状況

溝3（第69・71図）C1区に位置し、南北方向にのびる。幅0.15～0.6m、長さ16.5m以上、深さ5cmである。溝2を切る。

（2）土坑・ピット

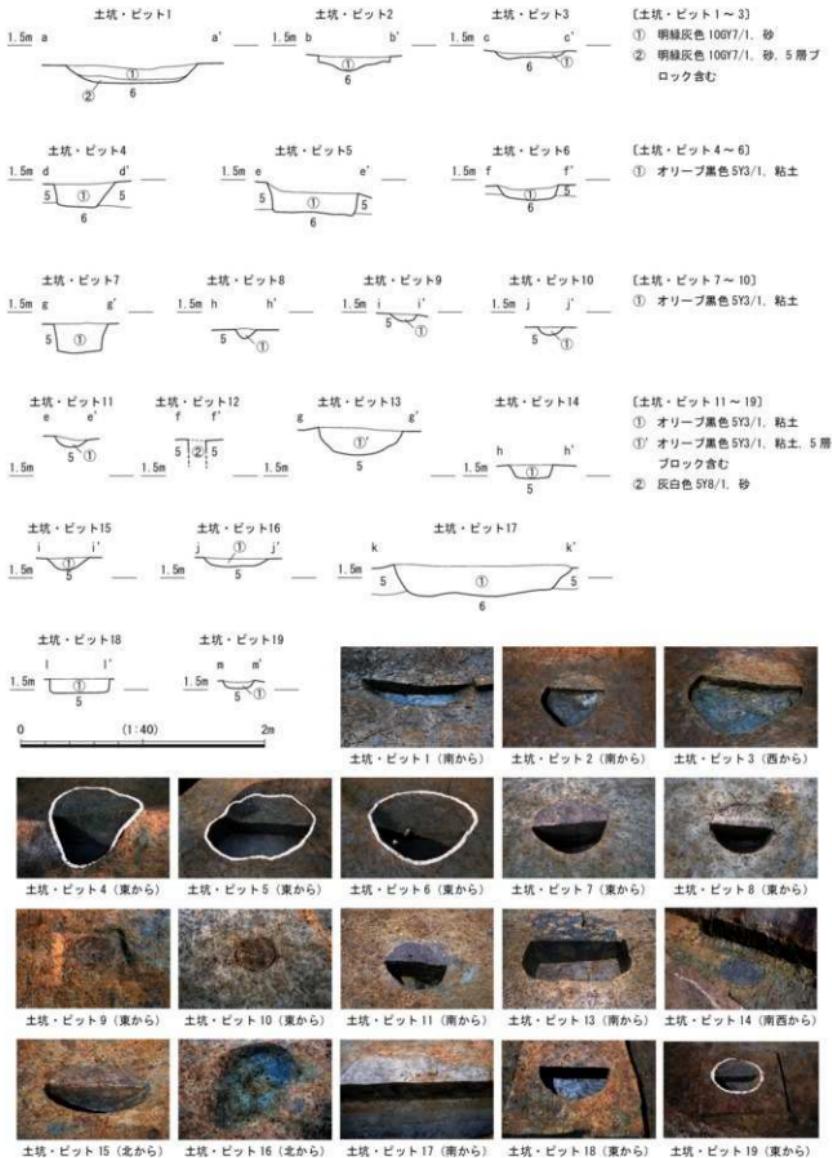
今回検出された土坑とピットは、サイズに不連続が認められず、柱痕の有無も不明確であったため、両者を一括し土坑・ピットと報告した。

洪水起源砂層である5層の上面（第2遺構面）から検出された土坑・ピット11・13～19および先述の溝1～3の埋土は、オリーブ黒色の粘土を基本とする。一方、土坑・ピット4～10は5層中で検出されたが、その埋土は5層上面から検出された遺構と同様、オリーブ黒色の粘土である。そのため、これらも本来は5層上面で検出された遺構と同様、5層上面もしくは4層から掘り込まれた可能性がある。

また、土坑・ピット1～3は6層上面から検出された。その埋土は明緑灰色の砂層であり、5層上面から検出された遺構の埋土とは異なる。ただし、土坑・ピット1の埋土下層（2層）には5層のブロックが含まれていることから、5層形成以降に埋没した可能性が高い。土坑・ピット1～3が水田面や畦畔を切っている点からも、これらの遺構の本来の掘り込み面は、5層あるいは4層の可能性が高いため、第2遺構面の遺構とあわせて報告した。

これらの土坑・ピットからは、時期が判別可能な遺物は出土していないが、層位学的な所見から弥生時代前期末～中期初頭～中世の一時期に位置づけられる。

土坑・ピット1（第58・72図）B区の6層上面から検出された。長径1.1m、短径0.6mの楕円形で深さ15cmである。埋土は2層に分かれ、上層（1層）・下層（2層）とも基本的に同質であるが、下層には基本層序5層のブロックが含まれる。



第72図 土坑・ピット土層断面

土坑・ピット2 (第58・72図) B区の6層上面から検出された。長径0.8m、短径0.6mの不整楕円形で深さ10cmである。

土坑・ピット3 (第58・72図) B区の6層上面から検出された。長径0.7m、短径0.6mの楕円形で深さ5cmである。

土坑・ピット4 (第60・72図) C2区の5層中から検出された。長径0.6m、短径0.5mの不整楕円形で深さ20cmである。

土坑・ピット5 (第60・72図) C2区の5層中から検出された。長径1.0m、短径0.8mの楕円形で深さ25cmである。

土坑・ピット6 (第60・72図) C2区の5層中から検出された。長径0.6m、短径0.5mの楕円形で深さ10cmである。

土坑・ピット7 (第60・72図) C2区の5層中より検出された。直径0.45mの不整円形で深さ25cmである。後述する土坑・ピット18は土坑・ピット7のほぼ直上に位置し、直径もわずかに大きい点から、両者は同一の遺構と考えられる。

土坑・ピット8 (第60・72図) C2区の5層中より検出された。直径0.15mの円形で深さ10cmである。

土坑・ピット9 (第60・72図) C2区の5層中より検出された。長径0.25m、短径0.20mの楕円形で深さ5cmである。

土坑・ピット10 (第60・72図) C2区の5層中より検出された。直径0.25mの円形で深さ10cmである。

土坑・ピット11 (第68・72図) B区の5層上面より検出された。直径0.2mの円形で深さ10cmである。

土坑・ピット12 (第68・72図) B区の5層上面より検出された。直径0.2mの円形で深さ10cm以上である。埋土は灰白色SY8/1の砂層で、5層上面で検出された他の遺構の埋土とは異なる。上層で掘り込み面を検出しえなかつたが、現代のボーリング調査などの痕跡の可能性がある。

土坑・ピット13 (第68・72図) B区の5層上面より検出された。長径1.1m、短径0.7mの不整楕円形で深さ25cmである。埋土は5層上面で検出された他の遺構同様、オリーブ黒色の粘土であるが、5層のブロックが含まれる。

土坑・ピット14 (第69・72図) C1区の5層上面より検出された。長径0.4m、短径0.3mの楕円形で深さ10cmである。

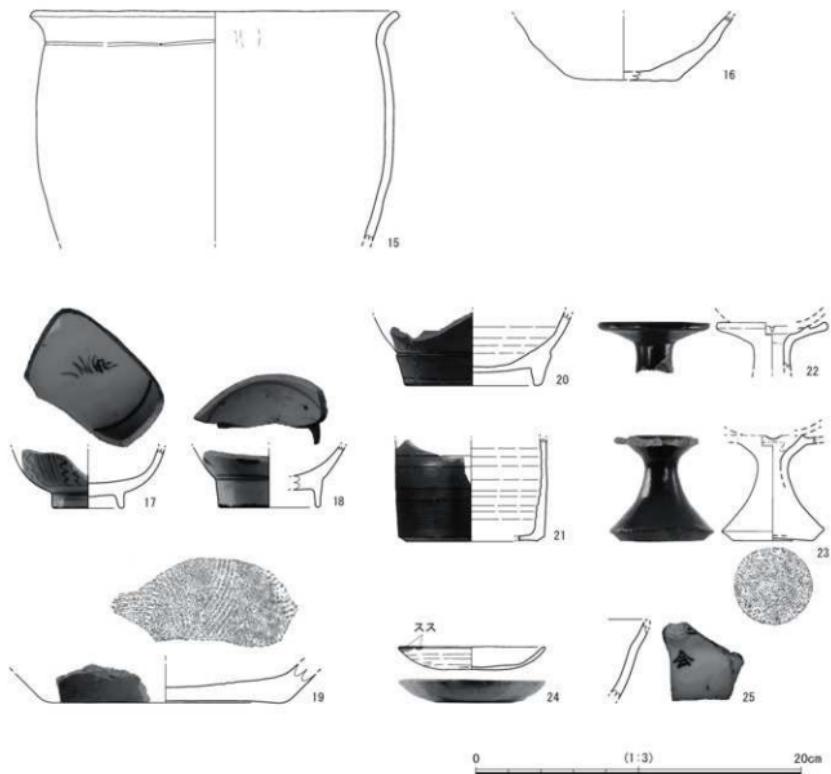
土坑・ピット15 (第69・72図) C1区の5層上面より検出された。長径0.4m、短径0.3mの楕円形で深さ10cmである。

土坑・ピット16 (第69・72図) C1区の5層上面より検出された。長径0.8m、短径0.6mの楕円形で深さ10cmである。

土坑・ピット17 (第69・72図) C1区の5層上面より検出された。長径1.4m、短径0.2m以上の不整楕円形で深さ25cmである。

土坑・ピット18 (第70・72図) C2区の5層上面より検出された。直径0.5mの円形で深さ10cmである。前述のように、土坑・ピット18と7は同一の遺構である可能性が高い。

土坑・ピット19 (第70・72図) C2区の5層上面より検出された。直径0.3mの円形で深さ5cmである。



第73図 包含層・擾乱出土遺物

4. 包含層・擾乱出土遺物（第73図、第4表、図版6）

4・5層 15・16は弥生土器である。15は甕である。頸部に籠描沈線文が1条施される。口唇部は平らで刻目はみられない。弥生時代前期に位置づけられる。16は底部である。器面の摩耗が著しい。

表土・擾乱 17・18は肥前系磁器である。疊付のみ無釉である。17は碗で、外面と内面見込に染付により文様が施される。18は広東（形）碗である。

19は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは放射状を呈する。

20～23は大谷焼である。20・21は瓶あるいは徳利と考えられる。内外面とも回転ナデ調整が施される。20は基筒底状の断面三角形の削り出し高台、21は平底もしくは若干の上げ底である。製作時期は特定できないが、大谷焼が普及した19世紀以降の所産（日下1998a）である。22・23は

第4表 包含層・擾乱出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm), () は複元径 口径 底径 器高			文様	器面調整 (外/内)	色調 (外/内)	備考	調査区	遺構	層位	
15	弥生土器・ 甕	(22.3)	—	—	蓋描沈線 文1条	—/ユビオサエ、 ナデ	にぶい黄橙10YR6/4/ にぶい橙7.5YR7/4	C2	包含層	4・5 層		
16	弥生土器・ —	—	6.5	—		—/—	にぶい黄橙10YR6/4/ にぶい黄橙10YR6/4	C2	包含層	4・5 層		
番号	器種	法量(cm), () は複元径 口径 底径 器高			絵付 紋案	器面調整 (外/内)	色調 (外/内)	備考	調査区	層位	層位	
17	肥前系磁器・碗	—	4.3	—	染付 透明	ロクロ/ロクロ		置付砂付	A・B	表土・ 擾乱	—	
18	肥前系磁器・広口碗	—	(6.1)	—	染付 透明	ロクロ/ロクロ		置付砂付着	A・B	表土・ 擾乱	—	
19	堺・明石系陶器・罐	—	(14.5)	—	— 鉄	ロクロ/ロクロ	にぶい赤褐2.5YR5/3/ 明赤褐2.5YR5/6	A・B	表土・ 擾乱	—		
20	大谷焼・瓶 (德利?)	—	8.2	—	— 鉄	ロクロ/ロクロ	暗赤褐2.5YR3/2/ 灰赤褐2.5YR5/2	A・B	表土・ 擾乱	—		
21	大谷焼・瓶 (德利?)	—	(8.0)	—	— 鉄	ロクロ/ロクロ	暗赤褐2.5YR3/2/ 赤10YR5/6	A・B	表土・ 擾乱	—		
22	大谷焼・燈 明具	6.6	—	—	— 鉄	ロクロ/ロクロ	暗赤褐5YR3/2/ 暗赤褐5YR3/2	A・B	表土・ 擾乱	—		
23	大谷焼・燈 明具	—	5.0	—	— 鉄	ロクロ/ロクロ、 糸切り	暗赤褐2.5YR3/3/ 明赤褐2.5YR3/2	A・B	表土・ 擾乱	—		
24	備前焼・燈 明皿	8.8	4.0	1.4	—	回転ナデ/回転 ヘラケズリ	暗赤褐2.5YR5/6/ にぶい赤褐2.5YR4/4	内面に塗土、 スス付着	A・B	表土・ 擾乱	—	
25	硬質陶器・ 碗	—	—	—	緑 透明	—/—		緑色で「口 会」の銘	A・B	表土・ 擾乱	—	

燈明具である。23は「断面三角形の脚部上端に受皿の付くA類」に分類される(日下2000)。燈明具は19世紀前半から20世紀初頭にみられる(日下1998a・2000)。

24は備前焼燈明皿である。器壁は1.5~2.5mmと薄い。内面全体に塗土が施される。外面全体が同心円状回転ヘラケズリ調整により、糸切り離し痕はみられない。胎土は赤または橙色で焼成が甘目である「L類」に分類され、時期は18世紀後半から19世紀初頭に位置づけられる(日下1998b)。口縁部の内外面にスス・コゲの付着が認められる。

25は硬質陶器と考えられる(田尻2013)。器種は碗で、口縁部が内湾して立ち上がる。口縁部外面に緑色の二重圓線(「グリーン2線」)を有し、その下に「口会」と記される。庄・藏本遺跡の立体駐車場新営その他工事に伴う立会調査で形態・文様が類似する美濃窯業株式会社製の硬質陶器が採集された。そこには「厚仁口」「口仁会」と記されており、徳島大学附属病院に関連する厚仁会のものであると考えられた(三阪2015)。よって、本資料も厚仁会と記された美濃窯業株式会社製の硬質陶器と考えられる。

(三阪)

註

- 佐々木由香氏の同定による。
- 煮炊きによるススの付着とは異なり、黒色化の一種と考えられるが、黒色化にしてはやや赤みが強く褐色である。庄・藏本遺跡では弥生前期の甕に散見される。

文献

- 近藤玲（編），2014。南藏本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第84集，徳島県埋蔵文化財センター，徳島。
- 工楽善通，1991。水田の考古学，東京大学出版会，東京。
- 日下正剛，1998a。遺構年代の決定方法：新蔵1丁目遺跡：企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点，総合管理センター（仮称）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第20集，徳島県埋蔵文化財センター，徳島，pp. 190-198。
- 日下正剛，1998b。出土遺物の様相，新蔵1丁目遺跡：企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点，総合管理センター（仮称）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第20集，徳島県埋蔵文化財センター，徳島，pp. 199-221。
- 日下正剛，2000。徳島城下町。江戸遺跡研究会（編），江戸遺跡研究会第13回大会発表要旨：江戸と国元。江戸遺跡研究会，東京，pp. 49-79。
- 日下正剛，2002。土の中の大谷焼：描かれた文字から何がわかるか，徳島市立徳島城博物館歴史講座配布資料，徳島市立徳島城博物館，徳島，pp. 1-11。
- 三坂一徳，2014。土器からみた弥生時代開始過程。古代学協会（編），列島初期稻作の担い手は誰か。すいれん舎，東京，pp. 125-174。
- 三坂一徳，2015。立会調査の概要。国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1，145-154。
- 中村豊，2000a。阿波地域における弥生時代前期の土器編年。田崎博之（編），突帯文と達賀川。土器特寄会論文集刊行会，松山，pp. 471-498。
- 中村豊，2000b。庄・藏本遺跡発掘調査概要：新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査。徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島。
- 中村豊，2002。前期末・中期初頭の諸問題：徳島地域。第16回古代学協会四国支部研究大会事務局（編），第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集：弥生時代前期末・中期初頭の動態。古代学協会四国支部，愛媛，pp. 75-98。
- 佐々木由香，2014。縄文人が利用した球根類。工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館（編），ここまでわかった！縄文人の植物利用。新泉社，東京，pp. 34-37。
- 田尻義了，2013。九州大学出土の硬質陶器について。平成25年度九州史学会考古学部会発表資料集。九州大学考古学研究室，福岡。
- 寺前直人，2010。武器と弥生社会。大阪大学出版会，大阪。
- 梅木謙一，2003。中国・四国地方の土器。武末純一・石川日出志（編），考古資料大観第1巻，弥生・古墳時代土器I。小学館，東京，pp. 169-180。
- 山本悦世（編），2004。津島岡大遺跡14：第15次調査（サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー新設）。岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第19冊。岡山大学埋蔵文化財調査研究センター，岡山。

第6章 第29次調査（学生支援センター改修地点）

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

1959年に建設された学生支援センター（旧藏本会館）の改修工事に伴い、建物の西側と南側にて発掘調査を行う必要性が生じた。

本調査地点周辺では、1983年に実施した第2次調査（体育館新営地点）において、古代の東西大溝、水路、掘立柱建物、庄内式期から布留式期の竪穴住居、弥生時代中期後葉の方形周溝墓が検出されている。また、1995年に実施した第14次調査（医薬資源教育研究センター新営地点）では近世の農耕関連遺構のほか、古墳時代の溝や土師器、弥生時代と考えられる柱穴や鉄器などが検出された。

本調査地点においても弥生時代から古代の遺構が検出される可能性が高いと考えられたため、発掘調査を実施した。調査面積は555m²である。

2. 調査体制と期間

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

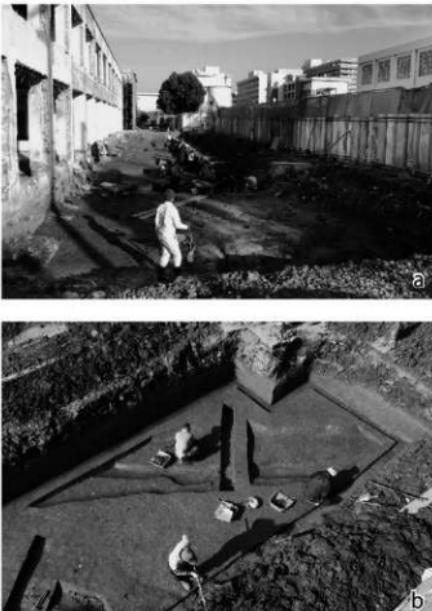
調査担当 中村 豊

　　遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

　　山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 板東美幸、古川裕美、前田千夏（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

調査期間 2012年10月31日～2013年2月5日



第74図 調査風景

a 南区（西から） b 溝32掘り下げ（東から）

3. 調査地点の位置と区割り

(1) 調査地点の位置

遺跡の所在地は、徳島市庄町1丁目78番地の1である。本学蔵本キャンパスの西側中央付近にあたり、第2次調査地点(体育馆新営地点)の約50m北、第14次調査地点(医薬資源教育研究センター新営地点)の約25m南に位置する。

(2) 調査地点の区割り

本調査地点は学生支援センター(旧蔵本会館)の増築部分に相当する。南東区、南区、西区の3つの調査区を設定した(第75図)。南東区は南北約7m・東西約29m、南区は南北約7m・東西約40m、西区は南北約15m・東西約5.5mである。

4. 調査の概要

本調査地点では、3つの遺構面を設定し、弥生時代I~2様式から近世にわたる遺構を確認した。出土遺物は少なく、コンテナで土器3箱、石器1箱、合計4箱である。以下、遺構面ごとにその概要を述べる。

(1) 第3遺構面

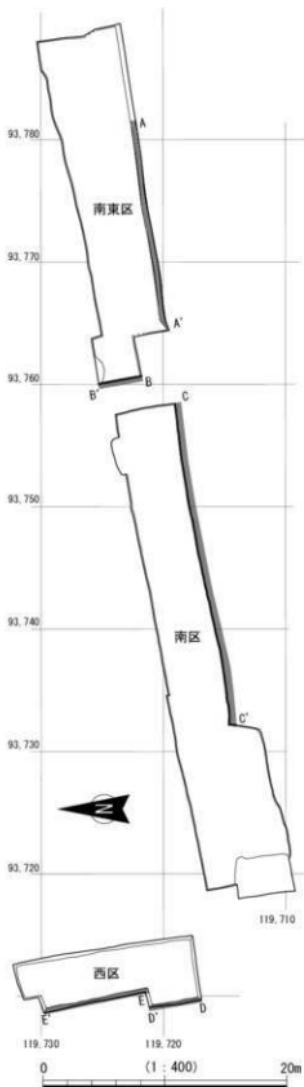
弥生時代I~2~3~4様式の用水路と考えられる溝を確認した。

(2) 第2遺構面

古代の掘立柱建物を検出した。ほかに、弥生時代I~3~4様式~近世の一時期と考えられる溝、土坑などを検出した。

(3) 第1遺構面

近世の溝1条が検出された。



第75図 調査区の区割りと土層断面の位置

第2節 調査成果

1. 基本層序

本調査地点では、南東区南壁・西壁、南区南壁、西区西壁の土層断面を実測し、これを第76～78図に示している。基本層序は1～8層であり、南区南壁土層断面(第77図)をもとに説明を行う。なお、現地表面は標高3.7mであり、そこから標高2.7～2.9mまでは近代以降の造成土である。

1層 灰オリーブ色5Y5/2の粘土で鉄分を含む。上面の標高は2.9m、厚さ10～15cmである。近代の水田層と考えられる。

2層 オリーブ色5Y5/4の粘土で鉄分を含む。上面の標高は2.8m、厚さ10cmである。近世の水田層と考えられる。

3層 灰オリーブ色5Y5/3の粘土で鉄分を含む。上面の標高は2.7m、厚さ20cmである。近世の水田層と考えられる。

4層 黒褐色10YR3/2の粘質シルトで鉄分・マンガンを含む。土壤化する。南区の東側から南東区にかけて堆積している。上面の標高は2.6m、厚さ5～20cmである。

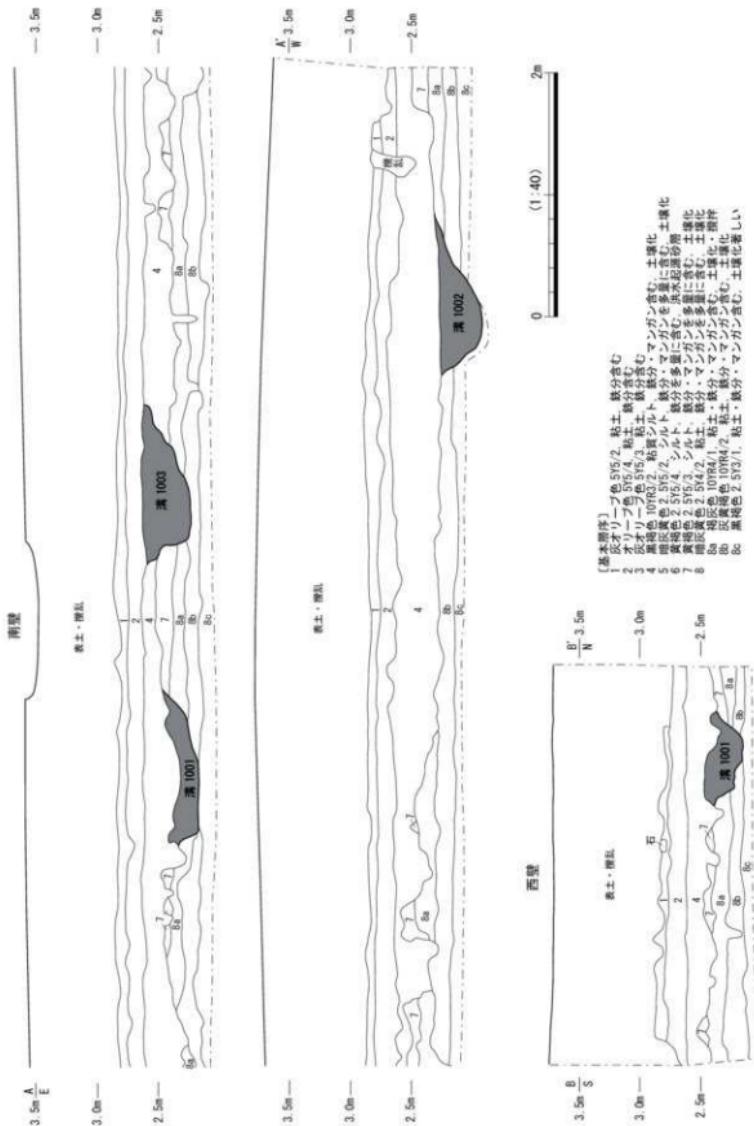
5層 暗灰黄色2.5Y5/2のシルトで鉄分・マンガンを多量に含む。土壤化する。上面の標高は2.6m、厚さ10～20cmである。調査地点全体の西半、つまり南区の西側(第77図)から西区(第78図)にかけて確認される。弥生時代I-3・4様式～中世の層と考えられる。

6層 基本的に7層と同層であり、南区西半(第77図)では2層に分層できたため、上層を6層とした。黄褐色2.5Y5/4のシルトで鉄分を多量に含む。上面の標高は2.5m、厚さ10cmである。洪水起源砂層で一部に土壤化した部分がみられる。既往の調査成果から、弥生時代I-2～3・4様式に形成されたと考えられる。

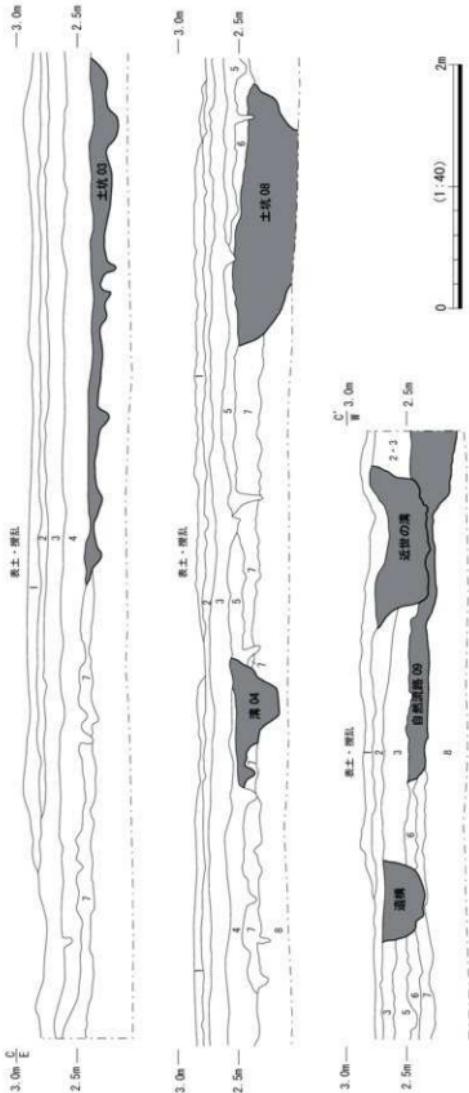
7層 黄褐色2.5Y5/3のシルトで鉄分・マンガンを多量に含む。上面の標高は2.4～2.6m、厚さ10～20cmである。洪水起源砂層である。本調査地点のほぼ全域で確認され、弥生時代I-3・4様式の土器が出土している(第107図)。既往の調査成果から、弥生時代I-2～3・4様式に形成されたと考えられる。

8層 暗灰黄色2.5Y4/2の粘土で鉄分・マンガンを多量に含む。上面の標高は2.3～2.5m、厚さ30cm以上である。南東区(第76図)では色調と土壤化程度から、a～c層に細分している。既往の調査では、本層上面から弥生時代I-1・2様式の遺構が検出されている。

基本的には、1層上面を第1遺構面、6・7層上面を第2遺構面、8層上面を第3遺構面と設定し、調査を行った。ただし、土層の堆積状況が地区によって異なるため、実際の検出面については遺構ごとに詳述した。



第16図 南東区南壁A-A'・西壁B-B' 土壌断面



[基本断面]
南区南壁 A-A'・西壁 B-B' 土壌断面（第76図）同じ

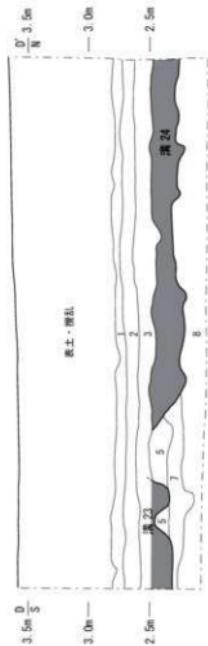


南壁断面 C-C' (北から)

第77図 南区南壁 C-C' 土壌断面



西里土層断面 D-D' (東から)



西里土層断面 E-E' (東から)

〔基本圖版〕
南東区断面 A-A'・西里 B-B' 土層断面(第76図)に同じ

2. 第3遺構面の遺構と遺物

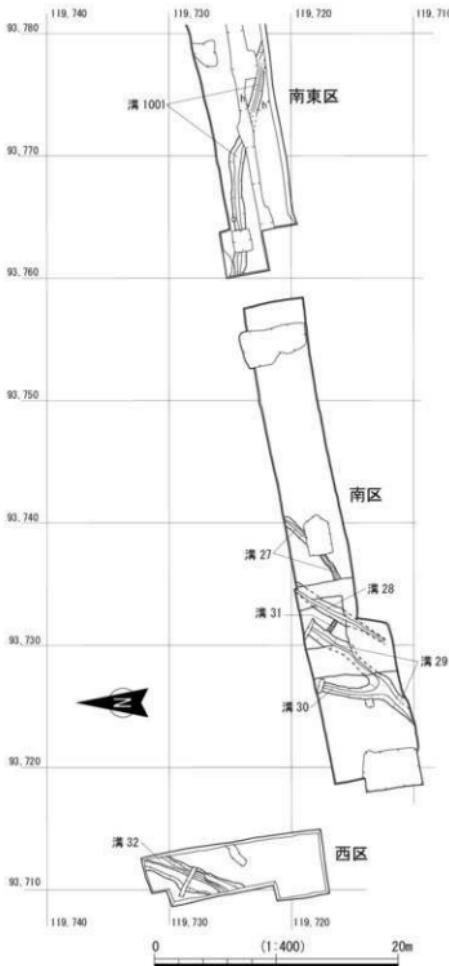
(1) 溝

溝27（第79・80図） 南区の中央付近に位置し、南西—北東方向にのびる。8層上面にて検出され、検出面の標高は2.35mである。規模は残存長6.5m、幅0.4～0.65m、底面の標高2.15mで、検出面からの深さ20cmである。埋土は2層からなり、上層は黄褐色2.5Y5/4のシルト質極細砂、下層は暗灰黄色2.5Y5/2のシルトが堆積する。遺物は出土していない。

溝31（第79・80図） 南区の中央付近に位置し、東西方向にのびる。8層上面にて検出され、検出面の標高は2.25mである。残存長1.1m、最大幅0.3m、底面の標高2.1mで、検出面からの深さ15cmである。埋土は黄褐色2.5Y5/3のシルト質極細砂である。遺物は出土していない。

溝27と溝31は、擾乱や溝28によって切られ連結していないが、両者の位置関係や検出面の標高・幅・底面の標高・埋土の類似性からみて、一連のものであった可能性が高い。

溝28（第79・81図） 南区の西側に位置し、南西—北東方向にのびる。8層上面にて検出され、検出面の標高は2.3mである。幅1.0m、底面の標高は北東端1.7m、南西端1.75mで、検出面からの深さは55～60cmである。底面の標高は、南西から北東に向かってわずかに低くなる。埋土は3層確認され、最上層には黄褐色2.5Y5/3



第79図 第3遺構面全体図

のシルト質極細砂が堆積する。

遺物は弥生土器片が少量出土しており、弥生時代I様式と判断できる破片が含まれている。

溝29（第79・81・82図、図版7） 南区の西側に位置し、南西—北東方向にのびる。8層上面で検出され、検出面の標高は北東端で2.35m、南西端で2.3mである。残存長11m、南西端で最大幅1.2m、底面の標高は北東端1.8m、南西端1.9mで、検出面からの深さ40～45cmである。底面の標高は、南西から北東に向かって低くなる。溝29は北東方向（溝29）と北方向（溝30）に分岐する。埋土は3層確認され、最上層には黄褐色2.5Y5/3のシルト質極細砂が堆積する。

出土遺物は弥生土器片がみられる。1は壺である。頸部に2条、胴部に4条の箋描沈線文が確認され、弥生時代I-3・4様式に位置づけられる。

溝30（第79・81・83図、図版7） 南区の東側において溝29から分岐し、南北方向にのびる。8層上面で検出され、検出面の標高は南・北端ともに2.3mである。残存長4.5m、最大幅1.2m、底面の標高は南・北端ともに1.9mで、検出面からの深さ35cmである。埋土は2層確認され、上層には黄褐色2.5Y5/3のシルト質極細砂が堆積する。

出土遺物は弥生土器片が認められる。2は壺胴部で、2条の箋描沈線文が残る。時期は弥生時代I-2～3・4様式である。

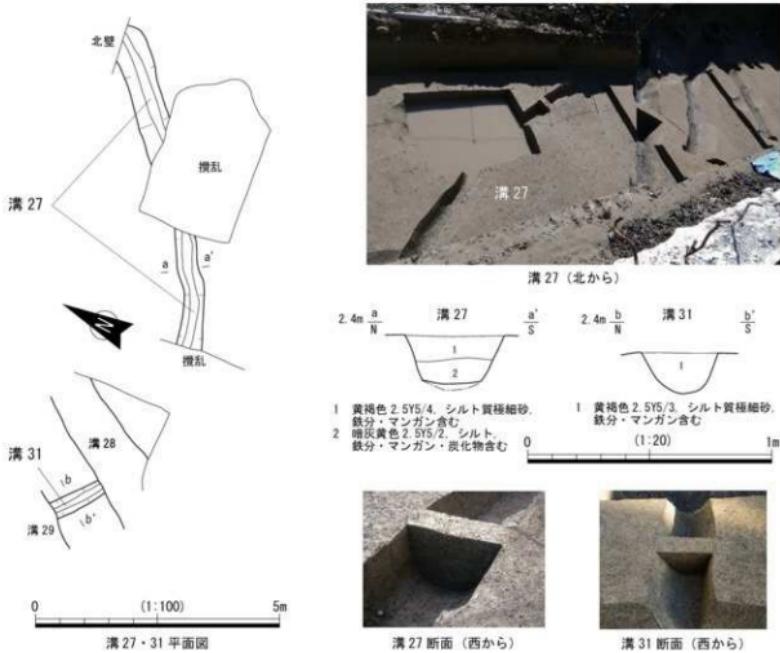
溝32（第78・79・84図） 西区の北部に位置し、南西—北東方向にのびる。8層上面で検出され、検出面の標高は北端で2.2m、南端で2.15mである。残存長8.0m、最大幅2.1m、底面の標高は北端・南端とも2.0mで、検出面からの深さ20cmである。埋土は単層で、鉄分・マンガンを含む暗灰黄色2.5Y5/2の極細砂が堆積する。西区西壁断面（第78図）をみると、南側で溝24、北側では溝25に切られている。弥生土器と考えられる細片が少量出土している。

溝27～32の時期について以下に検討する。これらは8層上面で検出されており、既往の調査成果からみた場合、同層上面に形成された遺構は、弥生時代I-1・2様式に位置づけられる。また、溝29埋土からはI-3・4様式の土器、溝30埋土からはI-2～3・4様式の土器が出土している。いずれも小片であり、遺物の出土層位は記録しえなかつたが、少なくとも溝の機能時はI-3・4様式以前といえる。さらに、溝27～31の切り合い関係をみると（図80・81）、右上のような新旧関係が復元される。溝31（・溝27）は溝28・29・30よりも古く、I-3・4様式以前といえる。



また、他地点からは弥生時代I-2様式の水田が検出されており、溝28～30・32はおおよそ並行にのびることから、水田の用水路としての機能が想定される。この点や上述の層位学的所見を勘案すると、溝27～32の時期は弥生時代I-2様式の可能性が高いといえる。

溝1001（第76・79・85図、図版7） 南東区の中央付近に位置し、東西方向にのびる。平面的には8層上面で検出されたが、南東区南壁・西壁土層断面では、7層上面から掘り込まれ、4層に覆われていることが確認された（第76図）。検出面の標高は東端2.35m、西端2.3mである。残存長18.5m、最大幅1.2m、底面の標高2.15～2.2mで、検出面からの深さ20cmである。断面は皿状を呈し、

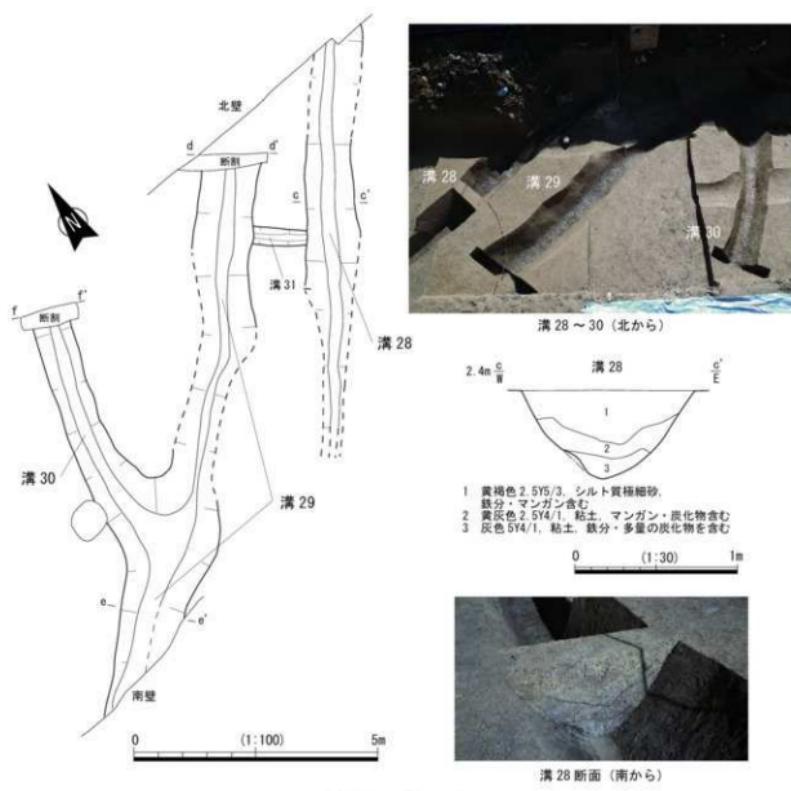


第80図 溝27・31

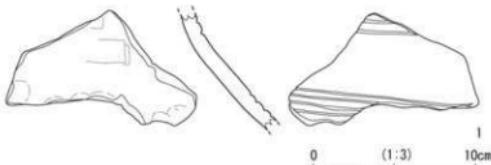
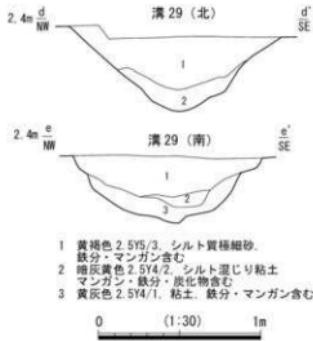
埋土はにぶい黄褐色 2.5Y6/4 のシルト質極細砂に暗灰黄色 2.5Y4/2 のシルトが混入した層が確認される。また、溝1001は、溝1002・1003に切られている（第79・86図）。

出土遺物は弥生土器片が少量出土しており、このうち3点を図化している。3は壺の口縁部で、復元口径 19.4 cm である。4は壺の胴部で、胴部最大径より上に範描沈線文が6条残る。弥生時代 I - 3・4 様式に位置づけられる。5は溝の底面から 20cm 程度浮いた埋土 1 層中から出土している（第85図）。平底で底部径は 15.8 cm である。外面は刷毛目、内面はナデ・ユビオサエがみられる。外傾接合であることから、弥生時代 I 様式の可能性が高い。

本溝は、7層上面から検出されているため、弥生時代 I - 3・4 様式～中世の一時期と考えられる。さらに、出土遺物が弥生時代 I - 3・4 様式を中心とする時期に限られるため、当該期に機能していた可能性が高いといえる。



第81図 溝 28 ~ 30



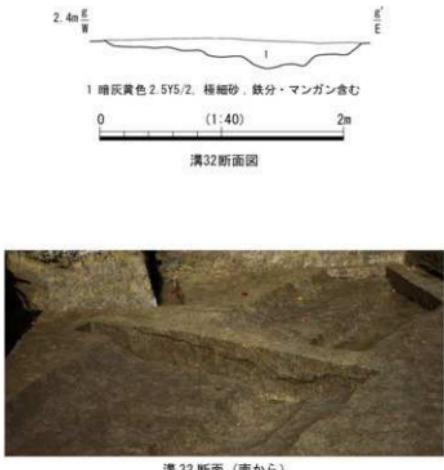
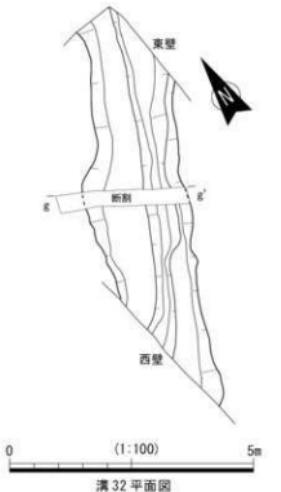
番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	地土	調査区
			口径	底部	器高				
1	溝29	弥生土器・頭部一帯	-	-	-	2条4条連續沈線文、ナデ/ナデ、ユビオサエ	にぶい黄褐10YR6/4/ にぶい黄褐10YR6/4	細、長石	南区

第82図 溝29

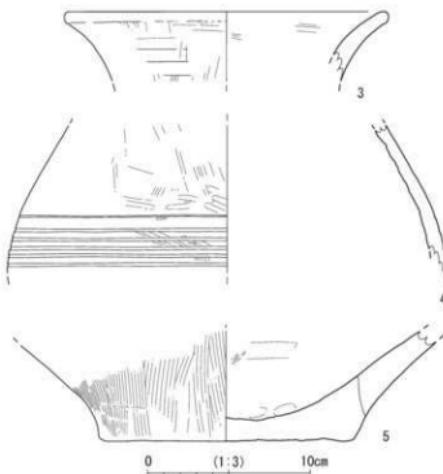


番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	地土	調査区
			口径	底部	器高				
2	溝30	弥生土器・頭部一帯	-	-	-	2条連續沈線文、刷毛目、ナデ/ナデ	にぶい褐7.5YR5/4/ にぶい褐5YR5/4	細、長石	南区

第83図 溝30



第84図 溝32



第85図 溝1001

番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	厚さ				
3	溝1001	弥生土器・口縁部一巻	19.4	—	—	刷毛目、ナデ/ナデ、刷毛目	にぶい黄7.5Y6/4/ 7.5Y6/6	細、長石、角閃石	南東区
4	溝1001	弥生土器・胴部一巻	—	—	—	6条進描沈線文、刷毛目、ミガ ナデ/ナデ、ユビオサエ	にぶい黄7.5Y6/4/ にぶい橙7.5Y8/3	細、石英、長石	南東区
5	溝1001	弥生土器・底部	—	15.8	—	刷毛目/ナデ、ユビオサエ	にぶい黄褐10YR5/3/ 7.5Y6/6	小、長石、角閃石	南東区

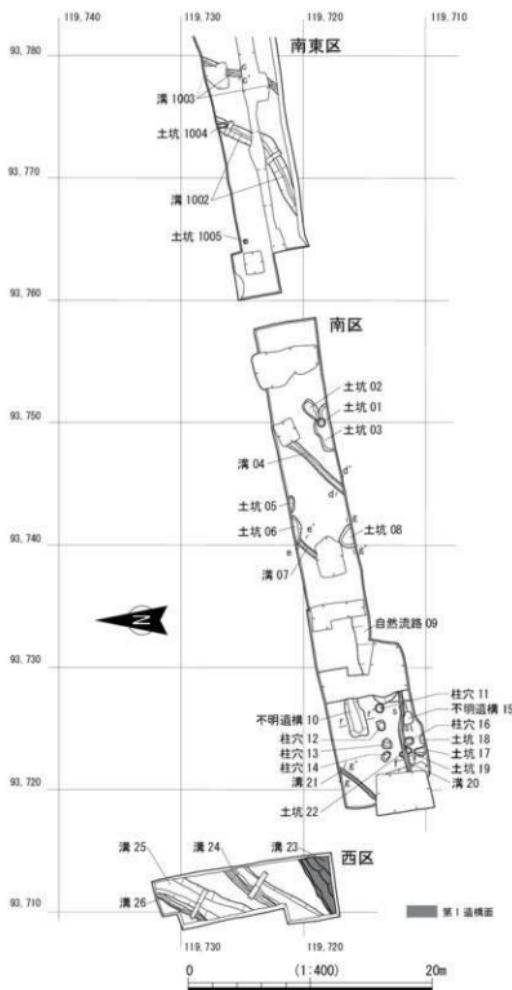
3. 第2遺構面の遺構と遺物

(1) 溝・自然流路

溝1002（第76・86・87図） 南東区の西部に位置している。8層上面で検出され、4層に覆われている。検出面の標高は2.35～2.40mである。7・8層の一部は、4層によって削平を受けしており、本来の掘り込み面は8層以上であったと考えられる（第76図）。さらに、7層上面で検出された溝1001を切っているため（第79・86図）、本来の掘り込み面は7層以上であったことがわかる。

残存長9m前後、幅1.0～1.2m、底面の標高は中央付近1.85m、南端1.9mで、検出面からの深さ50cmである。南側断面b-b'（第87図）では、埋土は4層確認され、3層は暗オリーブ褐色2.5Y3/3の粘土、4層は黒褐色2.5Y3/2の粘土である。埋土は洪水起源砂層とは異なる土質である。弥生土器あるいは土師器の細片が少量出土しているが、図化できるものはない。

所属時期は掘り込み面が7層以上である点から、その上限は弥生時代I-3・4様式といえる。さらに、次頁右上のような遺構の切り合い関係がみられる。本溝は布留2式期前後の土器片が出土した土坑1004に切



第86図 第1・2遺構面全体図

られている（第87図）。土坑1004の形成時期をこの時期とするならば、本溝の下限は布留2式期となる。

溝1003（第76・86・88図、図版7） 南東区の東部に位置

しており、南北方向にのびる。4層上面にて検出され、

2層に覆われ（第76図）。検出面は標高2.4～2.6mである。残存長6.5m、幅0.5m、底面の標高2.25～2.35mで、検出面からの深さ20～40cmである。埋土は2層認められ、1層は黄灰色2.5Y5/1の粗砂に同色シルトが混入している。2層は黄灰色2.5Y4/1の粘土である。また、溝1003は溝1001を切っている（第79・86図）。

出土遺物には弥生土器あるいは土師器片が認められるが、図化できるものはない。そのほかに、鉄鏃1点がみられる。長さ4.8cm、幅1.7cm、厚さ3.6mm、重量5.0gである。柳葉形鐵群I（杉山1988）に相当し、弥生時代後期～古墳時代前期にみられる形態である。中央部付近で折れ曲がっている。

本溝の所属時期は検出層位から、中世～近世の一時期と考えられる。

溝04（第77・86・89図） 南区の東部に位置し、南西～北東方向にのびる。5層上面で検出され、3・4層に覆われている（第77図）。検出面の標高は2.4～2.45mである。残存長5.5m、幅0.5～0.6m、底面の標高は2.35mで、検出面からの深さ10～40cmである。埋土は単層で褐灰色10YR4/1のシルトが堆積する。

弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、図化できるものはない。本溝は検出層位から、弥生時代I～III・IV様式～近世の一時期といえる。

溝07（第86・89図） 南区の中央部に位置する。検出面の標高は2.4mで、4～7層に相当する。残存長1.8m、幅0.4m、底面の標高2.3mで、検出面からの深さ10cmである。埋土は単層で、暗灰黄色5Y5/2のシルトが堆積する。溝04と類似する埋土である。弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

本溝は土坑06によって切られる（第86図）。

溝20（第86・90図、図版7） 南区の西部に位置し、東西方向にのびる。検出面は標高2.45mで、4～7層に相当する。残存長6.6m、幅0.4～0.5m、底面の標高2.3mで、検出面からの深さ15cmである。埋土は3層確認され、最下層の3層に土器片が含まれている。

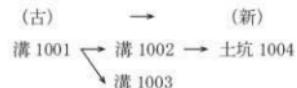
出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器片が出土している。須恵器（7）を図化しているが、時期は不明である。

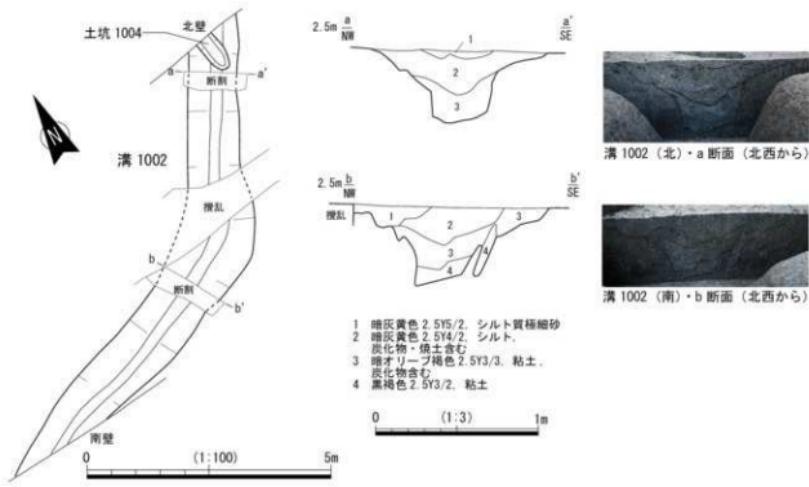
本溝は、不明遣構15、柱穴16、土坑19・22を切っており（第86図）、後述するように土坑19、柱穴16は古代に位置づけられることから、所属時期は古代～近世といえる。

溝21（第86・91図） 南区の西部に位置し、南西～北東方向にのびる。検出面の標高は2.4mで、4～7層に相当する。残存長3.8m、幅0.4m、底面の標高2.3mで、検出面からの深さ10cmである。

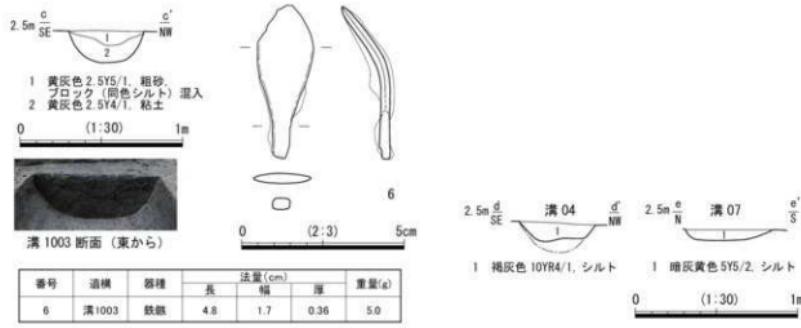
埋土は単層で、暗灰黄色2.5Y4/2粘土である。本溝の埋土は溝04・07と類似する。遺物は出土していない。

溝24（第78・86・92図） 西区の中央部に位置し、南西～北東方向にのびる。5層上面で検出され、3層に覆われている（第78図）。検出面の標高は2.4～2.5mである。残存長7.5m、幅1.6m、底





第87図 溝1002



第88図 溝1003

第89図 溝04・07



第90図 溝20

面の標高 2.15 ~ 2.25m、検出面からの深さ 20 ~ 25cm である。埋土は暗灰黄色 2.5Y5/2 のシルトである。遺物は認められない。

本溝の所属時期は、検出層位から弥生時代 I - 3・4 様式～近世の一時期といえる。

溝 25 (第 78・86・93 図、図版 7) 西区に位置し、

南西～北東方向にのびる。5 層上面で検出され、3 層に覆われている (第 78 図)。検出面の標高は 2.4 ~ 2.5m である。残存長 7.0m、幅 2.2m、底面の標高 2.1 ~ 2.2m、検出面からの深さ 20 ~ 45cm である。埋土は暗灰黄色 2.5Y4/2 のシルトである。溝 25 は溝 26 を切っている (第 78・93 図)。

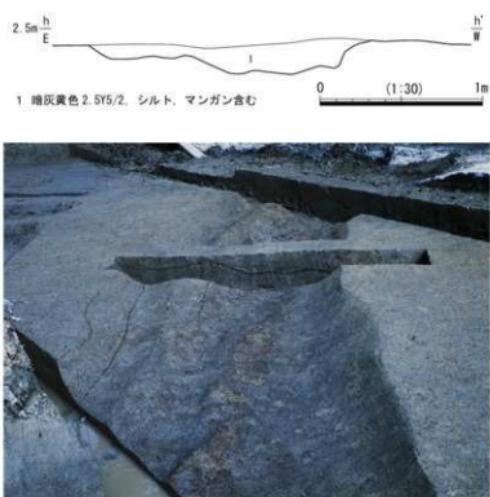
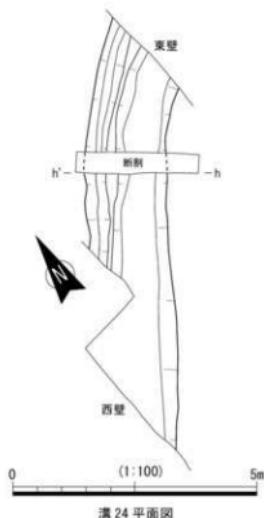
出土遺物は弥生土器片が認められ、そのうちの 5 点を実測している。8 は甕の口縁部である。口唇部下端に刻目、口縁部直下に篦描沈線文が 1 条残る。9 ~ 11 は壺胴部と考えられる。9 は篦描沈線文 3 条、10 は無刻目の貼付突帯文、11 は刻目を有する貼付突帯文が施される。12 は底部である。8 ~ 11 は弥生時代 I - 3・4 様式を中心とする時期と考えられる。

本溝の所属時期は、検出層位から弥生時代 I - 3・4 様式～近世の一時期といえる。また、出土遺物が小片であるため判断は難しいが、弥生時代 I - 3・4 様式に絞り込める可能性もある。

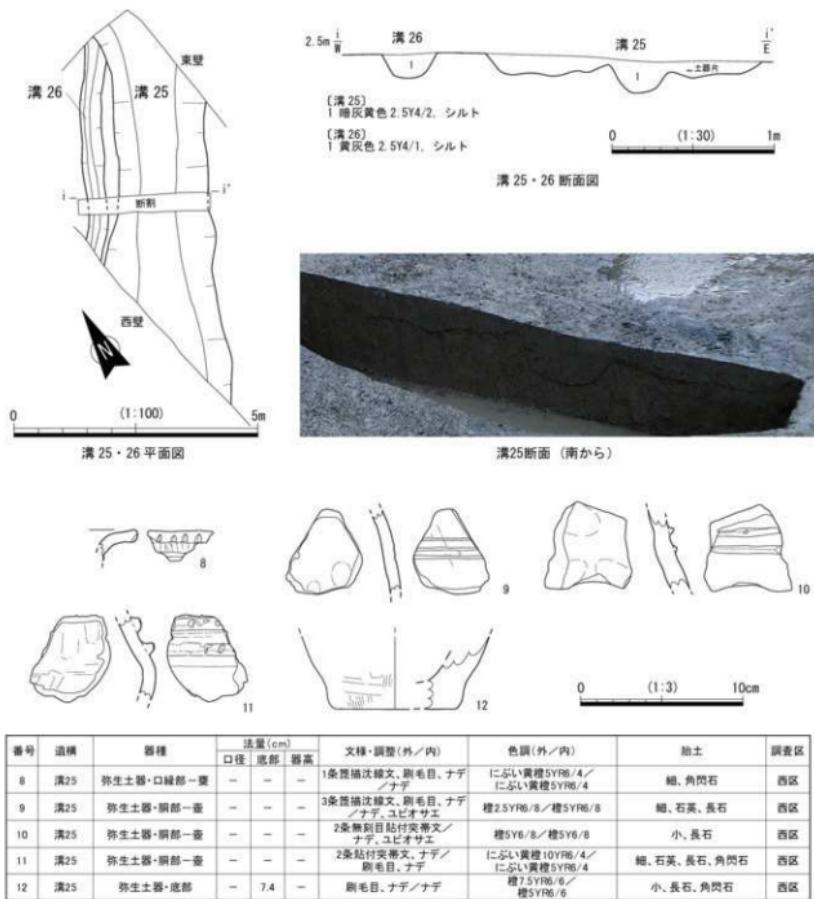
溝 26 (第 78・86・93 図) 西区に位置し、南西～北東方向にのびる。5 層上面で検出され、3 層に覆われている。検出面の標高は 2.4 ~ 2.55m、長さ 4.5m、幅 0.5m、底面の標高 2.25 ~ 2.35m、検



第 91 図 溝 21



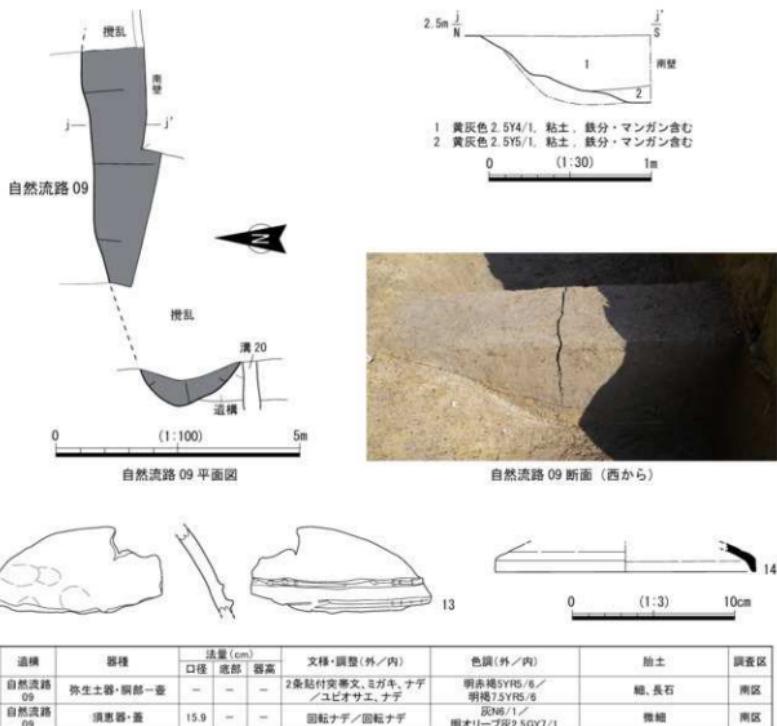
第 92 図 溝 24



第93図 溝25・26

出面からの深さ 15 ~ 25 cm である。埋土は黄灰色 2.5Y4/1 のシルトである。遺物は出土していない。溝 25 に切られている（第78・93図）。

本溝の所属時期は、検出層位から弥生時代 I - 3・4 様式～近世といえる。仮に、溝 25 の時期が弥生時代 I - 3・4 様式であれば、本溝も同時期の可能性がある。



第94図 自然流路 09

自然流路 09（第77・86・94図、図版7） 南区の中央部に位置する。流路西端を検出しており、東西方向にのびる。6層上面で検出され、3層に覆われている（第77図）。検出面の標高は2.4～2.45mである。残存長7.3m、底面の標高2.0～2.1mで、検出面からの深さ40cmである。埋土は2層確認され、ともに黄灰色2.5Y4/1・2.5Y5/1の粘土である。

出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器片がみられる。13は弥生土器の壺胴部である。刻目をもつ貼付突帯文が2条確認できる。弥生時代I-3・4様式である。14は須恵器の杯蓋であり、8世紀代に相当する。

本自然流路の所属時期は検出層位と出土遺物から弥生時代I-3・4様式～近世の一時期といえる。

（2）土坑・不明遺構

土坑1004（第86・95図、図版7） 南東区に位置する。全体は未検出であり、さらに北にのびるため、溝の可能性もある。検出面の標高は2.35mで、4～7層に相当する。残存長0.8m、幅0.4m、底面の標高は2.25mで、検出面からの深さ10cmである。断面はU字形を呈し、埋土は単層で黄灰色2.5Y4/1の粘土である。溝1002を切っている（第86図）。

出土遺物は、小型丸底壺の破片で、布留2式期前後である。

本土坑の所属時期は、検出層位からみると弥生時代I～3・4様式～近世の一時期といえる。さらに、埋土から布留2式期前後に位置づけられる土器片が出土しており、これが土坑の時期を示す可能性もある。

土坑01（第86・96・97図、図版7） 南区の東部に位置する。検出面の標高は2.45mで、4～7層に相当する。直径0.7mの円形である。底面の標高2.35mで、検出面からの深さ10cmである。埋土は褐灰色10YR4/1のシルトである。

出土遺物は、土器1点が認められた。16は杯部から脚部片で、高杯もしくは器台と考えられる。非常に薄い作りであり、最も薄い杯底部では2mm程度である。精製の胎土が用いられている。脚部に透し孔が1か所確認できる。時期は弥生時代VI様式～布留1式期であろうか。

本土坑の所属時期は、検出層位からみると弥生時代I～3・4様式～近世の一時期といえる。出土土器は破片ではあるものの、これが土坑の時期を示すとすれば、弥生時代VI様式～布留1式期に位置づけられる。

土坑02（第86・97図） 南区の東部に位置する。検出面は標高2.4mで、4～7層に相当する。長軸2.0m、短軸1.0m、底面の標高2.3mで、検出面からの深さ10cmである。埋土は灰黄褐色10YR4/2のシルトが堆積する。出土遺物はみられない。

土坑03（第77・86・97図） 南区の東部に位置する。検出面の標高は2.4～2.45mである。第77図をみると、本土坑は7層上層で検出され4層で覆われる。ただし、5～7層が4層によって削平されている可能性があるため、本来の掘り込み面は5～7層とみられる。長軸3.8m、短軸1.2m、底面の標高2.25～2.35mで、深さ5～15cmである。埋土は暗灰褐色2.5Y4/2のシルトが堆積する。出土遺物はみられない。

土坑01～03の所属時期について以下に検討する。いずれも検出層位からみると弥生時代I～3・4様式～近世の一時期と考えられる。遺構の切り合い関係をみると古い順位に、土坑03→土坑02→土坑01となる（第97図）。上記のように、土坑01の時期が弥生時代VI様式～布留1式期であれば、土坑02・03の時期は、弥生時代I～3・4様式～布留1式期の一時期といえる。

土坑05（第86・98図） 南区の中央部に位置する。検出面は標高2.4mで、4～7層に相当する。長軸1.4m、短軸0.4m、底面の標高2.3mで、検出面からの深さ10cmである。埋土には褐灰色10YR4/1のシルトが堆積する。土坑01～03の埋土と類似する。土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはない。



土坑 1004 断面（南から）

番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外／内)	色調(外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
15	土坑1004	土師器・口縁部一鋼部	-	-	-	ナデ／ナデ、ユビオサエ	橙7.5YR6/6、 にぶい黄褐10YR6/4	微細、長石	南東区

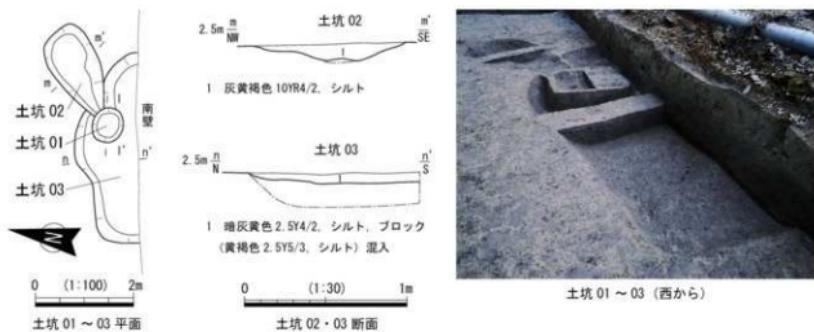
第95図 土坑 1004



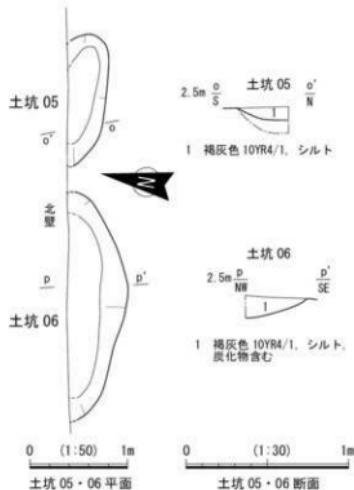
土坑 01 断面（北から）

番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外／内)	色調(外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
16	土坑01	弥生土器・土師器 ・高杯/蓋台	-	-	-	ハケヌ、ナデ／ナデ	にぶい橙7.5YR7/4、 橙5YR8/6	微細	南区

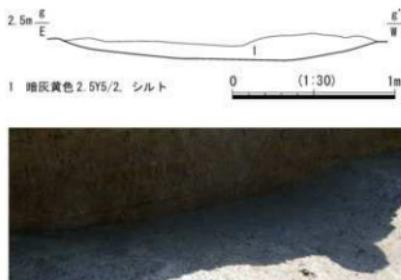
第96図 土坑 01



第97図 土坑 02・03

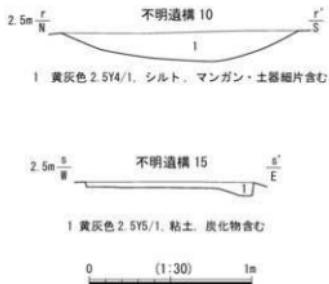


第98図 土坑 05・06

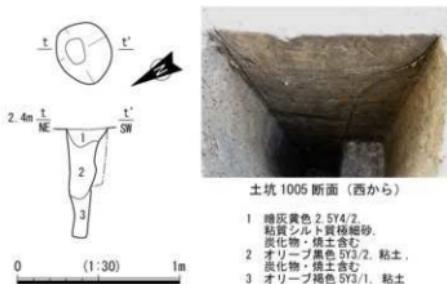


土坑 08 断面（北から）

第99図 土坑 08



第100図 不明遺構 10・15



第101図 土坑 1005

土坑 06(第86・98図) 南区の中央部に位置する。検出面は標高 2.35 ~ 2.4m で、4 ~ 7 層に相当する。長軸 2.3m、短軸 0.6m、底面からの標高 2.25m で、検出面からの深さ 10 ~ 15 cm である。埋土は褐灰色 10YR4/1 のシルトである。土坑 01 ~ 03 の埋土と類似する。弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

土坑 08（第 77・86・99 図） 南区の中央部に位置する。7 層上面で検出され、5・6 層に覆われている（第 77 図）。検出面の標高 2.4～2.55m である。長軸 1.9m、短軸 1.1m、底面の標高 2.05～2.1m で、検出面からの深さ 50 cm 以上である。埋土は暗灰黄色 2.5Y5/2 のシルトである。弥生土器あるいは土師器・須恵器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

本土坑の所属時期は、検出層位から弥生時代 I～3・4 様式～中世の一時期と判断される。

不明遺構 10（第 86・100 図） 南区の西部に位置する。検出面の標高は 2.45m で、4～7 層に相当する。長軸 3.1m、短軸 1.5m、底面の標高 2.25m で、検出面からの深さ 20 cm である。埋土は黄灰色 2.5Y5/1 のシルトが堆積する。弥生土器あるいは土師器片が出土しているが、図化できるものはない。

不明遺構 15（第 86・100 図） 南区の西部に位置する。検出面の標高は 2.4m で、4～7 層に相当する。長軸 1.1m、短軸 0.8m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 10 cm である。埋土は黄灰色 2.5Y5/1 の粘土である。溝 20 に切られている。弥生土器あるいは土師器片が出土しているが、図化できるものはない。

土坑 1005（第 86・101 図） 南東区の西部に位置する。検出面の標高は 2.35m で、4～7 層に相当する。平面形は円形を呈しており、直径 0.3m である。底面の標高 1.7m で、深さ 65 cm である。断面は先細りの長方形形状を呈する。埋土は 3 層に分かれ、杭痕の可能性が考えられる。弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、時期は特定できない。

（3）掘立柱建物

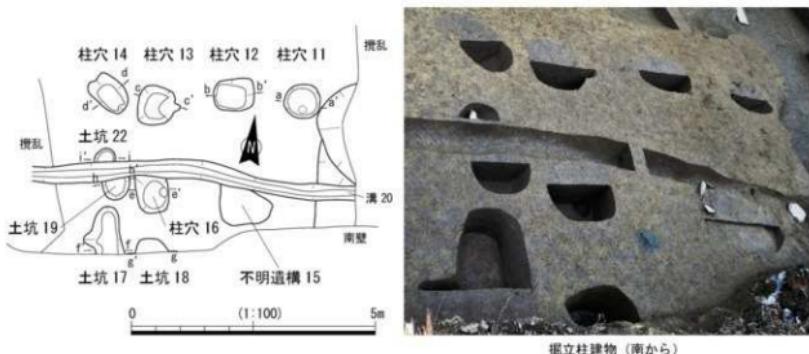
南区の西部にて、等間隔に配された柱穴 11～14・16 を検出した。これらは掘立柱建物の可能性がある。あわせて、これと関連する可能性がある土坑 17～19・22 についても説明する。すべて検出面は標高 2.4m 前後であり、4～7 層に相当する。

柱穴 11（第 86・102 図） 柱穴群のなかで最も東に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.1m で、検出面からの深さは 35 cm である。掘方は直径 0.7m の円形で、直径 10 cm の柱痕を確認できる。埋土は 3 層あり、いずれも粘土層である。1 層は暗灰黄色 2.5Y4/2、2 層は黄灰色 2.5Y4/1 である。古代の土師器・須恵器の細片が出土しているが、詳細な時期を特定できるものはない。

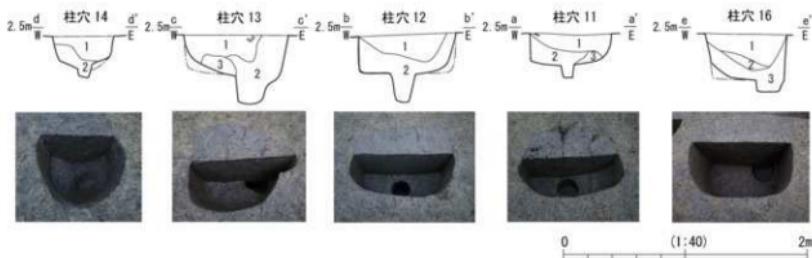
柱穴 12（第 86・102 図） 柱穴 11 の西側に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 1.9m で、検出面からの深さは 55 cm である。掘方は長軸 0.8m、短軸 0.65m で、直径 20 cm の柱痕を確認できる。埋土は 2 層確認でき、上層は黄灰色 2.5Y4/1 の粘土、下層は褐灰色 10YR4/1 の粘土である。土師器・須恵器の細片が出土している。

柱穴 13（第 86・102 図、図版 8） 柱穴 12 の西側に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 1.9m で、検出面からの深さ 55 cm である。掘方は長軸 0.9m、短軸 0.8m で、直径 20 cm の柱痕を確認できる。埋土は 3 層確認でき、いずれも黄灰色 2.5Y4/1・2.5Y5/1 の粘土である。

出土遺物は土師器の細片と須恵器である。17・18 は須恵器の杯蓋である。17 は全体の約 3 分の 1 が残存しており、柱穴 13 と土坑 19 から出土した破片が接合した。天井は比較的高く、つまりの中央は盛り上がる。口縁端部は屈曲し下方にのびる。平城宮 II～III（西 1986）に相当する（早瀬 1999）。類例は庄遺跡・加茂名中学校地点で検出された掘建柱建物 SB02 の柱穴 SP06 と土壙 SK05 の



掘立柱建物（南から）



〔柱穴 11〕
1 暗灰黄色 2.5Y4/2, 黏土, 燃土, 炭化物含む
2 黄灰色 2.5Y4/1, 黏土
3 2層にブロック（黄褐色 2.5Y5/3, シルト）混入

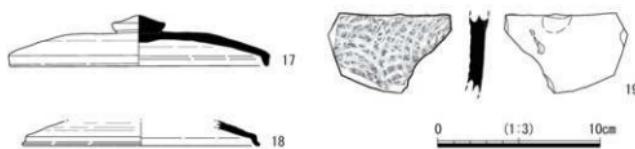
〔柱穴 13〕
1 黄褐色 2.5Y4/1, 黏土, マンガン・炭化物含む
2 1層にブロック（シルト）混入
3 黄灰色 2.5Y5/1, 黏土, 鉄分・マンガン含む

〔柱穴 16〕
1 暗灰黄色 2.5Y4/2, 黏土, 炭化物含む
2 1層にブロック（黄褐色 2.5Y5/3, シルト）混入
3 黄灰色 2.5Y4/1, 黏土

〔柱穴 12〕
1 黄褐色 2.5Y4/1, 黏土, マンガン・炭化物含む
2 暗灰色 10YR4/1, 黏土, マンガン含む

〔柱穴 14〕
1 黄褐色 2.5Y4/1, 黏土, 炭化物含む
2 1層にブロック（暗灰色 10YR4/1, 黏土）混入

〔柱穴 17〕
1 黄褐色 2.5Y4/1, 黏土, 燃土, 炭化物含む
2 1層にブロック（黄褐色 10YR4/1, 黏土）混入



番号	遺構	器種	法量(cm)		文様・調整(外/内)	色調(外/内)	粘土	調査区	
			口径	底部					
17	柱穴13+土坑19	須恵器・杯蓋	15.9	—	3.1	回転ナデ/回転ナデ	灰白N7/1/灰白N7/1	微細	南区
18	柱穴13	須恵器・杯蓋	14.5	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白2.5Y7.1/灰白2.5Y7/1	微細	南区
19	柱穴13	須恵器・瓶部一隻？	—	—	—	タキ、自然輪・当て真底	灰オリーブ5YR5/2/灰白N8-0	微細	南区

第102図 柱穴 11～14・16（掘立柱建物）

出土須恵器があげられる（勝浦 1996）。18 の杯蓋の口縁端部は屈曲し、わずかに外方に開く。平城宮IVに位置づけられる。類例は庄遺跡・加茂名中学校地点掘立柱建物SB01 の柱穴 SP05 出土須恵器をあげることができる（勝浦 1996）。19 は須恵器甕の胴部であろうか。

柱穴 13 の所属時期は、埋土から平城宮II～IVの須恵器が出土する点から、8世紀代とみられる。

柱穴 14（第 86・102 図） 検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.1m で、検出面からの深さ 35 cm である。掘方は長軸 0.8m、短軸 0.55m で、直径 10 cm の柱痕を確認できる。埋土は 2 層確認でき、上層は黄灰色 2.5Y4/1 の粘土、下層は上層に褐灰色 10YR4/1 の粘土のブロックが混入している。土師器・須恵器細片が出土しているが、時期を特定できるものはない。

柱穴 16（第 86・102 図） 柱穴 13 の南に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.0m で、検出面からの深さ 45 cm である。掘方は長軸 0.75m、短軸 0.65m で、直径 20 cm の柱痕を確認できる。溝 20 によって切られている。

出土遺物は古代の土師器・須恵器片が少量出土しているが、詳細な時期は判断できない。

土坑 17（第 86・102・103 図） 土坑 19 の南に位置する。検出面の標高 2.4m、底面の標高 2.1m で、検出面からの深さ 30 cm である。残存部で長軸 1.0m、短軸 0.75m である。土師器・須恵器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

土坑 18（第 86・102・104 図） 土坑 17 の東に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.2m で、検出面からの深さ 25 cm である。残存部の幅 0.7m である。埋土は暗黄灰色 2.5Y4/2 と黄灰色 2.5Y4/1 の粘土を 3 層確認できる。古代の土師器細片が出土している。

土坑 19（第 86・102・105 図、図版 8） 柱穴 16 の西 1.0m に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.25m で、検出面からの深さ 20 cm である。残存部の幅 0.55m である。溝 20 によって切られている。

出土遺物には土師器・須恵器が認められる。先述のように、本土坑と柱穴 13 から出土した須恵器杯蓋（17）は同一個体である。20 は暗文土器の皿である。色調は橙色である。内面には幅 1 mm 未満の放射状暗文が施される。暗文の施文方法などから、畿内産土師器を在地で模倣したものと考えられる。時期は平城宮II～IIIに位置づけられる（早渕 1999）。

本土坑の所属時期は、出土遺物から平城宮II～IVとみられる。

土坑 22（第 86・102・106 図） 柱穴 14 の南 1.4m に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 15 cm である。残存部の幅 0.4m である。溝 20 によって切られている。埋土は暗灰黄色 2.5Y4/2 の粘土である。遺物はみられない。

掘立柱建物の可能性が高い柱穴 11～14・16 は、現状で長軸 3 間 × 短軸 1 間が認められる。建物の方角は長軸から N97° W である。柱穴間の距離は長軸で西から 1.0m、1.7m、1.7m、短軸は 1.7m である。長軸西端では柱穴の間隔が狭い場所がみられるため、庇付建物の可能性や、複数の掘立柱建物が重複している可能性も考えられるが、この範囲だけで判断することは難しい。

柱穴周辺の土坑 17～19・22 は、柱痕は検出されていないが、埋土は柱穴群と類似しており、掘立柱建物に伴う柱穴あるいは関連遺構の可能性がある。

柱穴から出土した須恵器は平城宮II～IVの時期幅におさまり、実年代は紀年木簡の検討から 730 年



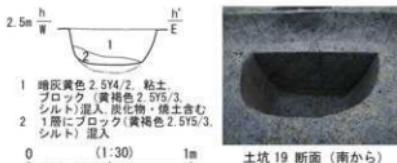
土坑 17 断面（北から）

第103図 土坑 17

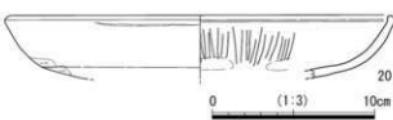


土坑 18 断面（北から）

第104図 土坑 18



土坑 19 断面（南から）



番号	遺構	器種	法量(cm)		文様・調整(外/内)	色調(外/内)	粘土	調査区
			口径	底部				
20	土坑19	土師器・杯	23.4	—	ナデ/暗文、ユビオサエ	橙SYR6/6.／橙SYR7/6	微細	南区

第105図 土坑 19

から 765 年頃とされる（西 1986）。加えて、出土遺物がない柱穴も埋土が類似しており、同時期の可能性が高いと考えられる。よって、本掘立柱建物の所属時期は 8 世紀代といえる。



第106図 土坑 22

(4) 包含層

7層出土遺物（第107図、図版8） 21～29は弥生土器である。21は胴部であろうか。刻目を有する貼付突帯文をもつ。内面調整はナデである。弥生時代I～3・4様式に相当する。22は壺の胴部である。刻目を有する貼付突帯文が胴部最大径に1条めぐる。調整は外面が刷毛目、内面がユビオサエである。弥生時代I～3・4様式に相当する。23は壺の口縁部である。弥生時代I～3・4様式であろうか。24は壺の胴部上半である。頸胴部境界付近に籠描沈線文が8条施される。内面調整はナデである。籠描沈線文が多条化していることから弥生時代I～3・4様式に相当する。25は蓋である。内面調整はナデである。弥生時代I様式であろうか。26は胴部で、最大径は24.2cmである。胴部上半に上から三角形刺突文2段、籠描沈線文10条前後、三角形刺突文1段が施される。弥生時代I～3・4様式と判断される。27は壺の胴部上半である。調整は内外面ともに刷毛目とナデである。弥生時代I様式であろうか。28・29は底部である。28の底部復元径は8.0cmである。内面調整はナデ、ユビオサエである。29の底部復元径は8.0cmである。調整は外面が刷毛目とナデで、内面はナデである。

7層の出土土器は、弥生時代I～3・4様式が中心となる。

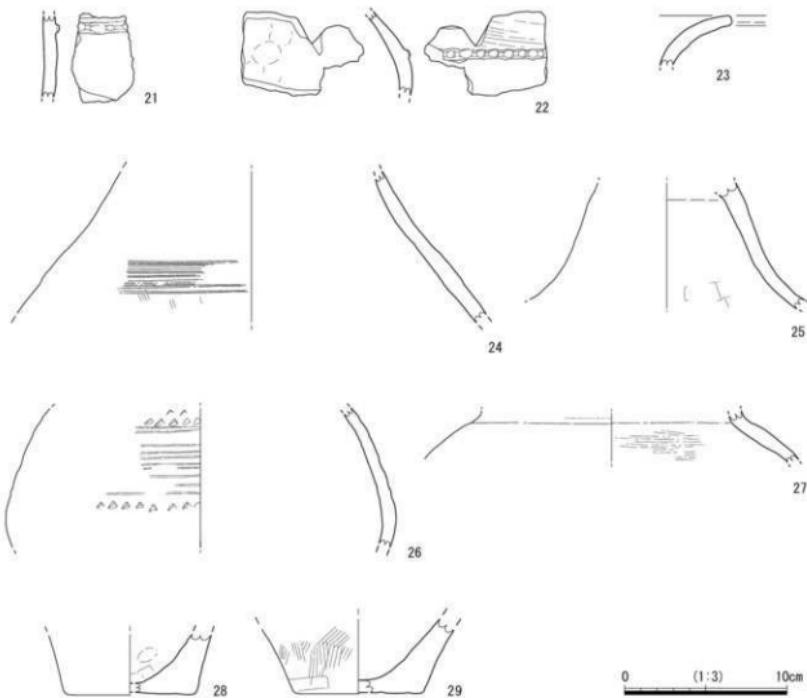
6・7層出土遺物（第108図、図版8） 30・31は弥生土器である。30は胴部片であろうか。刻目を有する貼付突帯文をもつ。内面調整はナデである。弥生時代I～3・4様式に相当する。31は壺の底部と考えられる。外面調整は刷毛目のちミガキである。胎土には砂粒が多く含まれる。弥生時代I様式と考えられる。

6層出土遺物（第109図、図版9） 32は朝鮮半島無文土器時代後期の円形粘土帶土器に影響を受けた土器の可能性がある。内外面にはわずかに刷毛目の痕跡がみられる。口縁部の粘土帶は貼付けられた痕跡がみられる。粘土帶上にわずかにユビオサエが残る。弥生時代I～3・4様式前後であろうか。33は口縁部である。調整は内外面ともに刷毛目である。34・35は高杯の杯部あるいは鉢であろうか。34は内外面が風化しており、調整は不明である。35の内面調整はミガキが部分的に残る。外面は風化し調整は不明である。36～38は弥生土器の底部である。36の底部復元径は8.8cmである。調整は外面が刷毛目のちナデ、内面はナデ、ユビオサエがみられる。37の底部径は6.7cmである。38は上底状を呈する。底部径は6.7cmである。外面は刷毛目、内面はミガキである。36～38の時期は弥生時代前期から中期と考えられる。

39は須恵器の甕頸部とみられる。調整は外面がタタキ、内面は回転ナデと、ミガキ状の不明調整がみられる。

基本層序で述べたように、6層は基本的に7層と同層であり、その形成時期は弥生時代I～2～3・4様式に位置づけられる。そのため、33～35・39などは5層以上の包含層や遺構からの混入と考えられる。

4層出土遺物（第110図、図版9） 40は古代の土師器甕であろうか。復元口径は20.0cmである。口縁部は長く外反する。口縁端部内面はナデによって浅い凹線状を呈する。頸部内面の屈曲部分には稜を有する。41は高杯の杯部もしくは鉢と考えられる。碗形を呈し、口縁端部付近はわずかに外反する。復元口径は19.6cmである。内面調整はミガキが一部にみられる。弥生時代V～VI様式



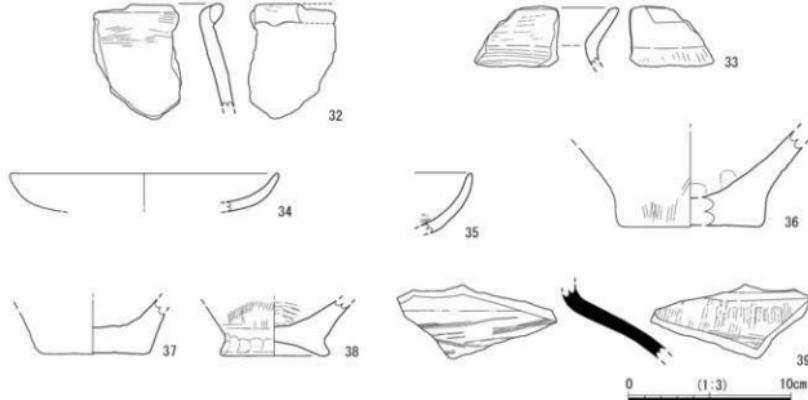
番号	層	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土
			口径	底部	器高			
21	7層	弥生土器・頸部	-	-	-	1条貼付突審文／ナデ	にぶい黄褐色SYR6/4／ にぶい橙SYR6/4	細、石英、長石
22	7層	弥生土器・頸部－壹	-	-	-	1条貼付突審文、刷毛目／ ユビオサエ	にぶい黄褐色SYR6/4／ にぶい黄褐色SYR6/4	小、長石
23	7層	弥生土器・口縁部－壹	-	-	-	-／-	にぶい黄褐色SYR6/4／ にぶい黄褐色SYR6/4	細、長石、角閃石
24	7層	弥生土器・頸部－壹	-	-	-	8条捲拂沈線文、刷毛目／ ナデ	橙SYR6/8／橙SYR6/8	細、長石
25	7層	弥生土器・蓋	-	-	-	-／ナデ	にぶい橙SYR7/4／ にぶい橙SYR6/4	細、長石、角閃石
26	7層	弥生土器・頸部－壹	-	-	-	2段三角形刺突列点文、10条 捲拂沈線文、1段三角形刺突 列点文／-	明褐色SYRS/6／明褐色SYRS/6	小、長石、角閃石
27	7層	弥生土器・頸部－壹	-	-	-	刷毛目、ナデ／刷毛目、ナデ	にぶい橙SYRS/4／ にぶい橙SYRS/4 明褐色SYRS/6／ 明褐色SYRS/6	細、長石、雲母
28	7層	弥生土器・底部	-	8.0	-	-／ナデ、ユビオサエ	にぶい橙SYR6/4／ にぶい橙SYR6/4	小、長石、角閃石
29	7層	弥生土器・底部	-	8.0	-	刷毛目、ナデ／ナデ	にぶい橙SYR6/4／ にぶい橙SYR6/4	小、長石

第107図 7層出土遺物



番号	層	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
30	6・7層	弥生土器・頸部	-	-	-	1条粘付突帯文／ナデ?	橙7.5YR6/6／橙7.5YR6/6	小、長石	南東区
31	6・7層	弥生土器・底部一隻?	-	9.8	-	刷毛目、ミガキ／-	にぶい橙SYR6/4／ にぶい橙SYR6/4	小、長石	南東区

第108図 6・7層出土遺物



番号	層	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
32	6層	朝鮮平島系無文土器・ 口縁部一隻	-	-	-	刷毛目／刷毛目	明赤褐2.5YR5/8／ 明褐7.5YR5/6	小、長石	南東区
33	6層	弥生土器・土師器・ 口縁部一隻	-	-	-	刷毛目／刷毛目	橙7.5YR6/6／橙7.5YR6/6	微細、長石	南東区
34	6層	弥生土器・土師器・ 口縁部一隻/鉢	16.5	-	-	-	橙SYR6/6／橙SYR6/6	微細	南東区
35	6層	弥生土器・土師器・ 口縁部一隻/鉢	-	-	-	-／刷毛目、ミガキ	橙7.5YR6/6／橙SYR6/6	微細	南東区
36	6層	弥生土器・底部	-	8.8	-	刷毛目、ナデ／ ナデ、ユビオサエ	橙SYR6/6／ 明赤褐5YR5/6	小、長石、角閃石	南東区
37	6層	弥生土器・底部	-	6.7	-	-	にぶい黄褐10YR6/4／ にぶい褐7.5YR5/3	小、長石、角閃石	南東区
38	6層	弥生土器・底部	-	6.7	-	刷毛目、ナデ、ユビオサエ／ ミガキ	橙SYR6/6／橙SYR6/6	小、長石	南東区
39	6層	須恵器・頸部一隻	-	-	-	タタキ、ナデ／ナデ	灰白N7.0／灰白N6/0	微細	南東区

第109図 6層出土遺物

番号	層	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	高さ				
40	4層	土師器・口縁部・壺	20.0	—	—	ナデ、刷毛目／刷毛目、ナデ、ユビオサエ	褐色SYR6/6／褐色SYR7/6	微細、長石	南区
41	4層	弥生器？－高杯・鉢	19.6	—	—	ナデ／刷毛目、ヘラミガキ	明黄褐色YR6/6／褐色YR7/6	細、長石	南東区
42	4層	須恵器・口縁部・壺	9.0	—	—	ナデ／ナデ	灰白N7/0／灰白N7/0	微細	南東区

番号	遺構	器種	法量(cm)			重量(g)
			長	幅	厚	
43	4層	刀子？	3.4	1.9	0.5	46

第110図 4層出土遺物

であろうか。

42は須恵器の壺口縁部と考えられる。復元口径は9.0cmである。口縁部は外反し、端部は上方に肥厚する。口唇部は面をなす。平城宮VI前後で、実年代は8世紀後半とみられる。

43は鉄製刀子であろうか。時期は不明である。

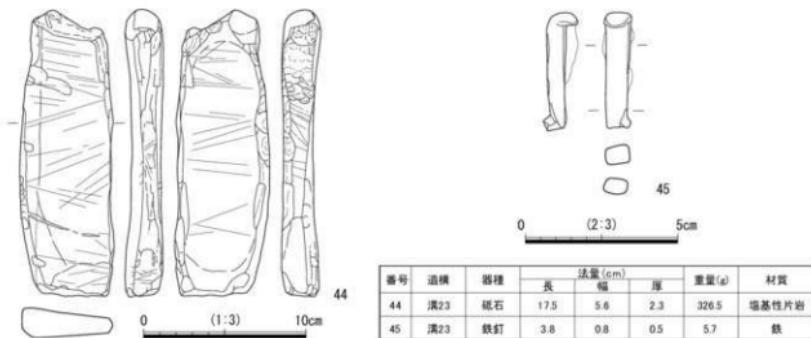
4. 第1遺構面の遺構と遺物

(1) 溝

溝23（第78・86・111図、図版9） 西区の南端に位置し、南西-北東方向にのびる。溝の北側のみを検出している。近世に相当する3層中で検出され、検出面の標高2.45mである（第78図）。残存長5.5m、幅1.2～2.5m、底面の標高1.8～2.3mで、検出面からの深さ15～65cmであり、南へ向かうにつれて深くなる。埋土は単層である。

埋土から、土師器・須恵器・磁器片・砥石・鉄釘などが出土している。44は砥石である。側面をみると、上下端が厚く中央部に向い薄くなる。石材は塩基性片岩である。45は鉄製の和釘で、時期は近世である。

本溝の所属時期は検出層位・出土遺物から近世と判断される。



第111図 溝23出土遺物

5.まとめ

本調査地点は、555 m²と狭い調査面積であったが、重要な成果を得ることができた。

第3遺構面で検出された溝28～30・32は、弥生時代I～II様式の用水路である可能性が高い。本調査地点の北東に位置する第26次調査地点（大塚講堂改修地点、第4章）においても、同時期と考えられる溝1～3が検出されており、これらは一連の用水路であった可能性がある。また、本地点の南に位置する第27次調査地点（立体駐車場新営地点）では、旧河道から分岐し北流する溝（用水路）を確認している（端野ほか2015）。溝の底面の標高に注目すると、第27次調査地点は2.1mで、その北に位置する本調査地点は1.7～1.9m、さらに北東に位置する第26次調査地点は1.2～1.3mである。これらの値からみて、第27次調査地点の旧河道を基点に、南から北東方向への用水路群の水流が復元される。この復元が正しいとすれば、本遺跡の北東域にも弥生時代I～II様式の水田域が存在する可能性が考えられる。

第2遺構面では8世紀代と考えられる掘立柱建物を検出した。これに関連する柱穴や周辺の土坑からは、8世紀代の須恵器杯蓋に加え、近畿産土師器を模倣した暗文をもつ皿が出土している。暗文土器は官衙関連施設において使用された可能性が指摘されている（早瀬2015など）。なお、本調査地点の西側に位置する庄遺跡・加茂名中学校地点の掘立柱建物や竪穴住居、土坑から、類似する暗文土器や須恵器が出土している点（勝浦1996）は注目される。

(脇山)

文献

- 端野晋平・三坂一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・藏本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1, 43-97.
- 早瀬隆人, 1999. 徳島県内における古代土器様相：川端遺跡出土土器の位置づけ、金泉寺遺跡・川端遺跡：徳島県中央構造線断層帯調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第32集、徳島県埋蔵文化財センター、徳島、pp. 122-129.
- 早瀬隆人, 2015. 阿波国古代南海道：官衙関連遺跡からの推定、徳島県埋蔵文化財センター紀要真朱11, 57-70.
- 北條芳隆（編）、1998. 庄・藏本遺跡1：徳島大学藏本キャンパスにおける発掘調査、徳島大学埋蔵文化財調査報告書第1巻、徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島。
- 勝浦康守, 1996. 庄遺跡：学校施設建設工事、徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6、徳島市教育委員会、徳島。
- 中村豊, 2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年、田崎博之（編）、突蒂文と遠賀川、土器持寄会論文集刊行会、愛媛、pp. 471-498.
- 西弘海, 1986. 土器様式の成立とその背景、真陽社、京都。
- 大西浩正（編）、1990. 黒谷川郡頭遺跡V、徳島県教育委員会、徳島。
- 定森秀夫・中村豊（編）、2005. 庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書、徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島。
- 菅原康夫・瀧山雄一, 2000. 阿波地域、菅原康夫・梅木謙一（編）、弥生土器の様式と編年、四国編、木耳社、東京、pp. 11-130.

第7章 総括

本書では庄・藏本遺跡の第24～26・28・29次調査の報告を行った。以下に時代ごとの主な調査成果をまとめ総括としたい。

第1節 弥生時代

1. 前期中葉

(1) 水田

時期 第2・5章で層位および出土遺物の検討を行った結果、第24・28次調査で検出された水田の所属時期は、ともに弥生時代前期中葉(I-2様式)に位置づけられる可能性が高いことがわかった。

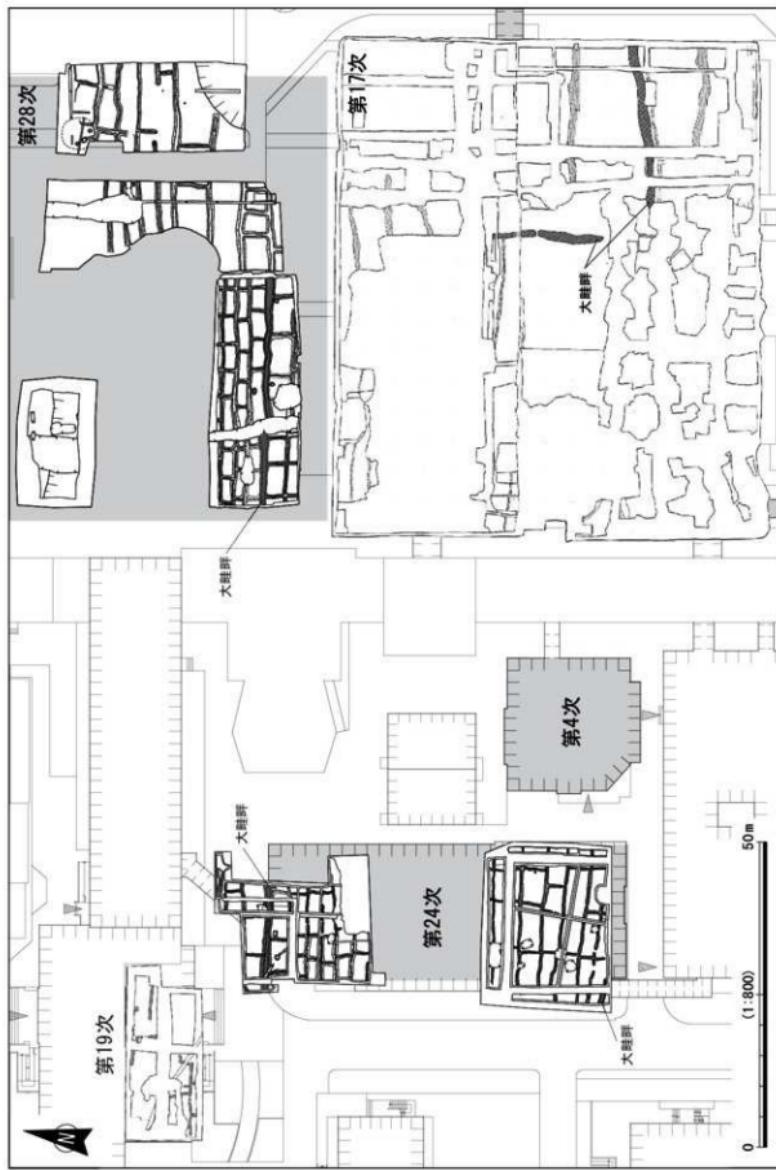
周辺の地形 庄・藏本遺跡は、鮎喰川右岸の扇状地に位置し、南側は眉山を背にする(第1図)。本遺跡や名東遺跡周辺で検出された旧河道は、鮎喰川の旧分流の一部と考えられている。また弥生時代初頭の居住域は、これらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に立地したと想定されている(古田1996・2005)。本遺跡は、概ね南西から北東に向けて緩やかに標高が低くなる傾向があり、実際には微高地や谷状地形などの微細な起伏を有する。水田や用水路はこういった地形を利用し造成されている。

水田域 本遺跡で水田が確認された地点を第112図に示した。本書で報告した第24・28次調査のほかに、第17次調査(中村2000b)と第19次調査(中村2009)においても前期中葉と考えられる水田が検出されている。なお、第4次調査では水田は検出されていないが、本来は存在した可能性がある(中村編2010)。以上より、本遺跡では少なくとも4地点において前期中葉と考えられる水田が確認され、水田域は遺跡東半の中央付近に広がっていたことが明らかになった。さらに、東側に隣接する南藏本遺跡では、前期中葉～前期末・中期初頭の水田が検出されており(近藤編2014)、ここまで水田域が広がることがわかっている。

また、検出された水田面やその周囲の標高をみると、第24次調査地点では、水田面は南側(標高1.80～1.85m)から北側(標高1.55～1.60m)に向け緩やかに低くなる傾向がみられる。一方、第28次調査地点では北西隅の微高地(標高1.80m)の南に接し谷状地形(標高1.50m)が検出され、そこから南東隅の自然落ち込み(上端の標高1.10m、下端の標高0.30m)に向け緩やかに傾斜する。仮に、検出された水田面の標高が、機能時の標高をある程度とどめているとすれば、水田への給水経路を復元する手がかりとなる。

畦畔 第24・28次調査の水田は小区画水田に分類される。区画の形態は東西方向を長辺とした長方形のものがもっとも多く、正方形に近いものも含まれる。区画の面積は4～29m²程度の幅があり、なかでも10～14m²のものが多くみられた。とくに第24次調査では、水田面が南から北に傾斜し、標高が低い北側では、南側に比べ水田区画の面積が小さい傾向にあることがわかった。

さらに、大畦畔を検出することができた点は特筆される。第24次調査北区と第28次調査B区の



第117図 庄・森木遺跡の水田域



第113図 庄・藏本遺跡弥生時代前期の遺構配置図（中村 2002a を引用・改変）

大畦畔、第24次調査南区と第17次調査区の大畦畔は、東西方向にはほぼ一直線上にのびるため、それぞれ一連のものである可能性がある（第112図）。

（2）旧河道と用水路

水田が機能していたと考えられる弥生時代前期中葉前後における旧河道と用水路を以下に概観する。参考のため、2002年までの本遺跡周辺における弥生時代前期の遺構配置図を第113図に示している（中村 2002a）。2002年以降の調査成果（第2図）を合わせると、本遺跡の南半を東流する旧河道（第5・13・15・16・27次調査）と、ここから分岐する用水路網（第5・9・10・13・15・16・26・27・29次調査など）や井堰（第5・13次調査）が検出され、水田への水の供給システムが判明しつつある。ただし、上述の水田域に直接水を供給した用水路は現在のところ未発見である。

なお、本書で報告した第26次調査の溝1～3および第29次調査の溝27～32は、洪水起源砂層を除去した「暗褐色粘質土層」上面から検出されており、弥生時代前期中葉に位置づけられる可能性が

高い。両地点の溝は本遺跡北西部に位置し、底面の標高や周辺の地形からみると、ともに南西から北東への水流が想定される。これらの溝は数条が隣接して並行にのびる点からも用水路としての機能が推定される。水の供給先は、第28次調査の水田や、未調査である本遺跡北東部が想定され、今後当該域において水田や畠が検出される可能性があろう。

(3) 出土遺物

第28次調査では、水田面と同様に暗褐色粘質土層上面から自然落ち込みが検出され、その埋土下層（2層）から炭化鱗茎付着土器（第66図-11）が出土している。胴部片であるため、土器自体からその時期を判断することはできない。しかし、埋土上層（1層）に突帯文・遠賀川併行期～前期中葉の土器（第66図-13）が含まれる点から、炭化鱗茎付着土器もこれに近い時期の所産と考えられる。これまで縄文時代の炭化鱗茎付着土器は知られていたが（佐々木2014）、弥生時代の事例は初であり、当時の食生活を知るうえで重要な資料といえよう。現在、炭化鱗茎の同定および年代測定を実施しており、別稿で結果を報告する予定である。また、同地点出土では、刃部に光沢面が観察される粗製剥片石器（第64図-1）が出土しており、イネ・アワ・キビなどの植物栽培との関連性が注目される。

2. 前期末・中期初頭

弥生時代前期末・中期初頭に位置づけられる可能性がある遺構として、第29次調査の溝1001があげられる。また、同地点の洪水起源砂層である7層から前期末・中期初頭の土器、同じく洪水起源砂層にあたる6層からは、朝鮮半島の円形粘土器の影響を受けたと考えられる土器（第109図-32）が出土している。

3. 後期・終末期

弥生時代後期から終末期に位置づけられる明確な遺構は検出されていないが、第26次調査の旧河道1などで当該期の土器（第42図）が出土している。

第2節 古墳時代以降

1. 古墳時代

第26次調査で井戸が1基（井戸1）検出されている。著しい湧水のため埋土を完掘することは不可能であったが、井戸のなかほどから、古墳時代前期前半の布留0～1式期に相当するほぼ完形の壺（第46図-24）が出土している。井戸の廃棄に伴う祭祀の痕跡の可能性がある。

ほかに、第29次調査の土坑1004から布留2式期前後の壺（第95図-15）、溝1003から弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる柳葉形の鉄鏹（第88図-6）、第26次調査の旧河道1から6

世紀代の須恵器数点（第43図）が出土している。

2. 古代・中世

第29次調査では古代の掘立柱建物を検出した。調査地点の隅で検出されたため、本来の桁行と梁行は不明であるが、現状で3×1間が残存する。柱穴の掘方は長径0.8m程度の円形または隅丸方形で、直径10～20cm程度柱痕がみられる。埋土からは8世紀代の須恵器（第102図）が出土しており、掘立柱建物も同時期の所産と考えられる。既往の調査では、第6次調査（北條編1998）で同時期の掘立柱建物が2棟、第2次調査（定森・中村編2005）で古代から中世にかけての掘立柱建物が2棟検出されている。ほかに、第25次調査では、包含層から9～10世紀代の土師器が出土しており、黒色土器や赤色顔料が塗布されたものが含まれる（第31図）。これらの遺構・遺物の検討を通じ、古代郡衙の実態解明が課題となろう。

本書報告地点では、中世に位置づけられる遺構・遺物はみられなかった。

3. 近世・近現代

第29次調査で近世と考えられる溝23が検出され、埋土から砥石と鉄釘（第111図）が出土している。ほかに、第26次調査の擾乱や第28次調査の表土・擾乱において、近世の肥前系磁器、瀬戸美濃系陶器、大谷焼燈明具、備前焼燈明皿（第48・73図）などが出土している。また、第28次調査の表土・擾乱から、徳島大学病院の閑連機関である厚仁会と記されたであろう戦後の硬質陶器（第73図-25）が出土している。

（三阪）

文献

- 古田昇, 1996. 徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程. 立命館地理学8, 61-72.
- 古田昇, 2005. 多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野. 平野の環境歴史学. 古今書院, 東京, pp.209-246.
- 北條芳隆（編）, 1998. 庄・藏本遺跡1：徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査. 徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第1巻. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 近藤玲（編）, 2014. 南蔵本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊. 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第84集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 工業善通, 1991. 水田の考古学. 東京大学出版会, 東京.
- 中村豊, 2000a. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之（編）, 突蒂文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 爰媛, pp.471-497.
- 中村豊, 2000b. 庄・藏本遺跡発掘調査概要：新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査. 徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 中村豊, 2002a. 縄文から弥生へ. 徳島考古学論集刊行会（編）, 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp.245-258.

- 中村豊, 2002b. 前期末・中期初頭の諸問題：徳島地域, 第16回古代学協会四国支部研究大会事務局（編）, 第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集：弥生時代前期末・中期初頭の動態, 古代学協会四国支部, 愛媛, pp. 75-98.
- 中村豊, 2009. 医療系総合実験研究棟II期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果, 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1, 1-10.
- 中村豊（編）, 2010. 庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書, 体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺, 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 中村豊（編）, 2011. 庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書, 弓道場建設に伴う立会調査報告書, 徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 定森秀夫・中村豊（編）, 2005. 庄（庄・藏本）遺跡：徳島大学藏本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書, 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 佐々木由香, 2014. 縄文人が利用した球根類, 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館（編）, ここまでわかった！縄文人の植物利用, 新泉社, 東京, pp. 34-37.
- 田崎博之, 2002. 日本列島の水田稲作: 紀元前1千年紀の水田遺構からの検討, 東アジアと日本の考古学IV: 生業, 同成社, 東京, pp. 73-117.

図 版

図版 1



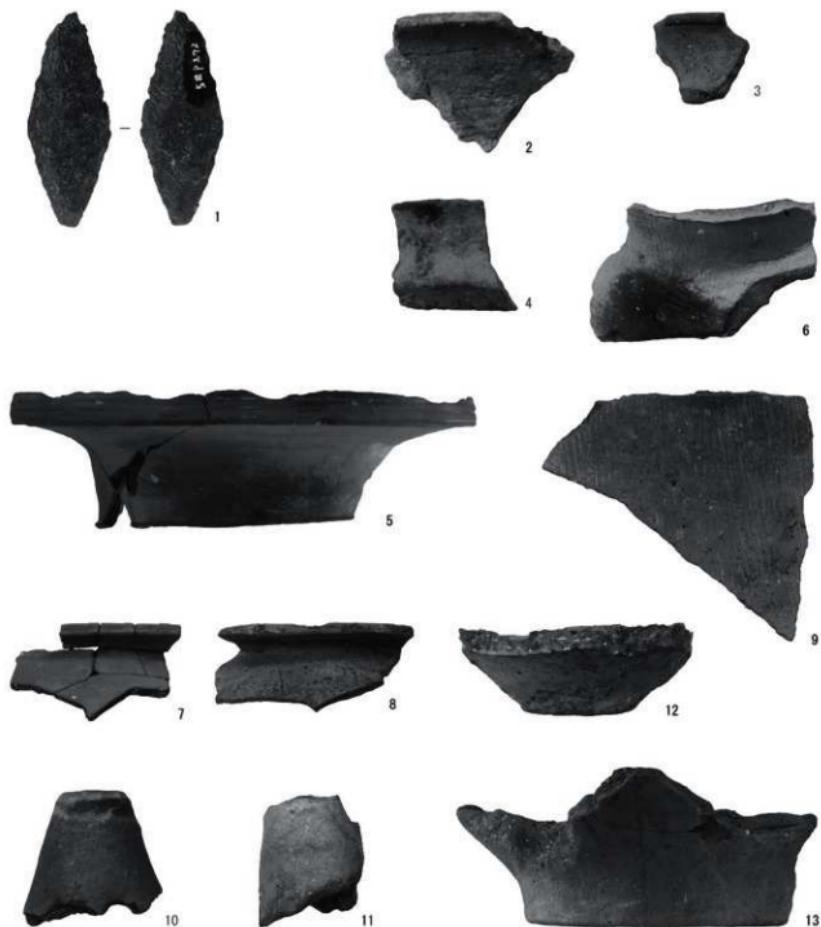
1・3 溝1 2・4 溝2 5～19 包含層・擾乱
[1～16・19 S=1/2 17・18 S=1/1]

図版2



1 旧河道 2・3 自然落ち込み 4~21 包含層 22~24 包含層・擾乱／旧河道
〔1~20・22~24 S = 1/2 21 2/3〕

第25次調査地点出土遺物



1~13 旧河床 1
〔1 S=1/1 2~13 S=1/2〕

第 26 次調査地点出土遺物 1

図版 4



14~22 旧河道 1 23 旧河道 2 24 井戸 1 25~28 搾乱

[14~23 + 25~28 S = 1 / 2 24 S = 1 / 3]

第 26 次調査地点出土遺物 2



1 包含層6・7層 2~10 包含層5層
[1~8 S=1/2 9,10 S=1/1]

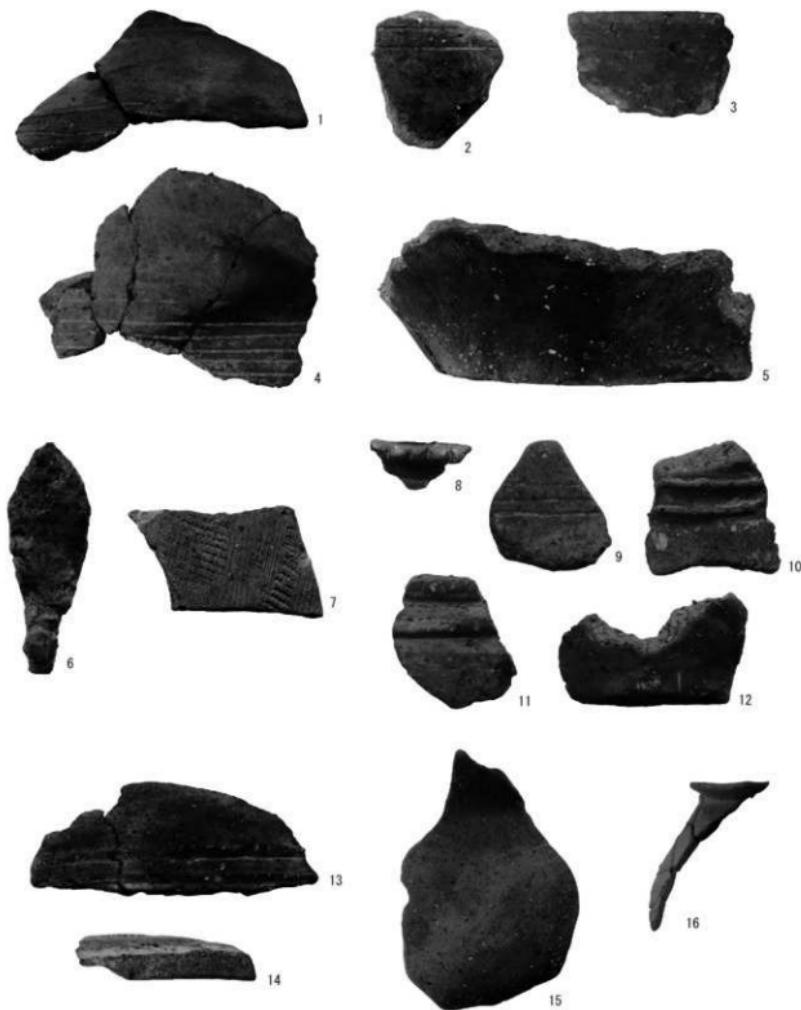
第28次調査地点出土遺物1



11・12 自然落ち込み 2 層 13・14 自然落ち込み 1 層 15・16 包含層 4・5 層

[S=1/2]

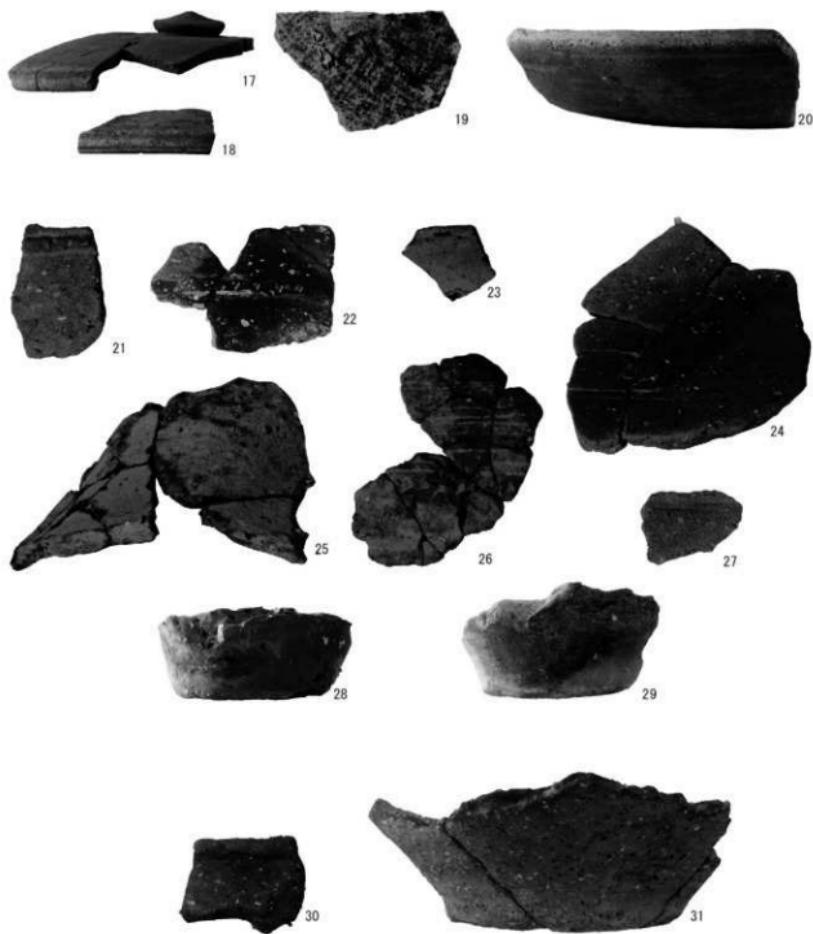
第 28 次調査地点出土遺物 2



1 溝 29 2 溝 30 3~5 溝 1001 6 溝 1003 7 溝 20 8~12 溝 25 13・14 自然流路 09 15 土坑 1004 16 土坑 01
〔1~5・7~14 S=1/2 6 S=1/1〕

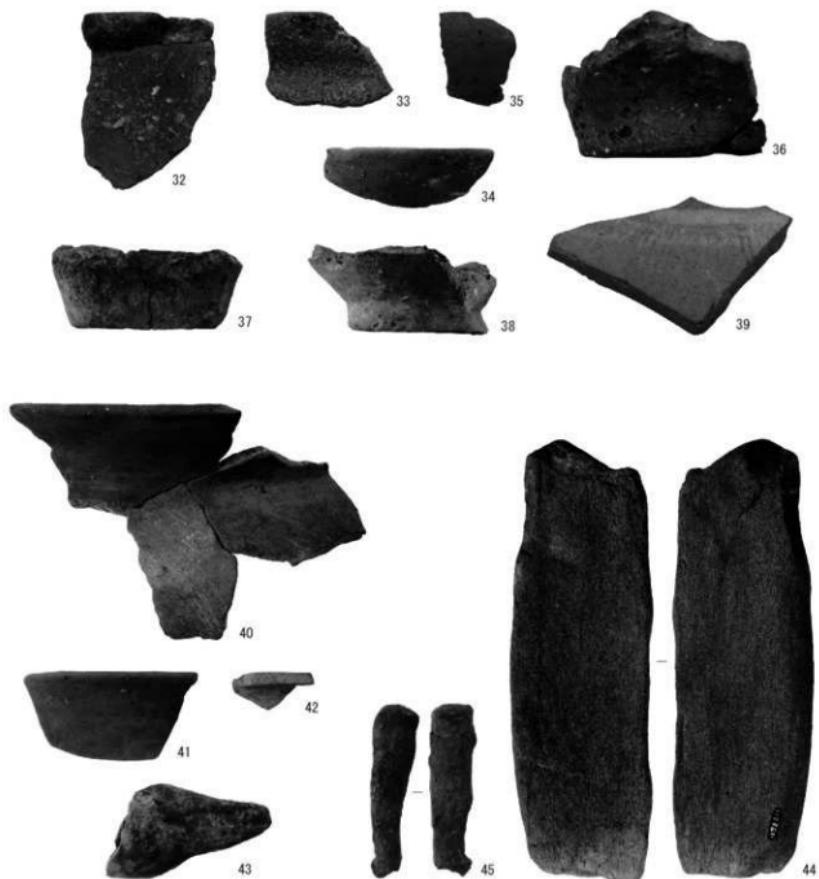
第 29 次調査地点出土遺物 1

図版 8



17 柱穴 13・土坑 19 18・19 柱穴 13 20 土坑 19 21~29 包含層 7 層 30・31 包含層 6・7 層
〔S = 1/2〕

第 29 次調査地点出土遺物 2



32~39 包含層 6 層 40~43 包含層 4 層 44・45 溝 23
〔32~42・44 S = 1 / 2 43・45 S = 1 / 1〕

報告書抄録

ふりがな	しょう・くらもといせき 2							
書名	庄・藏本遺跡 2							
副書名	藤井節郎記念医科学センター新営、附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期、大塚講堂改修、外来診療棟新営、学生支援センター改修							
卷次								
シリーズ名	徳島大学埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第5巻							
編著者名	三阪一徳・脇山佳奈・端野晋平							
編集機関	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒770-8503 徳島市蔵本町2丁目50番地の1 TEL 088(633)7236							
発行年月日	2016年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード	北緯 世界 測地系	東経 世界 測地系	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号							
しょう・くらもと 庄・藏本 遺跡	徳島市 蔵本町 2丁目 50番地 の1 ほか	36201	171・ 173・ 177	34度 4分 31秒	134度 31分 4秒	2011.10.7 ～ 2012.3.14	1800 m ²	藤井節郎記念医科学 センター新営に伴う 埋蔵文化財発掘調査
				34度 4分 34秒	134度 31分 1秒	2011.10.6 ～ 10.26	430 m ²	附属図書館蔵本分館 増築Ⅱ期に伴う埋蔵 文化財発掘調査
				34度 4分 33秒	134度 30分 60秒	2012.4.9 ～ 6.1	1030 m ²	大塚講堂改修に伴う 埋蔵文化財発掘調査
				34度 4分 33秒	34度 8分 31秒	2012.7.2 ～ 2013.1.19	3688 m ²	外来診療棟新営に伴 う埋蔵文化財発掘調査
				34度 4分 31秒	134度 30分 56秒	2012.10.31 ～ 2013.2.5	555 m ²	学生支援センター改 修に伴う埋蔵文化財 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
しょう・くらもと 庄・藏本 遺跡	集落	弥生時代	水田、溝（用水路）	弥生土器、石器（石 鏃・打製石斧）、植 物種実	弥生時代前期の水田 検出。包含層から円 形粘土帯土器出土。			
		古墳時代	井戸	土師器、須恵器、 鉄器（鉄鏃）	井戸から完形の布留 式土器出土。			
		古代	掘立柱建物	土師器、須恵器				
		近世	溝	陶磁器、鉄器（鉄釘）				

2016年3月31日発行

徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第5巻

庄・蔵本遺跡2

—藤井節郎記念医科学センター新館、附属図書館蔵本分館増築II期、
大塚講堂改修、外来診療棟新館、学生支援センター改修—

編集・発行 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島市蔵本町2丁目50-1 (088)633-7236
<http://tokudaimaibun.jp/>

印 刷 徳島印刷センター
徳島市間屋町165 (088)625-0135

ISBN 978-4-908223-01-3